

日慘慘兮雲冥冥。

日慘慘として雲冥冥。

猩猩啼煙兮鬼嘯雨。

猩猩、煙に啼いて、鬼、雨に嘯く。

我縱言之將何補。

我縱ひ之を言ふも、將た何をか補はむ。

皇穹竊恐不照余之忠誠。

皇穹、竊に恐る、余の忠誠を照らさざるを。

雷憑憑兮欲吼怒。

雷憑憑として、吼怒せむと欲す。

堯舜當之亦禪禹。

堯舜、これに當つて、亦た禹に禪る。

君失臣兮龍爲魚。

君、臣を失へば、龍も魚たり。

權歸臣兮鼠變虎。

權、臣に歸すれば、鼠、虎に變ず。

或言堯幽囚舜野死。

或は言ふ、堯は幽囚し、舜は野死すと。

九疑聯綿皆相似。

九疑聯綿として、皆相似たり。

重瞳孤墳竟何是。

重瞳の孤墳、竟に何にか是れある。

帝子泣兮綠雲間。

帝子泣く、綠雲の間。

隨風波兮去無還。

風波に隨つて、去つて還るなし。

慟哭兮遠望。見蒼梧之深山。

慟哭して遠く望めば、蒼梧の深山を見る。

蒼梧山崩湘水絕。

蒼梧山崩れて湘水絶ゆれば、

竹上之淚乃可滅。

竹上の淚、乃ち滅すべし。

【字解】【一】皇英之二女。娥皇女英を指す、列女傳に「有虞の二妃は、帝堯の二女なり。長は娥皇、次は女英。娥皇は后となり、女英は妃となる」とあり、水經註に「大舜の陟方するや、二妃從征し、湘江に溺る、その神、洞庭の淵、瀟湘の浦に遊ぶ」とある。【二】瀟湘。二水の名、湘水が本流で、瀟水は支流である。そして、二水合流して後に洞庭湖に注ぐので、その落ち口一帯の地を亦た瀟湘といふのである。【三】海水直下。この二句は倒裝の句法で、生死の別、永く相見るの期なく、その苦、海水の深きが如く、萬里にして、なほ底止なきをいふ。【四】慘慘。光なき貌。【五】冥冥。陰晦の貌、楚辭の九嘆に「雲冥冥而暗」とある。【六】猩猩。猿の屬、蜀都賦、猩猩夜啼の註に「猩猩は、交趾の封溪に生ず、猿に似て人面、能く言語す、夜、その聲を聞くに、小兒の啼き呼ぶが如し」とある。【七】皇穹。寡婦賦、仰皇穹兮嘆息の註に「天なり」とある。【八】憑憑。盛に怒る貌。【九】堯幽囚。史記正義に「括地志に云ふ、故堯城は、濮陽鄆城縣の東北十五里に在り。竹書に云ふ、堯、徳衰へ、舜に囚はる。又偃朱故城あり、縣の西南十五里に在り。竹書に云ふ、舜、堯を囚へ、復た丹朱を偃塞し、父と相見ざらしむるなり」とある。王琦は之を論じて「今の竹書、竝にこの荒謬の説なし。意ふに、六朝より起りしならむ。君臣の間、多く慚徳あり、乃ち此辭を偽造し、古聖人、すでに之を行ふものありといひ、以て自ら文り、その過を釋せしか。太白、この事を用ふと雖も、しかも或云を以て其上に冠し、以て其説の信すべからざるを見はす」とあるが、至極尤もである。【一〇】舜野死。國語に「舜、民事を勤めて野死す」とあつて、章昭の註に「野死とは、有苗を征して、蒼梧の野に死せしむる」とある。【一一】九疑聯綿。山海經に「南方蒼梧の邱、蒼梧の淵、その中、九疑山あり、舜の葬るところ、長沙零陵の界中に在り」とあるし、郭璞の註に「山は、今零陵郡營道縣南に在り。その山、九谿皆相似たり、故に

九疑と云ふ。古しへは、その地を總名して蒼梧となすなり」とあるし、述異記に「九疑山は、湘江を隔て、蒼梧の野に跨り、營道縣界に連り、九山相似たり、行くもの、之を望んで疑ふあり、因つて九疑山と名づく」とある。九疑とは朱明、石城、石樓、娥皇、舜源、女英、簫韶、桂林、杞林の九峰である。【三】重瞳。史記の項羽本紀の論贊に「舜も亦た重瞳子」とある。瞳が二つ重つて居ること。【四】帝子。堯の女、即ち娥皇・女英を指す。楚辭、帝子降兮北渚の王逸註にも「帝子は堯女を謂ふ」とある。【五】竹上之淚。述異記に「舜、南巡して蒼梧の野に葬る、堯の二女、娥皇・女英、これを追へども及ばず、相與に慟哭し、涙下つて竹を沾す、竹上の文、斑斑然たり」とある。

【題義】遠別離は、樂府題で、別離十九曲の一である。はじめ、江淹は古別離を作り、簡文帝は生別離を作り、吳邁は長別離を作つたことがあるので、李白の遠別離、久別離も、大抵、これに本づき、即ち別離に就いて、更に品題を設けたのである。しかし、この詩は、頗る諷意があつて、史實に關係して居るので、蕭士贇の説が之を盡して居る。曰く、この篇、前輩、咸な以て、上元間李輔國・張后・制を矯め、上皇(玄宗)を西内に遷せしとき、太白感するあつて作るとなす。余曰く、非なり。この詩の大意、人に國柄を借すなきをいふ。人に國柄を借さば、その權を失ふ、その權を失はば、聖哲と雖も、その社稷妻子を保つ能はず、その禍、必至の勢あり。詩を作る、其れ天寶の末に在るか。按ずるに、唐史高力士傳に曰く、天寶中、帝、かつて曰く、朕、春秋高し、朝廷の細務は宰相に問へ、蕃夷襲附せざれば、諸將寧ろ暇あらざらむや、と。又かつて、大同殿に齋するや、力士侍す。帝曰く、海内、無事、朕將に吐納導引、天下の事を以て、李林甫に附せむとす、若何と。力士對へて曰く、天下の大柄は、

人に假すべからず。威權、すでに振はば、誰か敢て議するものぞ、と。これより、國權、卒に林甫・國忠に歸し、兵權、卒に祿山・哥舒に歸す。太白、時事を熟觀し、言はむと欲すれば、禍の己に及ばむことを懼れ、已むを得ずして、これを詩に形はし、聊か以て、その愛君憂國の誠を致す。謂はゆる皇英の事、詩に之を借り、以て隱喻するのみ。曰く日、曰く皇穹、その君に比するなり。曰く雲、その臣に比するなり。日慘慘兮雲冥冥、君、上に昏くして、權臣下に障蔽するに喩ふるなり。猩猩啼煙兮鬼嘯雨、小人の形容を極めて政亂の甚しきなり。堯舜當之亦禪禹、以下は、乃ち太白が言はむと欲するところの事、權、臣下に歸すれば、禍、必ず至る。その詩意、切直著明、胸臆を流出す。時を識り、世を憂ふるの士、君を懷ひ國に忠なるの心を有するに非ずんば、其れ孰れか能く之に與せむや、と。この説は、頗る允當であつて、乾隆御批も之に従つて居る。沈德潛が居然舊説を主奉して居るの

は、どうしたものか、洵に株守移らざるの譏を免れぬものである。

【詩意】別離、もとより悲むべく、況んや遠く相別るるに於てをや。むかし、娥皇・女英といふ二人の女があつて、その夫たる舜が蒼梧の野に崩せしと聞くや、遠路を厭はず、往いて之に従はむとしたが、竟に相及ばず、傷ましくも、水に溺れて死し、その靈魂は、今でも、洞庭の南、瀟湘の浦の邊に留まつて居る。嗚呼、死離生別、當日の苦は、海水深くして、萬里底止するところなきが如く、萬口一齊、この事を言はぬものはない。帝者巡狩するも、かくの如き凶變があるのに、今日、これと頗る類似した事

があるといふに至りては、まことに浩嘆の外はない。試に見よ、日色慘慘として光なく、浮雲冥冥、四面隱晦、猩猩は夜煙に啼いて、鬼は雨に嘯く。かくの如き满目慘凄の景色は、どうして起つたかといへば、取りも直さず、君臣その地を易へ、上下冠履顛倒したからである。さうすると、往日皇英の舜に於けるが如き、別離の苦に遭ふかも知れぬことと思はれる。我、これを思うて、憂愁堪へず、乃ち其事を述べて、君を諫めむと欲するも、聖上、或は予が忠誠の微衷を察せず、折角の苦言も、何の裨益するところなく、全く無効に終るかも知れない。おもへば、上天、凶徴を降し、迅雷憑憑として吼怒するや、堯舜の聖を以てするも、なほ自ら咎を引き、萬乗の位を禪り、相傳へて、夏禹に及んだ。その禪讓の徳は、まことに偉らいには相違ないが、四海を以て家と爲す時に當り、國柄は、斷じて、うつかりと人に假し與ふべきものではない。何となれば、君にして臣を失へば、孤立援なく、龍も亦た魚に異ならず、翻つて又、大權その臣に歸すれば、勢敵異常、鼠も變じて虎となる。君臣上下の別は、儼として動かすべからず、大權は、容易に移動すべき筈のものではない。されば、かの堯舜の事にして、も、古しへは、禪讓の徳を以て之を稱して居るが、その間、聊か怪むべきものがある。或人の説に、堯は位を禪つたのではなく、舜の爲に拘囚せられて死し、舜は服せざるものを伐ち、未だ其功を成すに及ばずして、蒼梧で野たれ死をして仕舞つたとある。萬一この事ありとすれば、堯が舜を擧用したのは善いが、これを信任するに過ぎたからでもあらうし、舜も亦た内廷の事を以て禹に託し、自ら外に勞苦

し、やがて歸るにも歸られなく成つたからでもあらうか。堯の事は、しばらく之を措き、かの舜の死は、まことに慘痛の極である。九疑の山は、聯互して、峰容互に相類似し、重腫として知られたる虞舜が骨を埋めたのは、何處であるか、もとより分らない。現に其當時に於てさへ、娥皇・女英が跡を追つて来て、綠雲の間に哭泣し、その身も亦た湘水に溺れて死し、その遺骸は、風波に隨つて漂はされ、決して還つて來ることは無かつた。今日、これを弔うて、慟哭しつつ、偶ま仰いで眺めやれば、蒼梧の深山、依然として、天際に聳ゆるを見るだけで、遺恨綿綿、もとより絶ゆる時とはなく、蒼梧の山にして崩れ、湘江の水にして絶えざる限り、二女が竹上の涙痕は、遂に滅することはなく。これを要するに、帝者が國柄を人に假したり、或は漫然外に出でたりすれば、凶變忽ち起り、遂に社稷妻子を保つことが出來ず、徒に後人をして咨嗟せしめるだけである。

【餘論】一篇の文字、遠別離を以て題となし、娥皇・女英の事を述べては居るが、必ずしも之に拘泥せず、付かず離れざるの間に於て、新意を逗露し、隱晦出入、頗る姿致があつて、太白の才に非ざれば、斷じて出來ないことである。結末二句、蒼梧山崩湘水絶、竹上之涙乃可滅は、白居易の長恨歌、天長地久有時盡、此恨綿綿無絶期と全く同じ意味であるが、眞然として別趣ある處に著目して、仔細に玩味せねばならぬ。乾隆御批の言に「これは、天寶の將に亂れむとするを憂へ、その忠誠を抒べむと欲して得べからざるなり。日は君の象、雲、盛なれば、その明を蔽ふ。啼煙嘯雨、陰晦の象甚し。詩に

云ふ、蒼兮蔚兮、南山朝隲と。小人の勢、かくの如きに至る、政事尙ほ問ふべけむや。屈平曰く、理弱而媒拙兮、恐導言之不固。又曰く、閨中既遠遠兮、哲王又不寤と。白、疏んせられし人を以て、言はむと欲するも、何ぞ補はむ。しかも、忠誠懈らざること、かくの如し。これ立言の本、龍魚・虎鼠を指すの喩、亦た楚辭及び説苑に本づき、兼ねて、客難中の語を用ふ。比類陳詞、深切著明なるものと謂ふべしとある。ここに謂ふ楚辭とは、神龍失レ水兮爲二螻蟻之所裁の句を指し、客難とは東方朔の作に係るもので、これを用ふれば虎となり、用ひざれば鼠となるの句を指したのである。説苑は有名なる白龍魚服の故事で、原文は大分長いが、念の爲に引抄して置かう。曰く、吳王、民に従つて酒を飲まむと欲す。伍子胥、諫めて曰く、不可なり。むかし、白龍、清冷の淵に下り、化して魚となる。漁者豫且、射て其目に中つ。白龍、上つて天帝に訴ふ。天帝曰く、この時に當つて、若、いつくにか置いて形する。白龍曰く、我、清冷の淵に下り、化して魚となる。天帝曰く、魚は固より人の射るところなり、かくの若くならば、豫且何ぞ罪あらむと。夫れ白龍は天帝の貴畜なり、豫且は宋國の賤臣なり、白龍化せざれば、豫且射らず。今萬乗の位を棄て、布衣の士に従つて酒を飲む、臣、恐らくは、豫且の愚あらむを。王乃ち止む。御批の言は、蕭士贇の所説と合せて、頗る參核に資すべきものである。なほ劉辰翁は曰く、參差屈曲、幽人の鬼語にして動盪自然、長吉の苦なし。楊載は曰く、波瀾開闔、江河の波、一波未だ平かならず、一波復た起るが如し。又兵家の陣、方以て正と爲し、又復た奇と爲し、

方以て奇と爲し、忽ち復た是れ正なるが如し。出入變化、紀極すべからず。范德機は曰く、この篇、最も楚人の風あり。楚言に貴ぶところは、斷えて復た斷ゆるが如く、亂れて復た亂るるが如く、しかも、辭意反覆屈折、その間に行くものは、實に未だ斷えて亂れざるなり、人をして、一唱三嘆せしむ。しかも、遺音、涙を收めて謳吟し、又以て夫の三綱五典の重きを興すに足るものあり、豈に虚ならむや。これ太白の及ぶべからずと爲す所以なり。胡震亨は曰く、この篇、舜の二妃、舜を追へども及ばず、涙、湘竹を染むるの事を借りて、遠別離の苦を言ひ、并に竹書雜記の、舜禹に逼まられて南巡野死するの説を借り、その間に點綴し、以て人君權を失ふの戒を著し、その詞をして、閃幻駭くべく、奇險の趣を増さしむ。蓋し、體、楚騷に幹して、韻は漢の鏡歌諸曲に調して以て成り、一家の語を爲す。これを參觀すれば、當に其源流の自るところを得べし。高標は曰く、これ太白時を傷む、君子位を失ひ、小人事を用ひ、以て喪亂を致す。身、江湖の上に在り、往いて救はむと欲するも可ならず。忠諫の従ふなきを哀み、憤疾を舒べて作るなり。李東陽は曰く、古律詩、各、音節あり、然れども、皆字數に限られ、これを求むること難からず。樂府長短句、最も調疊し難し。然れども、亦た自然の節あり。太白の遠別離、子美の桃竹杖の如き、皆その操縦を極む。曷ぞ嘗て古人の聲調を按ずるのみならむや。しかも、自ら和順委曲。沈德潛は曰く、中に言はむと欲して、明言すべからざる處あり。故に弔古に託し、以て之を抒べ、屈折反覆、離騷の旨なりと。讀者は、この一篇を見て、李白の樂府は、

徒に古を慕するものに非ず、純ら忠誠の意を以て、當時の事勢を述べ、杜甫の詠史諸作と全く異曲同工なることを知了すべきである。

公無渡河

公無渡河

黃河西來決崑崙。

黃河、西より來つて崑崙を決し。

咆哮萬里觸龍門。

咆哮萬里、龍門に觸る。

波滔天堯咨嗟。

波は天を滔して、堯咨嗟す。

大禹理百川兒啼不窺家。

大禹、百川を理め、兒啼けども家を窺はず。

殺湍湮洪水九州始蠶麻。

湍を殺いで、洪水を湮め、九州始めて蠶麻。

其害乃去茫然風沙。

其害乃ち去つて、風沙に茫然たり。

被髮之叟狂而癡。

髮を被るの叟は、狂にして癡なり。

清晨臨流欲奚爲。

清晨流に臨んで、奚をか爲さむと欲する。

傍人不惜妻止之。

傍人惜まず、妻之を止む。

公無渡河苦渡之。

公、河を渡ること無かれ、苦んで之を渡る。

虎可搏河難馮。

虎は搏つべきも、河は馮し難し。

公果溺死流海湄。

公、果して溺死して、海の湄に流る。

有長鯨白齒若雪山。

長鯨の白齒、雪山の若きあり。

公乎公乎挂罥於其間。

公や、公や、其間に挂罥す。

箜篌所悲竟不還。

箜篌の悲むところは、竟に還らず。

【字解】

【一】黃河 近世探險の結果、源を巴顏喀喇山脈の北麓より發し、一たび星宿海に入つて、それから又溢出することが判明したが、むかしは、唯だ漠然と崑崙山から出ると考へて居た。【二】決 衝き崩す。【三】咆哮 吠え嗥ける、水聲の凄しきを形容して云ふ。【四】龍門 黃河が急に直下する處で、さながら瀑布の形をして居る。張齊賢の註に「山海經、穆天子傳、淮南子、桑欽、酈道元の諸書、皆曰く、河は崑崙の墟に出で、色白し、地中に潛流し、衆の渾濁を受く、故に色黃と。河は、積石より燉煌、酒泉、張掖郡の南を過ぎ、東して、隴西の河關縣を過ぎ、洮水と合し、又東して、金城允吾縣の北を過ぎ、又東流して天水・安定・北地・朔方郡を經、東して、渠搜縣の北に轉じ、南流して、五原郡の南を過ぎ、東して、雲中郡を過ぎ、南して、定襄西郡の東を過ぎ、又南して、上郡の西を過ぎ、然る後、龍門に至る。積石より龍門に至るまで、三千餘里」とあるし、蕭士贊の註に「山海經に、河源は崑崙の山に出づ。桑欽の水經に、崑崙の墟は西北に在り、嵩高を去ること五萬里、地の中なり、その高さ萬一千里、河水は、その東北陔に出で、屈して、その東南より流れて、渤海に入る。又海外に出で、南して積石山下に至る。石門あり、河水冒して、以て西南に流る。成公綏の大河賦に覽百川之弘壯、莫尚美於黃河、潛崑崙之峻極、出積石之嵯峨、登龍門而南遊兮、拂華陰與三曲阿、凌砥柱而激湍兮、踰納洛而揚波と。禹貢に「河を積石に導いて龍門に至る」とある。龍門は山名。今の陝西西安府韓城縣の東北五十里に在る。黃河、そ

の間を經、兩岸對峙、高さ數百尺、これを望めば門の若し。水經註には「その崩浪萬尋、懸流千丈、渾洪轟怒、鼓して山の騰るが若し」といひ、李復も「禹、龍門を鑿つて、東受降城の東に起り、北よりして南す。兩岸石壁峭立、太河、山峽の間に盤東せらるること千數百里。ここに至つて、山開け、岸濶く、豁然奔放、怒氣風を噴き、聲、萬雷の如く、その險、暗るべし」といつて居る。【五】滔天。天にはびこる、水漲つて天に接するをいふ。【六】理。治に同じ、唐の高宗の諱治を避けて、この字を用ふる様に成つた。【七】兒啼不窺家。列女傳に「塗山氏の長女、夏禹、娶つて以て妃となす。すでに啓を生み、辛壬癸甲、啓、呱呱として泣く。禹、去つて水を治め、三たび其家を過ぐるも、其門に入らず」とある。【八】湍。急流。【九】湮。塞ぐ。【一〇】九州。禹が水を治めし後、支那全土を區劃して、冀・兗・青・徐・荆・揚・豫・梁・雍の九州とした。【一一】蠶麻。蠶を養ひ麻を種う。田業に次いで紡績を爲すをいふ。【一二】河難。馮。馮河は詩の小雅に不敢暴虎、不敢馮河とあつて、水を徒渉すること。難馮といへば、徒渉は出来ぬといふこと。【一三】海澗。海濱に同じ。【一四】雪山。雪賦に雪山峙於西域とあるし、洛陽伽藍記に「鉢和國の南界に大雪山あり、朝に融け、夕に結ぶ。望めば、玉峰の若し」とある。しかし、地名でなく、雪を帯びた高山といふ様に見ても差支は無い。【一五】挂胃。木華の海賦に或屑没於龍壘之穴、或挂胃於岑嶽之峰とあつて、李善の註に「胃は係」とある。挂胃二字、ともに、かけるといふこと。【一六】箜篌。樂器の名、立て琴、通典に「箜篌は、漢の武帝、樂人侯調をして造らしめ、以て太一を祀る。或は云ふ、侯輝の作るところ。その聲、坎坎として節に應ず、これを坎侯といふ。聲、訛して、箜篌となる。侯は樂工人の姓に因るのみ。古しへは、郊廟雅樂に施せしが、近代は、専ら楚聲に用ふ。或は謂ふ、師延靡靡の樂と。非なり。舊説、亦た琴制に依るといふ。今按するに、その形、瑟に似て小、七絃、撥を用ひて之を彈すること、琵琶の如きなり」とある。

【題義】公無渡河は、公無渡河引ともいひ、相和歌瑟調三十八曲の一、また箜篌引、箜篌謠ともいふ。崔豹の古今註に「箜篌引は、朝鮮の津卒霍里子高の妻、麗玉の作るところなり。子高、晨に起き、船を刺して濯ふ。一白首の狂夫あり、髮を披き、壺を提げ、流を亂して渡る。その妻、隨つて呼び、こ

れを止むれども及ばず、遂に河水に墮ちて死す。ここに于て、箜篌を援つて之を鼓し、歌つて曰く、公無渡河、公終渡河、墜河而死、當奈公何」と。聲音悽愴、曲終つて、亦た河に投じて死す。子高還り、その聲を以て妻麗玉に語る。麗玉、これを傷み、乃ち箜篌を引いて、その聲を寫す。聞くもの、涙を墮して飲泣せざるはなし。麗玉、その聲を以て鄰女麗容に傳へ、名づけて箜篌引といふ」とある。李白の此詩は、以上の本事を述べ、且つ黄河の洪水を以て之を襯映せしめ、天の作せる孽は、今さら仕方が無いとしても、自ら作せる孽は、もと如何様にでも出来るので、これが爲に命を失ふといふのは、氣の毒ながら、まことに愚の極であるといふ意を逗露し、原作以外に、多少の新意を發露したものである。

【詩意】黄河の水は、西の方、はるかに崑崙山を衝き崩して流れ來り、やがて、萬里の遠きを過ぎ、凄まじく哮り狂つて、龍門山の險に觸れ、さながら瀑布の如くなだれ落ちる。その黄河の氾濫は、かの九年の大洪水の主因であつて、波は浩浩として天に接する程で、當時の賢君たる堯も、詮方つきて、唯だ歎息するばかり。やがて、大禹が擧げられて、愈よ百川を治めることに成つたが、その骨折は、一方ならず、子の啓が初めて生まれ、呱呱の聲を發するとき、三度まで家門を過ぎたが、立ち寄つて覗いても見なかつた。かくて、たぎれる水の勢を殺いで、その侵入を防ぎ止め、水が引いて、再び陸地に成つたから、田業が始まり、後に養蠶製麻さへ起つたので、さしも劇しかりし洪水の害は、跡方も

ないやうになつて、今では、乾いた沙煙が風に随つて昇るばかりである。洪水といふものは、もとより天の作せる孽で、到底追れることが出来ないが、それでさへも、防止する術はあるのである。ここに、一人の男、長い髪を振り亂して、氣が狂つて居る上に、性來馬鹿げて居たものと見えたが、空の晴れた朝まだき、流に臨んで何を爲さうとするのであるか。もとより、狂夫の事なれば、傍人は、少しもかまはずに居るが、妻は流石に恩愛の契淺からぬものであるから、しきりに之を止め、わが夫よ、河を渡り給ふなといつて、聲を限りに呼び止めたが、狂夫の悲しさ、そんな事には頓著なく、御苦勞にも流を亂して河を渡りかけた。しかし、猛虎は猶ほ徒手にて搏つことが出来ても、河は、固より深いから、到底徒渉することは出来ないで、果然、狂夫は、深い處へはまり込んで溺死し、やがて、流れ流れて海濱まで行くと、そこには、大きな鯨が居て、口を開けば、その白き齒は、さながら雪山の如く、まことに恐ろしいが、かの狂夫の屍は、その齒の間に引つかかり、終に其餌食となつて仕舞つた。まことに、慘澹の極、跡には、その妻が歌に合せて引き出す箜篌の聲、いかにも悲しく、聞こえるばかり、そして、不運なる其夫は、一たび死して、長しへに歸つて來ることはない。これは即ち自ら作せる孽に相違ないので、いかにも、氣の毒千萬の事である。

【餘論】蕭士贊の解に「この篇の大意、謂ふは、洪水天に滔り、下民昏墊、天の作せる孽は遠ふべからざるなり、抑平かに天成り、上下相安んずるの時に當り、乃ち故なくして馮河して死す。これは謂

はゆる自ら作せる孽なるもの、其れ亦た哀むべきも、惜むに足らざるなり。故に詩に曰く、旁人不_レ惜妻止_レ之、と。當時、不_レ靖の人、自ら天網に投ずるを諷し、借つて以て喻と爲すといふのみとあつて、いかにも、そんな事だらうと思はれる。もとより、何の時、何の人を指したかは、今さら分らないが、決して、泛然として作つたものではなく、聊か爲にするところあつて然るものと思はれる。これが即ち擬古樂府の特徴であつて、李白に於て、毎毎見るところの慣用手段である。全篇、截然として二段に分れ、前は黄河、後は狂夫、その間を聯結する辭句は全然無いけれども、反映の間に於て、自然に諷諭の深旨を領得せしめる處が、頗る妙である。

蜀道難

蜀道難

噫吁戲危乎高哉。

噫吁戲、危いか、高いかな。

蜀道之難難於上青天。

蜀道の難きは、青天に上るよりも難し。

蠶叢及魚鳧、開國何茫然。

蠶叢と魚鳧と、開國何ぞ茫然たる。

爾來四萬八千歲。

爾來四萬八千歲。

不與秦塞通人煙。

秦塞と人煙を通せず。

西當太白有鳥道。

西、太白に當つて鳥道あり。

可以橫絕峨眉巔。
 地崩山摧壯士死。
 然後天梯石棧相鈎連。
 上有六龍回日之高標。
 下有衝波逆折之回川。
 黃鶴之飛尚不得過。
 猿猱欲度愁攀援。
 青泥何盤盤。
 百步九折縈巖巒。
 捫參歷井仰脅息。
 以手撫膺坐長歎。
 問君西遊何時還。
 畏途巉巖不可攀。

以て、峨眉の巔を横絶すべし。
 地は崩れ、山は摧けて、壯士死す。
 然る後に、天梯、石棧相鈎連。
 上には、六龍、日を回すの高標あり。
 下には、衝波、逆折の回川あり。
 黄鶴の飛ぶも、尚ほ過ぐるを得ず。
 猿猱度らむと欲して、攀援を愁ふ。
 青泥何ぞ盤盤たる。
 百步九折、巖巒を縈る。
 參を捫し、井を歴て、仰いで脅息。
 手を以て膺を撫して坐して長歎。
 君に問ふ、西遊何時か還る。
 畏途の巉巖、攀づべからず。

但見悲鳥號古木。
 雄飛雌從繞林間。
 又聞子規啼夜月愁空山。
 蜀道之難難於上青天。
 使人聽此凋朱顏。
 連峰去天不盈尺。
 枯松倒挂倚絕壁。
 飛湍瀑流爭喧豨。
 砢崖轉石萬壑雷。
 其險也如此。
 嗟爾遠道之人胡爲乎來哉。
 劍閣崢嶸而崔嵬。
 一夫當關萬夫莫開。

但だ見る、悲鳥の古木に號び。
 雄は飛び、雌は從つて林間を繞るを。
 又聞く、子規の夜月に啼いて、空山に愁ふるを。
 蜀道の難きは、青天に上るよりも難し。
 人をして、此を聽いて、朱顏を凋ましむ。
 連峰、天を去ること尺に盈たず。
 枯松、倒に挂つて、絶壁に倚る。
 飛湍瀑流、争うて喧豨。
 崖を砢ち、石を轉じて、萬壑雷なり。
 その險なるや、此の如し。
 嗟、爾、遠道の人、胡爲れぞ來るや。
 劍閣、崢嶸として崔嵬。
 一夫關に當れば、萬夫も開く莫し。

所守或匪親。化爲狼與豺。

守るところ、或は親に匪ずんば、化して爲らむ狼と豺と。

朝避猛虎。夕避長蛇。

朝に猛虎を避け、夕に長蛇を避く。

磨牙吮血。殺人如麻。

牙を磨き、血を吮ひ、人を殺すこと麻の如し。

錦城雖云樂。不如早還家。

錦城、樂しと云ふと雖も、早く家に還るに如かず。

蜀道之難難於上青天。

蜀道の難きは、青天に上るよりも難し。

側身西望長咨嗟。

身を側て西望、長しへに、咨嗟す。

【字解】【一】噫吁戲 蜀人が物を見て驚畏する語、詩題が蜀道難であるし、作者李白は、少時蜀に居たことがあるから、特に用いた
ので、その意義は、普通の嗚呼と同じである。【二】蠶叢、魚鼈 古しへの蜀の君主の名。揚雄の蜀王本紀に「蜀王の先、蠶叢、柏灌、
魚鼈、蒲澤、開明と名づく。この時、人民椎髻曉言、文字を曉らず、未だ禮樂あらず、開明より上、蠶叢に至るまで、三萬四千載を積む」
とあり、華陽國志に「蜀侯蠶叢、その目縦、はじめて王と稱す。死して、石棺石槨を作り、國人これに従ふ。故に、俗、石の棺槨を以て、縱
目人の家と爲す。次王を柏灌といひ、次王を魚鼈といふ。魚鼈、蒲山に田し、忽ち仙道を得たり。蜀人これを思つて、爲に祠を立つ」と
ある。【三】四萬八千載 魚鼈より以後、今に至るまでの年數、但し何に本づいたか分らない。【四】秦塞 古しへの秦は、今の陝西省
で、塞は其邊境、その南邊を指したのである。【五】太白 前に見えたが、關中の西南境に在る高山の名。名山記に「鳳翔府郿縣の東南四
十里に在り、西方金宿の秀を鍾め、關中の諸山、これより高きはなし。その山巔、高寒にして草木を生ぜず、常に積雪あつて消えず、
盛夏これを視るも、猶ほ爛然たり、故に太白を以て名づく。上に湫池あり、三伏と雖も、亦た凝氷。關中、早に遇へば、山に登り、
湫水を取る。山、すでに高寒、氷雪常に凝る、身弱く、衣薄く、山に登るもの、多く死す。俗傳、以太白の神能く人を留むと爲す、非
なり」とある。【六】鳥道 山の低缺の處、飛鳥これを過ぎて徑路と爲すをいふ。【七】峨眉 山名、太平寰宇記に「嘉州峨眉縣に峨眉

山あり。按するに、益州記に云ふ、峨眉山は、南安縣界に在り、兩山相對し、狀、峨眉に似たり、張華の博物志、以て牙門山となす」と
あるし、一統志に「峨眉山は、四川眉州城南二百里に在り。岷山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、ここに至つて三峰を突起す。その
二峰對峙し、宛として蛾眉の若し。州城より之を望めば、又人の前に拱揖するが如きなり」とある。但し、太白と峨眉とは、非常の距
離で、ここに謂ふ如く無造作の者ではない。されば、この二句は、矢張、詩人誇張の語と見る外は無い。【八】地崩山摧壯士死 華陽國
志に「秦の惠王、蜀王の色を好むを知り、五女を蜀に嫁するを許す。蜀、五丁を遣して之を迎へしめ、還つて、梓潼に到るや、一大
蛇の穴中に入るを見る。一人、その尾を攪つて、之を掣するも禁ぜず。五人相助け、大呼して、蛇を拽くに至つて、山崩れ、時に五
人及び秦の五女并に將從を壓殺し、而して、山分れて五嶺となる」とある。又一説に「むかし、秦、蜀を伐たむと欲すれども、路の通
するなし。人をして、蜀王に告げしめて曰く、秦に金牛あり、その糞、金を成す。蜀をして迎へしめば、之を與へむと。蜀王、五丁力
士に命じ、山を開いて金牛を取らしむ。路、わづかに通す。秦、蜀を伐つて其國を取り、開くところの路を號して金牛といふ」とある。
【九】天梯石棧 天に達する梯、石にて造りし棧。棧閣を形容して云ふ。【一〇】六龍回日之高標 淮南子に爰止義和爰息六嶠、是謂一
懸車、といふ數句があつて、その註に「日、車に乗じ、駕するに六龍を以てし、義和これを御す。日、ここに至つて虞泉に薄り、義和こ
こに至つて六嶠を回す」とあり、蜀都賦に、義和假二道於峻阪、陽鳥回三翼乎高標の句がある。高標は、或は山名で、一名高望、即ち嘉
定府の主山、巋然として高く峙ち、萬象前に在るが故に名づくといひ、或は高樹の枝ともいふが、ともに面白くないので、蜀山の最高、
一方の標識となるものを指すといふのが、一番穩當である。この句の意味は、義和が六龍を馭し、日車を馳せて來ると、蜀道の高山
の絶頂に闕へて、前方へ進むことが出來ず、そこで、別路を取り、蜀道の高い山に觸れぬ様にして西の方へ行くといふこと。【一一】逆
折 旋回。【一二】黃鶴 一本黃鶴に作つてあつて、略ぼ同じ物である。顏師古の急就篇註に「黃鶴一舉千里、其鳴聲鶴鶴と云ふ」とあ
るし、合璧事類に「鶴は禽の大なるもの、色白し、又黄なるものあり、善く高翔す。湖海江漢、問ま之あり」とある。【一三】猿猱 卑
雅に「猿は猿の屬、長臂、善く嘯き、攀援に便なり」とあるし、韻會に「猿は母猴なり、人に似たり。嚴氏曰く、猿は即ち王孫、杜詩の胡
孫、是れなり。爾雅に猿猿善援」とある。黃鶴猿猱の二句は、馬援の武溪深曲の鳥飛不度、獸不能臨に本づいたので、蕭士資は之を

釋して「黃鶴は飛ぶことの至つて高きもの、猿猴は最も便捷なるもの、尙ほ度るを得ず、その險絶、知るべし」といつて居る。【四】青泥嶺名、元和郡縣志に「青泥嶺は、興州長舉縣の西北五十三里に在り、溪に接して、山東は即ち今の通路なり。懸崖萬仞、上に雲雨多く、行くもの、屢ば泥滓に逢ふ、故に號して青泥嶺となす」とあり、九域志に「興州に青泥嶺あり、山頂常に煙霧霰雪あり、中巖の間に龍洞あり、その嶺上は、蜀に入るの路」とある。【五】盤盤、めぐつて上る貌。【六】巖巖、爾雅に「巖は山墮」とあり、郭璞の註に「山形長狹なるものをいふ、荊州、これを巖と云ふ」とある。【七】捫參歷井、參井、ともに星の名。河圖括地象に「岷山の地上に井絡あり」とあつて、蜀の岷山の精が天に上つて井星となるといふ意。參は、井の直上に在る星、參井の二星、本と相近く、參の三星は西方七宿の末に居り、度十を占めて、蜀の分野である。井の八星は南方七宿の首に居り、度三十二を占めて、秦の分野となる。この句の意は、仰いで、參井二星を視れば、人を去ること遠からず、手で取り、又その邊近く過ぎるといふので、つまり、青泥嶺の極めて高きを形容して云つたのである。【八】脅息、高唐賦に出た字面で、李善の註に「縮氣なり」といひ、胡三省の通鑑註に「脅息とは、氣を屏け、鼻、敢て息せず、唯だ兩脅潛動以て氣息を舒ぶるのみ」とある。即ち呼吸を縮め、鼻を塞いで胸で息をすること、【九】畏途、險路に同じ。【一〇】巖巖、山石高峻の貌。【一一】雄飛雌從、雉子班の古辭に、雉子高飛止、黃鸝高飛已千里、雄來飛、從雌視とあるに本づく。【一二】子規、ほととぎす、張華の禽經註に「望帝、道を修め、西山に處つて隱れ、化して杜鵑鳥となる。或は云ふ、杜宇鳥、亦た云ふ、子規鳥。春に至れば啼く、聞くもの悽惻」とある。【一三】喧喧、聲の喧しきこと。【一四】砢、水が巖を撃つ聲。【一五】劍閣、華陽國志に「梓潼郡に劍閣道あり、三十里、至つて險」とあり、水經註に「又東南徑して、小劍戍、大劍を去ること三十里、連山絶險、飛閣通衢、故に之を劍閣といふなり。張載の銘に曰く、一人守嶮、萬夫趨赴、と。信に然り。故に李特、劍閣に至つて嘆じて曰く、劉氏、かくの如きの地あり、しかも人に面縛す、豈に奴才ならざらむや」とあるし、圖書編に「蜀地の險、天下に甲たり、しかも、劍閣の險、尤も蜀に甲たり。」蓋し、羣峰劍插、兩山、門の如く、信に謂はゆる一夫關に當れば萬夫敵するなきものなるを以てなり」とある。【一六】一夫當關、萬夫莫開、左思の蜀都賦に「一夫守隘、萬夫莫開」とあり、張載の劍閣銘に「劍閣壁立千仞、窮地之險、極三路之峻、二人荷載、百夫趨赴、形勝之地、匪親勿居」とある。【一七】殺人如麻、人を殺すことの多きをいふ。史記

の天官書に「秦、兵を以て、六王滅ぼし、中國を并せ、外は四夷を攘ひ、死人、亂麻の如し」とある。【一八】錦城、成都、成都記に「府城、呼んで錦官城となす、江山明麗、錯雜して錦の如きを以てなり」とある。【一九】杳嗟、長太息。

【題義】蜀道難は、樂府題相和歌瑟調三十八曲の一。詳しく銅梁玉壘の險を言ひ、興に託して、世道の危険、人心の險巇を譏るのが例であるが、普通に、その篇幅は、餘り長くない。李白は、その題に沿うて、あらゆる方面から、蜀道の險艱を詳述して、さながら、蜀道の賦とでもいふべき心持で作つたので、爾後、蜀道を詠じたものは、すべて、この範圍を脱出することが出来ない位、苟くも李白の此詩を本として解釋すれば、どんな六つかしいものでも分らぬことはない。しかし李白の精神は、單に蜀道の險を述べたばかりでなく、結末に至りて、分明に逗出してある。つまり、蜀道の險阻なる通り、蜀は、中原より一寸行き悪く、從つて、天子の政令も及ばぬ場合がある。そこで、この地に守たるものは、動もすれば、その險要を恃んで、天子に敵對しさうにする。まことに、由由しき大事で、それに就けても、經世に志あるものは、これに留意せねばならぬといふのである。

【詩意】ああ蜀道の險危高峻なるや、人馬ともに疲れ、これを越ゆるの難きは、天に登るに比して更に六つかしい。抑も、蜀の國たるや、古しへ、蠶叢だの、魚臈だのいふ君主があつたといふが、その開國の事蹟は、茫邈として、とんと分らず、その後、今日に至るまで、四萬八千歳の久しきを経た。その地、すでに葺爾として、一隅に僻在するが故に、文物聲教に感化されることも少く、關中と境を

蜀の北門を爲し、外からは一寸行かれぬ處であるから、蜀の土地を守ることには就いては、朝廷でも、餘程氣を付けねばならぬので、皇族でもあれば、先づ善い様なもので、さうでないものに、この土地を支配さして兵權を與ふれば、天險に據つて謀叛心を起し、化して、豺狼の如きものとなるであらう。現に蜀地に守たるものは、猛虎の如き勢、長蛇の如き毒を持つて居て、日日牙を磨き、血を吮うて、人を殺すこと麻の如く、しきりに暴威を振つて居るから、蜀地に入るものは、朝夕これを避ける工夫をせねばならぬ。道路の險艱なる上に、人情の險惡なること、かくの如く、成都は錦城と稱せられて、さながら、樂土の如く思はれて居るが、それは、飛んでもない間違で、とても安心して住まはれる處ではないから、早く家に還つた方が善い、要するに、蜀の地を穩に治めて行かうといふには、今日のやうな遣り方ではいけない。ああ蜀道の難きことは、青天に登るよりも難く、身を側て、西の方、はるかに其地を望めば、まことに咨嗟に堪へぬ次第である。

【餘論】この詩は、李白が初めて長安に来て賀知章に遇つたときに、見せた處が、非常に感服して、「子は謫仙人なり」といつたといふことで、撫言といふ書に出て居る。これは天寶初年の事であるから、詩の製作は、無論、その前でないければならぬ。それから、この詩は何の爲に作つたかといふことに就いては、種種の説があつて、一番古い處では、章仇兼瓊を諷するが爲にしたといひ、現に黃山谷が宣州に於て、周惟深の爲に草體で此詩を書いたときにも、題下の註に於て、諷章仇兼瓊也と書し、李集の一

本にも、矢張り、その通り註してあつたといふことである。但し章仇兼瓊は、如何なる事をしたか、少しも分らぬから、聊か閉口の氣味がある。次に、雲溪友議に於ては、嚴武が劍南節度使となつて、蜀に居た時、極めて放肆であつて、房瑄が故の宰相を以て部内の刺史たるに拘はらず、これに對して禮を爲さず、又杜甫と親密であつたが、數ば之を殺さうとした。そこで、李白は、房杜二人を危んで、その爲に、蜀道難を作つたといふので、新唐書も之に従つて居る。但し、嚴武が蜀に赴任したのは、肅宗の至徳以後の事で、これを許容すれば、賀知章云の事實は、成立しなくなる。次に出て來たのは、明の蕭士贇の説で、この詩は、玄宗が蜀に幸せられた爲に作つたものだといひ、乾隆帝も、之に従つて居る。試に其前後の事實を略述すると、はじめ、哥舒翰の兵、潼關に敗れし時、楊國忠は、首として蜀に幸するの策を唱へ、當時の臣庶、皆これに反對するにも拘はらず、玄宗は之を納れ、やがて愈よ西幸されると、馬嵬の慘禍が起り、楊貴妃を始め、楊國忠などは皆殺されて仕舞つた。その時、馬嵬の父老は、道を遮つて、固く諫め、「宮闕は陛下の家居、陵寢は陛下の墳墓、今ここを捨てて、何にか之かむと欲する」といひ、又太子に告げて、「もし、殿下、至尊と共に皆蜀に入らば、中原の百姓、誰を主となさむ」といひ、建寧王倓も亦た「今、殿下、至尊に従つて蜀に入り、もし賊兵棧道を燒絶せば、中原の地、手を拱して賊を援けむ」といつた。そこで、玄宗は、太子を留め、ひとり蜀に幸することにしたが、扶風に至る比、士卒ひそかに去就を懷ひ、往往にして不遜なる流言を爲し、成都に至

る比、從官及び六軍の至るもの、わづかに千三百人、要するに、蜀に幸することが宜しくないといふのは、當時一般の輿論であつた。李白も、亦た同じ意見を抱いて居たが、身、その位に非ざれば、公然これを言ふことが出来ず、おまけに、遠隔の地に居ては、奏上の便宜も無い處から、止むを得ず、古樂府の題を假りて、これを述べたといふのである。乾隆御批の言に、「この詩を解するもの、幾んど、聚訟の如し。惟だ蕭士贇、祿山、華を亂し、天子、蜀に幸するが爲に作ると謂ふもの、これを得たり。蓋し、その詩、筆勢奇崛、詩旨隱躍、往往これを求めて得ず、すなはち安りに之が説を爲す。もし析して之を論ずれば、亦た自ら瞭然として觀るべし。題は、本と古樂府、白の創するところに非ず。すなはち、蜀道之難の二語を以て、通篇の節奏と爲す。蠶叢及魚鳧より以て手撫膺坐長歎に至るまでは、山川道途の險を極言し、以て題意に還る。而して、その尋常遊幸の地に非ざること、すでに、言外に見え、下文と神相貫注す。問君西遊何時還は、正に蜀に幸する事を指す。蕭士贇曰く、君の字、泛然として言ふに非ず、猶ほ杜甫北征の詩に、恐君有遺失、及び君誠中興主の義のごとし。謂はゆる君とは、明皇なりと。その説、是なり。當日倉皇西幸、扈從蕭條、棧道崎嶇、霖鈴悲感、鳥號鶻啼、淒涼の狀を寫し出す。故に曰く、使二人聽此凋朱顏と。これ明皇の爲に悲むなり。以下、重ねて、難の字を寫し、しかも、其險也如此の三句を以て之を束す。遠道之人は、蓋し從者を指して言ふ。故に、承くるに劍閣崢嶸の六句を以てす。楚の舊賈云ふ。我能く往く、寇も亦た能く往くと。蜀の險、必ずしも恃むべ

からず、故に之を危むの詞を作り、以てその忠愛の意を致す。若し諸説云ふところの如く、蜀を守る者の爲に發すとすれば、義に於て倫ならず、朝避猛虎の六句は、直に亂を避くるを言うて、その早く還らむことを祝す。通篇の結穴、この結語に在り、收め得て佳く、無限の遙情あり。もし徒に、その文章の奇を賞して、その深情遠意を審にせざれば、未だ白を知るものと爲さざるなり。胡震亨、その事理を海説す、故に包括すること大にして、樂府諷世立教の本旨に合へりと謂ふ。蓋し亦た辭に窮せりとある。これは、蕭士贇の所説の概要を摘記したので、略ぼ之を盡して居るから、わざわざ原文を引くにも及ばない。なほ桂臨川も亦た蕭士贇と同説であつて、「蜀道難は、全く玄宗、蜀に幸するが爲にして作る。一夫當關云云に至つては、玄宗の爲に慮ること深遠なり。詞旨幽深、雄渾飄逸、歐陽子、廬山高を以て之に方ぶ、殊に晒ふべしと爲す」といつて居る。それから、章仇兼瓊若しくは房瑄・杜甫の爲に作つたといふ舊説を駁撃した蕭士贇の言も、一寸傾聽を値するので、「天寶の初、天下又安、四郊警なし。劍閣は、乃ち長安より蜀に入るの道。太白、狂者に非ず、乃ち拳拳然として、その嚴ならむを欲す。劍閣の守、知らず、將た何の拒むところぞや。此を以て、その章仇兼瓊の爲にせざるを知るなり。かつて、全篇の詩意を以て、唐史と之を參考するに、是れ蓋し、太白、はじめて祿山華を亂し、天子蜀に幸するを聞きし時の作ならむ。もし房瑄、杜甫、章仇兼瓊の爲にして作るといへば、何ぞ始に蠶叢の開國を引き、終に劍閣の險を言ひ、復た守るところ親に匪ざれば、化して豺狼と

爲らむ等の語に及ぶに至らむや。喩を引くこと倫に非ず。これを以て、その章と房杜との爲にせざるを知るなり」といつて、一應尤もである。房瑄・杜甫の爲にしたといふことの據り處なきは、固より取るに足らず。蕭士贇の説に従つて、玄宗が蜀に幸したことを諷する爲にしたとすると、解釋に少しも無理がなく、全首言順に理當り、極めて面白いから、賀知章の事などは、傳説の誤といつて、一概に抹殺して、愈よ之を標榜したのであるが、ここに一つ動かすべからざる確證があつて、遺憾ながら、これに従ふことが出来ない。それは何かといふと、この蜀道難の一首は、唐の殷璠の撰に係る河嶽英靈集に載せてあつて、この英靈集は、天寶十三載に出来、その自序に據れば、天寶十二載癸巳の年までに獲た詩を輯めたものだとこのことで、殷璠も流石に目が高く、蜀道難を評して、離騷以來有らざるの名作であるといつて、褒めちぎつて居る。然るに、安祿山の亂の爲に、玄宗が蜀に幸したのは、天寶十五載の事であるから、蜀道難の作は、全然これとは無關係であつて、折角ながら、蕭士贇の創説も、乾隆御批の言も、何にも成らぬものに成つて仕舞つたので、まさか、英靈集に出て居る蜀道難は後人の補入であらうとは言へず、蕭士贇も、乾隆帝も、ここまで深くは研究しなかつたのであらう。要するに、蕭士贇の説は、面白いには違ひないが、作詩の年次相當らず、従つて、その本意に協つて居らぬものである。次に房瑄・杜甫の爲にしたといふのは、それより時代が後れて居て、愈よ以て、當らぬことに成る。さうすると、解釋が稍や無理で、且つ、面倒臭くは成るが、章仇兼瓊に諷したとい

ふ一番古い説に従ふより外は無い。但し章仇兼瓊は、どういふことを爲たか、史傳に其記述を缺いて居るが、蜀の太守でありながら、専恣の振舞をしたことが有つたに相違なく、この詩の存在に頼つて、反對に、正史の缺文を補ふことが出来る次第である。終に、此詩に關する古人の評語二三を擧げると、劉辰翁は曰く、妙は起伏に在り、その才思放肆、語次崛奇なるは、自ら必ずしも言はず、趙執信は曰く、楚騷に原本す。集中、格調相類するもの多きも、これを此體の祖となす。沈德潛は曰く、筆陣縱横、蚪飛び、變動き、雷霆を指顧の間に起すが如し。任華盧仝の輩、これに仿ふも、適ま其怪を得たるのみ、太白が仙才たる所以なり。錦城雖云樂、不如早還家、これ其主意と。

梁甫吟

梁甫吟

長嘯梁甫吟。何時見陽春。

長嘯す梁甫吟。何時か陽春を見む。

君不見朝歌屠叟辭棘津。

君見ずや、朝歌の屠叟、棘津を辭し、

八十西來釣渭濱。

八十、西に來つて渭濱に釣す。

寧羞白髮照清水。

寧ろ羞ぢむや、白髮の清水を照らすを。

逢時吐氣思經綸。

時に逢ひ、氣を吐いて經綸を思ふ。

廣張三千六百鈞。

風期暗與文王親。

大賢虎變愚不測。

當年頗似尋常人。

君不見高陽酒徒起草中。

長揖山東隆準公。

入門不拜騁雄辯。

兩女輟洗來趨風。

東下齊城七十二。

指揮楚漢如旋蓬。

狂客落魄尙如此。

何況壯士當羣雄。

我欲攀龍見明主。

ひろく張る三千六百鈞。

ふうき、暗に文王と親む。

たいけんは虎變して愚は測らず。

たうねん、頗る似たり、尋常の人。

きみみ、君見ずや、高陽の酒徒、草中に起り、

ちやういふ、長揖す、山東の隆準公。

もんに入つて拜せず、雄辯を騁せ、

りやうぢやうら、兩女洗ふを輟めて、來つて風に趨る。

ひがしくだ、東、下す、齊城七十二。

そかんを指揮して、旋蓬の如し。

きやうかくらくはく、狂客の落魄も、尙ほ此の如し。

なん いはん、何ぞ況や、壯士の羣雄に當るをや。

われ、攀龍、明主に見えむと欲す。

雷公砰訇震天鼓。

帝傍投壺多玉女。

三時大笑開電光。

倏燦晦冥起風雨。

閶闔九門不可通。

以額扣關闔者怒。

白日不照吾精誠。

杞國無事憂天傾。

猥獠磨牙競人肉。

騶虞不折生草莖。

手接飛猱搏彫虎。

側足焦原未言苦。

智者可卷愚者豪。

らいこうはうくわう、雷公砰訇、天鼓を震ふ。

ていはうとうこ、帝傍投壺、玉女多し。

じたいせう、三時大笑、電光を開く。

しゆくしゃくくわいめい、倏燦晦冥、風雨を起す。

しやうかふ、閶闔の九門通すべからず。

ひたりもつ、額を以て關を扣けば闔者怒る。

はくじつて、白日照らさず、吾が精誠。

きこくこと、杞國事なくして、天の傾かむを憂ふ。

かづゆ、猥獠は牙を磨いて人肉を競ひ、

しやうや、騶虞は折らず生草の莖。

てひだう、手は飛猱に接して彫虎を搏ち、

あし、側足焦原に側て未だ苦を言はず。

ちしや、智者は巻くべく、愚者は豪なり。

世人見我輕鴻毛。

力排南山三壯士。

齊相殺之費二桃。

吳楚弄兵無劇孟。

亞夫哈爾爲徒勞。

梁甫吟。梁甫吟。聲正悲。

張公兩龍劍。神物合有時。

風雲感會起屠釣。

大人峴峴當安之。

世人、我を見ることが、鴻毛よりも輕し。

力、南山を排す、三壯士。

齊相、これを殺すに、二桃を費す。

吳楚、兵を弄して、劇孟なく、

亞夫哈爾として、徒勞となす。

梁甫吟、梁甫吟、聲正に悲む。

張公の兩龍劍、神物合するに時あり。

風雲感會、屠釣を起す。

大人峴峴、當に之に安んずべし。

【字解】一 梁甫吟 題義を見よ。二 何時見陽春 楚辭の恐溘死而不得見乎陽春に本づき、有志の士、明主に遭ふに由なく、徒に沈淪隱匿するに比す。三 朝歌屠叟 太公望をいふ、太公望は呂尚、その事は、齊太公世家を始めとして、史記の數處に散見して居る。曰く、呂尚、蓋し窮困して年老いたり、漁釣を以て、周の西伯を干す。又曰く、呂望行年五十、食を棘津に賣り、七十、牛を朝歌に屠り、行年九十、身、帝師となる。韓詩外傳には「太公望、少にして、人の壻となり、老いて去らる。牛を朝歌に屠り、棘津に賣し、磻溪に釣る。文王擧げて之を用ひ、齊に封す」とあつて、これが一番この句に合つて居る。四 渭濱 渭水の濱、史記に「呂

尙の文王に遇ふや、身、漁父と爲つて、渭濱に釣せしのみ、かくの若きものは、交疎なればなり。すでに説かれて、立つて太師となり、載せて、與に歸るものは、その言深ければなり」とある。五 三千六百釣 乾隆御批の言に「三千六百釣、迄に定論なし。按するに、説苑に云ふ、呂望年七十、渭濱に釣ると。孔叢子に云ふ、太公身を勤め、志を苦め、八十にして文王に遇ふ。百年三萬六千場を以て之を計るに、七十より八十に至るまで、約三千六百釣なり。或は又八十はじめて釣し、九十はじめて遇ふを以て十年と爲す。殆んど、未だ楚辭云ふところ、太公九十乃顯榮は、蓋し封國の時を指すを知らざるなり」といつて居る。事實は、さうかも知れぬが、李白の八十西來といふのは合はぬ。蕭士贊は、太公が釣したのは七十年であるが、大數を取つて十年といひ、八十から九十までだといつて居る。沈德潛は又一説を出し「或は言ふ、地に三千六百軸あり、太公、天下を合せて之を釣り、文王と相遇ふを得たるを言ふなり」といつて居る。しかし、十年間釣をしたといふのが一番穩當で、八十以後の事を指したのであらう。六 風期 風度に同じ。七 虎變 易に大人虎變とある。八 高陽酒徒 酈生を指す。史記に「酈食其は陳留高陽の人なり、好んで書を讀む。家貧にして、落魄以て衣食の業を爲すなし。縣中、皆、これを狂生といふ。沛公（即ち漢の高祖）地を陳留の郊に略するや、麾下の騎士、適ち酈生里中の子なり。酈生見て、之に謂つて曰く、若、沛公を見れば、謂つて曰へ、臣が里中に酈生あり、年六十餘、長八尺、人皆これを狂生といふ。生自ら謂ふ、我は狂生に非ずと。騎士、從容、言ふところ、酈生の誠むるところのもの如し。沛公、高陽の傳舎に至り、人をして、酈生を召さしむ。酈生至り、入つて謁す。沛公、方に牀に踞し、兩女子をして足を洗はしめて、酈生を見る。酈生、入つて長揖して拜せず。曰く、足下秦を助けて諸侯を攻めむと欲するか、且つ諸侯を率ゐて秦を破らむと欲するか。沛公罵つて曰く、豎儒、天下同じ、秦に苦むこと久し、故に相率ゐて秦を攻む。何ぞ秦を助けて諸侯を攻むといふか。酈生曰く、必ず徒を聚め、義兵を合せ、無道の秦を誅せむとせば、宜しく倨つて長者を見るべからず。と。ここに於て、沛公、洗を輟め、起つて衣を攝し、酈生を上座に延いて、之を謝す。酈生、因つて、六國の縱橫を言ふ。沛公、喜び、號して廣野君となし、諸侯に馳せて使せしむ。漢の三年、漢王酈生をして、齊王田廣に説かしめ、軾に依つて、齊の七十二城を下す」とある。九 山東隆準公 沛公を指す。高祖本紀に「人と爲り、隆準にして龍頭」とある、準、音は拙、鼻の高のこと。一〇 旋蓬 蓬の穂の風に吹かるるをいふ。一一 落魄 志行衰惡、業を失うて次

なきをいふ、落ぶれる。【三】攀龍。後漢書に「もとより、その龍鱗を攀ち、鳳翼に附し、以てその志ざすところを成さむことを望むのみ」とある。人君を龍に譬へて、その知遇を得ること。【四】天鼓。初學記に「雷は天の鼓なり」とある。【五】帝傍投壺多玉女。神異經に「東王公、玉女と投壺す、千二百を投する毎に、入るものあれば、天、爲に嚙嘘し、脱誤すれば、天、之が爲に笑ふ」とあつて、張華の註に「天口流光焰灼、天、雨ふらずして電光あり、これ天笑ふなり」とある。投壺は遊戯の一。天帝の御側には投壺を司つて居る玉女が大勢居て、もし投壺を誤ると、天帝が笑はれる。すると、それが電光となつて人間に見える。【一六】三時。一晝夜が十二時。普通に云ふ一日、即ち晝が六時であるから、三時は半日。【一七】候燦晦冥。時時電光が閃いて、その餘は天地暗きこと。【一八】閻闔九門。天門九重なるを云ふ。【一九】關。門扉。【二〇】閻者。門番。【二一】杞國無事憂天傾。列子に「杞國に人あり、天地崩墜、身寄るところなきを憂へ、寢食を廢す」とある。【二二】狹獠。山海經に「少咸の山に獸あり、その狀、牛の如くにして赤身、人面馬足、名を獠廡といふ。その音、嬰兒の如し、此人を食ふ」とある。狹獠は即ち獠廡で、人を食ふ惡獸。【二三】騶虞。前にも見えたが、陸機の詩疏に「騶虞は即ち白虎。黒文、尾は軀よりも長し、生物を食はず、生草を履まず」とあつて、つまり仁獸である。【二四】飛狻形虎。尸子に「予、左に太行の狻を執つて、右に彫虎を搏つ、夫れ貧窮は太行の狻なり、疎賤は義の彫虎なり。而して、吾、日に之に遇ふ、亦た以て試むるに足る」とある。つまり貧窮と疎賤との二つに對して常に戦ひ、これに打勝つといふこと。【二五】焦原。尸子の上文の續きに「莒國に石焦原といふものあり、廣さ五十步、百仞の溪に臨み、莒國敢て近づくなきなり。勇を以て莒子に見ゆるものあり、ひとり、却行して齊踵す、世に稱せらるる所以なり。夫れ義の焦原たるや高し。賢者の義に子ける、必ず且つ齊踵す、これ一時を服する所以なり」とあつて、危險極まることではあるが、義の爲には、これを冒して、少しも苦痛を言はぬこと。なほ太平寰宇記に「焦原は、莒縣の南三十六里に在り、俗に横山と名づく」とあつて、實際かかる處があるのである。【二六】力排南山三壯士。齊相殺之費二桃。晏子春秋に見えて居る。曰く、公孫接、田開疆、古冶子、景公に事へ、勇力を以て虎を搏つ。晏子の過ぎて趨るを聞くも、三子者、起たず。晏子、入つて、景公に見えて曰く、臣聞く、明君、勇力の士を蓄ふや、上に君臣の義あり、下に長率の倫あり、内以て暴を禁ずべく、外以て敵を威すべし。故に其位を尊び、其祿を重んず。今君が勇力の士を蓄ふや、上

に君臣の義なく、下に長率の倫なし、内以て暴を禁せず、外以て敵を威すべからず、これ國を危くする器なり、之を去るに若かず。公曰く、三子者、之を搏つも、恐らくは得ず、之を刺すも、恐らくは中らざるなり。晏子、因つて公に請ひ、人をして、これに二桃を餽らしめて曰く、三子、何ぞ功を計つて桃を食はざると。公孫接曰く、接や、一たび獅を搏ち、再び乳虎を搏つ、接の功の若きは、以て桃を食ふべくして、人と同じうすること無からむと。桃を援つて起つ。田開疆曰く、吾、兵に仗つて、三軍を却くるもの再、開疆の功の如きは、亦た以て桃を食ふべくして、人と同じうすること無からむと。桃を援つて起つ。古冶子曰く、吾、かつて君に従つて、河を濟るに、龍、左驂を啣み、以て砥柱の流に入る。治、流に逆ふこと百步、流に順ふこと九里、龍を得て之を殺し、左に驂尾を操り、右に龍頭を拏げ、踊躍して津を出づ。人皆曰く河伯なり、と。治、これを見れば、大龍の首なり。治の功の若きは、亦た以て桃を食ふべくして、人と同じうすること無からむ。二子何ぞ桃を反さざると。公孫接、田開疆曰く、吾が勇、子に若かず、功、子に逮ばず、桃を取つて譲らず、これ貪るなり。然り而して、死せざるは、勇なきなりと。皆その桃を反へし、領を拏して死す。古冶子曰く、二子、これに死す、治、ひとり、之に生くるは、不仁なり。人を恥かしむるに言を以てして、その聲に誇るは不義なり、行ふところに恨んで、死せざるは勇なきなり、と。亦た其桃を反へし、領を拏して死す。公、これを殮するに服を以てし、これを葬るに士禮を以てす」とある。【二七】吳楚弄兵無劇孟。亞夫哈爾爲徒勞。史記列傳に「吳楚反するとき、條侯周亞夫、太尉となり、傳に乗じ、東して將に河南に至らむとして、劇孟を得たり。喜んで曰く、吳楚、大事を擧げて、劇孟を求めず、吾、その能くなきを知るのみ。天下騒動、大將軍、これを得る、一敵國の如し」とある。哈は、説文に「嗤笑」と訓して即ちせせら笑ひをすること。【二八】張公兩龍劍。神物合有時。前に見ゆ。【二九】峴帆。書經に「邦之杌隉」とあり、易に「困于艱廡」とあり。一つ處に安んぜず、他の誘導に因りて動搖する貌、つまり不安の有様をいふ。

【題義】梁甫吟は樂府題で、王僧虔の技録に「相和歌楚調曲に梁父吟行あれども今歌はず」とあつて、その由來するところは頗る古い。陳武別傳に「武、常に驢に騎し、羊を牧す。諸家の牧豎數十人、或

は歌謠を知るものあり。武、遂に太山梁甫吟、幽州馬客吟、及び行路難の曲を學ぶ」とある。次に李勉の琴説に「梁甫吟は、曾子の撰なり。琴操に曰く、曾子、泰山の下に耕す、天、雪を雨らし、凍ること旬日、歸るを得ず、その父母を思つて、梁山歌を作る。蔡邕の琴頌に曰く、梁甫悲吟、周公越裳」とある。但し、最も有名で且つ其文辭の今に傳はつて居るのは、諸葛亮の一吟で、蜀志に「諸葛亮、隴畝に躬耕し、好んで梁甫吟を爲す」とあつて、その詩は、次の通りである。

步出齊城門。遙望蕩陰里。里中有三墳。纍纍正相似。問是誰家墓。田疆古冶氏。力能排南山。文

能絕二地紀。一朝被讒言。二桃殺三士。誰能爲此謀。國相齊晏子。

沈德潛の説に「武侯、好んで梁甫を吟ずといふ、必ずしも、但だ此章を指すに非ざるべし。或は篇秩散落、唯だこれのみ流傳するならむ」とあるが、いかにも尤もな事と思ふ。世に諸葛亮ともあらう者が歌つたのだといへば、少くとも、天下の大局に關したことが主になつて居るべき筈で、區區たる讒言の事だけを述べたものでは無からうと思はれる。しかし、確證も見えぬことであるから、仕方が無いとして、姚寬の西溪叢語に於ては、梁甫吟は、この一首だけのものとし、そして、題義の在るところを闡明して、下の如く云つて居る。「張衡が四愁の詩に、我所思兮在泰山、欲往從之、梁父艱の句あり。その註に云ふ、泰山は東嶽なり。君、徳あれば此山を封ず。君王を輔佐し、有徳に致さむことを願ひ、小人讒邪の距つるところとなる。梁父は、泰山の下、小山の名なり、と。諸葛亮、好んで梁

父吟を爲す、恐らくは、この義を取りしならむ」と。これだけでは、いささか、不十分の嫌が無いでもないが、他説なければ、しばらく之に従ふことにしよう。それから、李白の此詩は、自分が明主に遭ひながら志を得ぬことを詠出したので、つまり、諸葛亮が未だ志を得ずして、躬耕して居たといふ事實と聊か默契するところがあるから、彼が歌つたといふ題名を活用し、就中、小人の讒誣といふ邊に重きを置いて、この一篇を構成したのである。乾隆御批には「この詩、當に亦た讒に遭ひ、放たれて後、作りしなるべし、屈平が楚國に眷眷たる同一精誠なり」といひ、趙甌北は「梁甫吟、専ら呂尚鄭生を詠じ、以て士未だ遇はざる時、人に輕んせらるるも、功を成すに及びて後、見はるるを見る」といつて居る。さうすると、李白が之を作つたのは、高力士・楊貴妃の讒に遇ひ、金を賜はつて放ち還され、去つて楚越に放浪したといふ其時分に作つたものであらう。

【詩意】あ有志の士、何の時にして明主に遇うて、大に用ひられ、おのが志を伸ばすを得べきか。ここに於て、古しへの諸葛亮を學び、長嘯して梁甫吟を歌ひ出すのも、まことに止むを得ぬ始末である。むかし、呂尚といふ人があつたが、はじめは、牛殺しの賤業に服して、朝歌に居たが、一旦翻然として、思ふところが有つたと見え、棘津の地より去り、行年八十、老衰の身を以て、西に來つて、漁父となり、渭水の上に釣を垂ること十年の久しきに及んだ。彼の風度は、もとより明主の輔佐た

がて、殷紂を滅して、周家八百年の基を開き、自分も其功に因つて齊に封せられた。彼、その初は、
 坎軻不遇で、不世出の才あるも、未だ世に知られず、なほ尋常の人と異なるところが無かつたので、文
 王なればこそ、これを認めて任用したのである。又聞くところに據れば、むかし、酈食其といふもの
 があつたが、高陽の里に居て、飲んだくれと稱せられ、誰も相手になるものも無かつた位。しかも、
 一たび、草中より起つて、沛公に謁見するや、門に入るも拜せず、雄辯を馳せて沛公に説き付け、感
 服した揚句には、兩女子に足を洗はしめて居たのを中止し、これを堂中に延いて、厚く禮を爲すに至
 らしめた。しかる後、齊に使用するや、軾に憑つたまま、三寸の舌を揮つて、七十二城を下し、楚漢交
 争の際に當つて、風雲を指揮する有様は、枯れた蓬の穂を空中に吹き飛ばすが如くであつた。平常は
 落ちぶれて居た狂客ですら、一朝他の知遇を得れば、かくの如き次第である。されば、意氣揚揚たる
 壯士が、おのが力量を顯はさうといつて出かける場合に、いかで、志を遂げざることのあるべきぞ。
 そこで、我は龍鱗を攀ちて、明主に謁見し、その知遇を得むと企てたが、何ぞ圖らむ、雷公が妨害を
 試み、恐ろしく凄じき響を發して、天鼓を頻りに打鳴らした。そののみか、天帝の御側には、玉女が
 澤山居て、投壺の戲を爲し、一たび誤れば、天帝が御笑なされる。それが電光となつて、半日の間、
 下界に閃いて見える。かくて、雷聲や電光の爲に、天地の間は倏燦晦冥、やがて、風雨を起し、
 天帝の居られる九重の天門は、堅く鎖されて仕舞ひ、額を以て門の扉を叩くといふと、門番が怒り出

して、我を叱るといふ始末。とても、天帝の御側へ參ることは叶はず、従つて我が志を伸ばす様も
 ない。自分は、飽くまで、誠忠の心を以て、時事を憂憤して居るが、今の世間は、表面から見れば太
 平の世界らしいので、我を以て、杞國の人が天の落ちるを憂へて居たと同じく、餘計な心配をして居
 るものだといつて、丸で相手にしない。顧みれば、滿廷の臣僚、賢奸もとより一ならず、さまざまの人
 が入り交つて居るので、險奸の一派は、猥獮の如く、頻りに牙を磨いて人肉を食はむとして居るから、
 一たび、その怒に觸れば、唯だ死あるのみ。これに反して、忠良の一派は、專一保全、唯だ己を慎
 むばかり、いはば、全く無能であつて、かの驕虞といふ仁獸が生草の莖でさへ折らぬといふ位なこと
 で、何の役にも立たない。されば、兩者ともに、自分の氣に食はぬものである。そこで、自分は、古
 しへの人が飛猿に接し、彫虎を搏つといつた様に、貧窮と疎賤との二つと戰を續け、やがて之に打
 勝つを目的とし、義の爲には、焦原に足を側るといふ程の艱苦に遇ふも、決して辭退せぬ積りであ
 る。つまり、自分は、惡人原を盡く退治し、天下の大改革をしようといふので、その爲には、如何
 なる困難でも冒すといふのが、畢生の理想であるが、今日の世界では、その實行が、なかなか六つか
 しいから、困まり入るのである。元來、めくら滅法に猛進するといふのは、決して褒めたことではな
 く、今の場合は、暫く巻いて懐にし、時を揣り、勢を度るが至當であるので、かの一著利害を顧
 みず、直言峻節、以て危機に臨むは、愚者が自ら豪とする仕草であつて、斷じて我が取らぬところ

である。しかるに、世人は、我が引込んで世に出でざるを見ると、尋常人にも劣る詰らぬ奴だといつて、鴻毛よりも軽く我を見くびつて居るが、これは、我が眞精神を解したのではない。むかし、齊國の三士、公孫接等の如きは、まことに偉い人人であつたが、節義を砥礪するに急なりし爲め、時の宰相たる晏平仲に憎まれて、わづか二桃の爲に命を失ふやうな事に成つて仕舞つた。して見ると、いくら強いからといつても、時勢を見極めなければ、何にも成らぬので、自分も、その覆轍は踏みたくない。もし人才を愛惜する大臣があつて、士の用と不用とが國家の大計に非常な關係あることを知つて、然るべき人を用ひやうとするならば、自分も之を俟つて、やがて蹶起するであらう。むかし、七國の亂に際し、吳楚の方では、劇孟といふ俠者を棄てて顧みなかつたが、その吳楚を征伐に出かけた周亞夫といふ大將は、流石に人を知るの明があつた故に、吳楚の方で劇孟を用ひず、吾が官軍の軍師とされる様では、折角ながら、到底大事は成し遂げまい、これは吾が官軍の大勝利であるといつて、大に笑つたといふが、今の世でも、一國の政治を料理して行くには、是非とも、劇孟の如き人物を擯用しなければならぬので、羣小輩に容れられずして、放還せられし自分は、巻いて懐にして居るだけで、何とも思はぬが、天子が然るべき賢者を用ひぬとなると、丁度、周亞夫に笑はれた吳楚と一般で、その將來は、言ふに足らず、まことに、御氣の毒の事である。ここに、梁甫吟を歌ひ、曲將に終らむとして、自ら聲の悲しさを禁ずることが出来ぬ。おもへば、天の神物を生ずるや、必ず之を用ふる時ある

べく、たとへば、かの張華が発見させた龍泉太阿の二劍が、遠く數百里を隔てたるにも拘はらず、やがて合して一つに成つたといふと同じく、いつかは、赤誠の念が貫徹して、明主の知遇を得ることもあるに相違ない。抑も、雲は龍に従ひ、風は虎に隨ふといふ通りで、龍虎は必ず風雲に出合ふべき筈で、かの太公望の如きは、屠釣から起つて、やがて風雲の感會を得たのである。されば、大人君子は、たとひ、時の屯否に遇うて、峴岬として動搖するとも、しばらく、時に安んじ、おのが才能を顯はさずして、靜に時の來るを待つて居れば善いので、我も、かくの如く考へて、聊か自ら慰めて居る次第である。

【餘論】この詩は、拉雜にして、一向規律が無く、謂はゆる一斗酒詩百篇といふ元氣に任かせて、格別意を用ひずに作つたやうで、その本意は何處に在るか、一寸分り悪いやうである。しかし、長嘯梁甫吟、何時見三陽春といふ破題の二句が、根本になつて居て、以下、さまざまの事を編み出したのである。はじめは太公望、次に酈食其、この二人の事蹟を以て、自己の理想を影寫し、我欲攀龍見三明主より以額扣關闢者怒に至るまでは、例の奇幻恍惚、容易に測るべからざる句法で出來て居て、一時は玄宗の知遇を得たが、讒者の爲に君側を遠ざけられたといふ自己の閱歷を敘して居る。次に、白日不照吾精誠より亞夫哈爾爲徒勞に至るまでは、種種の故事を引き廻はして、自分が志を得ざる有様を寫して居る。最後に梁甫吟を重ねて言ひ出して、起首の長嘯梁甫吟の二句と照應せしめ、それから、數句を下して、結束として居る。して見れば、長嘯梁甫吟、何時見三陽春の二句と、梁甫吟、梁

甫吟、聲正悲、張公兩龍劍、神物合有時、風雲感會起屠釣、大人峴岨當安之の一段とが、作者命意の在るところで、その中間は、種種の方面から専ら此意を闡明したのである。蕭士贇が説明して居るも、即ち此意であるが、餘り長いから、ここには、全文を引抄することを見合はせる。それから沈德潛の評に「太白、氣を以て勝る、故に拉雜事を使うて其跡を見ず、若し善く之を學ばざれば、恐らくは、意氣粗豪、雜出不倫、詩を作る、その漸を防がざるべからず」といつて居る。まことに、その事を使ふことの多きが爲に、解説も覺えず長く成つたやうな譯である。

鳥夜啼

鳥夜啼

黃雲城邊鳥欲棲

黃雲城邊、鳥棲まむと欲す。

歸飛啞啞枝上啼

歸り飛んで、啞啞として、枝上に啼く。

機中織錦秦川女

機中錦を織る、秦川の女。

碧紗如煙隔窓語

碧紗煙の如く、窓を隔てて語る。

停梭悵然憶遠人

梭を停めて、悵然遠人を憶ふ。

獨宿空房淚如雨

獨り空房に宿して、涙、雨の如し。

【字解】【一】黃雲 地名だといふ説もあるが、ここでは黃昏の雲氣。【二】啞啞 鳥の啼く聲。【三】機中織錦秦川女 晉書に「竇滔の妻蘇氏、始平の人、名は蕙、字は若蘭、善く文を屬す。苻堅の時、滔、秦州の刺史となり、流沙に徙さる。蘇氏、これを思ひ、錦を織り、迴文璇璣圖を作り、以て滔に贈る。縱横八寸、凡そ八百四十字、宛轉循環、これを讀めば、詩三百餘首、詞甚だ悵惋と稱す」とある。秦川は、古しへの秦の故地。川は平原の義。胡三省の通鑑註に「關中の地、沃野千里、秦の故國、これを秦川といふ」とある。【四】碧紗 窓かけに用ふる水色の薄絹。

【題義】鳥夜啼は、周の房中樂の遺聲で、江左に謂はゆる梁宋新聲の樂府である。そして、その詞あるは、實に宋の臨川王義慶に始まつたのである。樂府古題要解に「宋の元嘉中、彭城王義康を豫章郡に徙す。義慶、時に江州に在り、相見て哭す。文帝聞いて之を怪み、徵して、宅に還らしむ。義慶、大に懼る。妓妾、鳥の夜啼くを聞き、齋閣を叩いて云ふ、明日應に赦あるべしと。旦に及びて、果して、南兖州刺史に改めらる。これに因つて、歌を作る。その詞に云ふ、龍窓不閉、鳥夜啼、夜夜望郎來」と。蓋し其妾を詠せしなり」とある。それから、師曠の禽經註に「鳥、雌雄を失へば、夜啼く」といひ、直解に「妾、夫君を望む、鳥の雌雄を失うて夜啼くが如きなり」とある。そこで、六朝の作者は、多く鳥啼を借つて、情懷を抒寫し、皆この體に沿ひ、大抵、遠人を寄懷するを以て其旨としたので、李白の此作も、亦た其通りである。

【詩意】夕日影、うすれさまよひ、黃昏の雲氣が城樓の邊を立ちこめて居る。折しも、歸鴉は、陣を爲して、其時に向はむとし、相呼んで啼き、その聲、啞啞として聞こえる。ここに、深閨の少婦は、

鳥の羣を失はぬを見て、愁思自ら堪へぬ有様である。この少婦は、今しも、機の上に坐つて、錦を織つて居るが、おもふに、秦川寶氏の妻を學んで、例の廻文でも織つて居るのではあるまいか。すでにして、鴉聲愈よ噪がしく、日は全く暮れた。少婦は、やをら身を起し、碧紗薄くして煙の如くなれる窓櫺に倚り、半ば之を捲き上げ、悵然頸を引いて遠望し、獨語しつつ遠人の歸り來らざるを嗟嘆し、空房の中、涙、降ること雨の如くである。

【餘論】 歸飛の二字、直に映射して、深閨離婦の眼中に入り、これを遠人に繋いで居る。鳥は晩に歸るも、人は年を経て尙ほ歸らず、見るものによつて興を起し、物に觸れて懷を傷ましむ、情景雙關の妙、神に入れりといふべきである。碧紗の一句、わづかに七字、縹緲として不盡の妙を具へ、その中、自ら千萬無量の涙痕がある。結末の二句は、前意を收束し、獨宿空房は、かの歸鳥に反映し、更に百倍の酸楚を形出し、悲咽の音、さながら耳に在るを覺えしめる。一篇の詩、はじめに歸鳥を以て興を起したので、三百篇慣用の手段も、決して此外に出でず、これを心に會得して、これを手に應ずるは、即ち青蓮の本領である。乾隆御批に「語淺く、意深し、樂府の本色なり」といつたのは、洵に允當の言である。それから、劉辰翁は「語、或は此より深きものあらむ、然れども、情の至るところ、皆かくの如くならざれば、亦た必ずしも深からざるなり。凡そ樂府を言ふものは、未だ以て此を知るに足らず」といひ、吳昌祺は「含蘊無窮、音節絶妙」といつたが、ともに、確として易ふべからざる定評である。

鳥棲曲

鳥棲曲

姑蘇臺上鳥棲時。

姑蘇の臺上、鳥棲むの時。

吳王宮裏醉西施。

吳王の宮裏に、西施を酔はしむ。

吳歌楚舞歡未畢。

吳歌楚舞、歡、未だ畢らず。

青山欲銜半邊日。

青山銜まむと欲す、半邊の日。

銀箭金壺漏水多。

銀箭金壺、漏水多し。

起看秋月墜江波。

起つて看る、秋月の江波に墜つるを。

東方漸高奈樂何。

東方漸く高く、樂を奈何。

【字解】

【一】 姑蘇臺、述異記等に「はじめ、越王勾踐の赦されて會稽より還るや、必ず謀つて吳を滅さむとし、大に天下の奇寶、美人、異味を蓄へて、吳に進め、三牲を殺し、以て天地を祀り、龍蛇を殺し、以て川岳を祠り、矯つて、江南億萬戸の民を吳に輸して、備保たらしむ。又美姬三人を買す、西施その首たり。吳王夫差、大に喜び、處らしむるに椒華の房を以てし、細珠を貫いて簾となし、朝に下し、以て景を蔽ひ、夕に捲き、以て月を待つ。西施以下の美人、軒に當つて竝坐し、鏡を理めて珠幌の内に觀放す。竊に窺ふもの、動心驚魄せざるはなし。吳王妖惑、政を怠り、大に工を起して、姑蘇の臺を築き、三年乃ち成る。周旋詰曲、横に互ること五里、土

木を崇飾し、人力を殫耗し、中に宮妓千人を置く、また別に春宵宮を立てて、長夜の飲を爲し、千石の酒鐘を作り、池中に青龍舟を造り、舟中盛に妓樂を陳じ、日に西施と水嬉を爲すとある。【二】吳王夫差。【三】西施。越より吳に贈りし美人。【四】吳歌楚舞。晉書に「吳歌雜曲、竝に江南より出づ」とあつて、吳歌は、南方の流行歌。又史記に漢の高祖が戚夫人に向つて「吾が爲に楚舞せよ、吾が爲に楚歌せむ」といつた、南方に行はれし舞曲。【五】半邊日。日輪の半。【六】銀箭金盞。これは水時計で、銅を以て造るが故に金盞といひ、又銀を鑄つて司辰となし、衣冠を具へ、左手を以て箭を抱き、右手刻を指して居るから銀箭といつた。

【題義】烏棲曲は、その由來は、詳ならざれども、梁の元帝、蕭子顯の如き、ともに其作を傳へて居る。李白の此篇は、樂極まつて悲生ずるの意を述べ、吳王の事に託して之を發したので、實は玄宗が宮廷に於て、淫樂を恣にした其事を諷したものであらうと思はれる。

【詩意】吳王夫差は、姑蘇臺上に於て宴を催し、やがて、夕方鳥が時を歸る頃となつて、西施は、初めて醉を爲した。吳の歌や、楚の舞など、交互に催されて一日を愉快に遊び暮らし、そして、今や落日が西に沈んで、その半邊が既に青山に銜まれる頃となつたのである。かくて、又夜宴が催され、金盞の上に立てる銀箭が次第に移つて、水時計から漏れ落ちる水は、愈よ多く、いつしか夜は更け行くも、宴は、まだ終らない。はては、秋の夜の月が江波に落ちて、東の空が漸く白み渡る頃となつた。かくの如く、朝より暮、夜より翌朝といふ様に、宴遊は何時に成つても止まず、その樂は、實に限ないものである。しかし、かうして居た日には、その國は、やがて滅亡する外はあるまい、まことに、情ない次第である。

【餘論】この詩は、二句ごとに韻を轉じ、終に東方漸高奈樂何といふ單句を綴つて、收束としてある。前四句は、宴酬にして、すでに黄昏に起き、更に夜を卜するを寫し、吳歌楚舞の七字は、直に醉西施の三字を承け、青山の一句は、烏棲時を解説し、逆挑の工は、流石に見るべきものである。それから、東方漸高奈樂何は、樂極まつて哀生ずる意であるが、そこまで説破せず、奈何といふ文句の中に、その意味を含めた處が、極めて面白い。本事詩に、李白が初めて蜀から長安に來た時に、賀知章は、この烏棲曲を見て、嘆賞苦吟し「これ以て鬼神を泣かしむべし」といつたことを記し、或は言ふ、是れ烏夜啼の二篇と附記してある。そこで、范杼はこの篇、烏夜啼と精金美玉といふべし」と評して居る。それから、蕭士贇は「深く國風刺詩の體を得たり、盛に其美を言うて、美ならざるもの自ら見はる」といひ、乾隆御批は更に之を敷張して「樂極まつて悲生ずるの意、寫し得て微妙、荒宴未だ幾ならずして、麋鹿、姑蘇に遊ぶ、全く説破せず、興寄深微なるものといふべし。胡應麟、杜の七哀の雋永深厚、法律森然たるを以て、謂へらく、この篇、斤兩稍や軽く、詠歎足らずと。眞意、謗傷を爲す、未だ與に議するに足らざるなり。末に一單句を綴る、不盡の妙あり」といつて居る。

戰城南

戰城南

去年戰桑乾源。今年戰葱河道。

去年は桑乾の源に戰ひ、今年は葱河の道に戰ふ。

洗兵條支海上波。

兵を洗ふ、條支海上の波。

放馬天山雪中草。

馬を放つ、天山雪中の草。

萬里長征戰。三軍盡衰老。

萬里長く征戰。三軍盡く衰老。

匈奴以殺戮爲耕作。

匈奴、殺戮を以て耕作と爲す。

古來惟見白骨黃沙田。

古來惟だ見る白骨黃沙の田。

秦家築城避胡處。

秦家、城を築いて胡を避くる處。

漢家還有烽火然。

漢家、還た烽火の然ゆるあり。

烽火然不息。征戰無已時。

烽火然えて息まず。征戰已む時なし。

野戰格鬪死。敗馬號鳴向天悲。

野戰格鬪して死す。敗馬號鳴、天に向つて悲む。

烏鳶啄人腸。銜飛上挂枯樹枝。

烏鳶、人腸を啄み。銜み飛んで上り挂く枯樹の枝。

士卒塗草莽。將軍空爾爲。

士卒、草莽に塗みれ。將軍、空しく爾か爲す。

乃知兵者是凶器。

乃ち知る、兵は是れ凶器。

聖人不得已而用之。

聖人、已むを得ずして之を用ひたるを。

【字解】

【一】桑乾。河の名、太平寰宇記に「桑乾河は、朔州馬邑縣東三十里に在り、源は北山の下に出づ」とあり、一統志に「桑乾河は、山西大同府城南六十里に在り、源は馬邑縣北洪濟山下に出で、金龍池の水と合し、東南に流れて蘆溝河に入る」とある。又唐書王忠嗣傳に「天寶元年、北奚契丹を討ち、桑乾河に戦ひ、三たび遇うて三たび克ち、武を漠北に耀かし、高會して還る」とある。

【二】葱河。葱嶺河といひ、葱嶺より發する河で、黃河の上源の一と稱せられて居る。漢書西域傳に「その河、兩源あり、一は葱嶺山に出で、一は于闐に出づ、于闐は、南山の下に在り、その河、北流して、葱嶺河と合し、東して、蒲類海に注ぐ」とあり、太平寰宇記に「西河舊事に云ふ、葱嶺は燉煌の西八千里に在り、その山高大、上に悉く葱を生ず、故に葱嶺といふ。河源は潛に其嶺より發し、分れて二水となる。涼州異物志に云ふ、葱嶺の水、東西に分流す、西は大海に入り、東は河源となる。張騫、大宛に使用して河源を窮む、ここに極まるを謂ふ、崑崙に達せざるなり」とある。又唐書李嗣業の傳に「はじめ、勃律を討ち、道を葱嶺に通ず」とある。

【三】洗兵。戰終つて兵甲を洗ひ清めること。【四】條支海上波。漢書西域傳に「條支國の城は、山上に在り、周圍四十餘里、西海に臨み、海水曲環、その南及び東北の三面路絶え、唯だ西北隅のみ陸道に通ず」とある。後漢の班超が西域を服屬したる後、大秦（即ち羅馬）に通ずる爲に、部將甘英を遣した處が、條支まで往つて、大海に妨げられて進み得ず、仍つて引き返したといふ事實がある。條支は即ちシリヤで、其海は今の地中海である。【五】天山。即ち祁連山、元和郡縣志に「天山、一名は白山、一名は時羅漫山、伊州の北一百二十里に在り。春夏雪あり、好木及び金鐵を出す。匈奴、これを天山といひ、これを過ぐるとき、皆馬を下つて拜す」とあり、史記索隱に引ける西河舊事に「祁連山は、張掖酒泉二界の上に在り、東西二百里、南北百里、松柏あり。水草に美なり、冬温夏涼、牧養に宜し、一名天山、亦た白山と云ふなり」とあり。【六】匈奴。王褒の四子讓德論に「匈奴は百蠻の最も強きものなり、耒耜は弓矢鞍馬、播種は捍弦掌拊、收歛は奔狐馳兎、穰刈は顛倒燈仆」とある。耕作の二語は、蓋し此に本づいたのであるが、鍛鍊の妙、更に精采の俾しからざるを覺える。【七】秦家築城。秦の始皇が長城を築いて、匈奴の南下を防ぎしをいふ。史記に「秦、すでに天下を併せ、乃ち蒙恬をして、三十萬の衆を將ゐて、北、戎翟を逐うて、河南を收めしめ、長城を築き、地形に因り、險を用つて塞を制し、臨洮より起り、遼東に至る、延袤萬餘里」とある。【八】烽火。漢書賈誼傳の註に「邊方備警、土臺を作り、其上に桔槔を作り、頭上

に篋笈あり、薪草を以て其中に置き、寇あれば、即ち火を燃やし、之を擧げ、以て相告ぐるを烽火といふ。多く、薪を積み、寇至るとき、これを燔く、その煙を望むを燧といふ。晝は燧を燔き、夜は烽火を擧ぐ」とある。【七】兵者凶器。太公の六韜に「聖人兵を號して凶器となし、已むを得ずして之を用ふ」とあり、老子にも「兵は不祥の器、君子の器に非ず、已むを得ずして之を用ふ」とある。

【題義】戦城南は、漢の短箫铙歌二十二曲の一で、その辭には、戦城南、死郭北、野死不葬、烏可食とあつて、一たび戦争に出かけた上は、戦死して屍を遺棄せられ、烏などに食はれてもかまはない、天晴、忠臣義士となつて、朝には出でて戦ひ、暮には歸るを得ずに仕舞ふやうにありたいといふ意味である。後には、主として戦功を述べ、その題名も毎に變るやうに成つた、即ち魏には定武功といつて、曹公が初めて鄴を破つたことを敍し、吳には克皖城といつて、孫權が魏武に此城に勝つたことを敍し、晉には景龍飛といつて、景帝即ち司馬懿の事を敍し、梁には漢東流といつて、魯山城に克つたことを敍し、北齊には立武功といつて、神武（即ち高歡）が魏主を立て、都を鄴城に遷して、天下を定めたことを敍し、後周には克沙苑といつて、太祖（即ち宇文泰）が齊軍十萬を沙苑に破り、神武が身を脱して逃れたことを敍してある。李白の此作も、その當時の事を詠じ、且つ最古の作意に立ち戻り、主として、征戰の慘苦を述べて、兵を弄し武を驕すものの戒としたのである。

【詩意】去年は、桑乾河の源頭に於て戦ひ、今年は、葱嶺河の通路で戦つた。ともに、塞外の遠地で、兵を出すには不便であつて、從軍者の辛苦は一通りではない。かくて、幸に勝を得て、凱旋するや、

條支海に臨んで、兵甲を波に洗ひ、馬も最早不用だといふので、白草雪に覆はるる天山の麓に放つて仕舞つた。しかし、萬里の遠に出で、断えず戦争を爲し、三軍の士が、いつしか體力も衰へて、生き残れるものどもは、皆老耄して仕舞つたのも、まことに無理ならぬ次第である。元來、匈奴は、未開の野蠻人で、殺戮を耕作同様に心得て、常に戦争ばかりして居る位であるから、一たび、其地に入れば、唯だ白骨が黄沙の上に散ばつて居るのを見るだけである。されば、秦の始皇は、天下の力を盡し、萬里の長城を築いて、匈奴の南下を防いだが、その害を根絶することは出来ず、漢代に成つても、塞邊では、烽火しきりに燃えて警を報じ、しかも、容易に止まず、従つて、中國から兵を出して匈奴を征伐することも、絶ゆる時が無かつた。戦争は、もとより慘澹たるものであるが、殊に戦死者の有様に至りては、一層甚しい。その野戦を爲すに當り、一騎打の格闘を爲し、やがて討死をすると、創ついた馬が、傍に立つて、天に向つて哀鳴するばかり、その屍骸は、決して始末されぬから、烏や鳶などが、よき物得たりといはむばかりに、腸を啄み、やがて、それを口にくはへて飛び上り、これを枯木の枝に引ッかけて置く。まことに、哀れに情ない。かくて、士卒の肝腦膏血は、野草に塗れ、將軍は、おのが功名さへ立てば善いので、そんな事は丸で知らぬかの如くである。げにや、古しへの人も云つた通り、兵は固より凶器であつて、聖人は、止むを得ざる場合に限りて之を用ひたので、いたづらに、邊功を好んで、征戰を事とし、民の疾苦を問はぬは、まことに、沙汰の限りである。

〔餘論〕蕭士贇は「開元天寶中、上、邊功を好んで、征伐時なし、この詩、蓋し諷するところあるなり」とある。試に之を杜甫の兵車行の中段に玄宗の邊功を好むを諷した數解と比較すれば、全く同義で、詩人の著眼、大抵相同じきを感じるであらう。なほ乾隆帝は「古詩に云ふ、戰城南、死郭北、野死不葬烏可食。又云ふ、願爲忠臣、安可復得と。白の詩、亦た其意に本づいて、語尤も慘痛、意更に切至、武を黷すを刺つて、兵を窮むるを戒むる所以のもの深し」といひ、沈德潛は「匈奴の二句、奇語と謂ふべし。末、本と莊語、卻つて搖曳を以て之を出す」とある。

將進酒

將進酒

君不見黃河之水天上來。
奔流到海不復廻。
君不見高堂明鏡悲白髮。
朝如青絲暮成雪。
人生得意須盡歡。
莫使金樽空對月。

君見すや、黃河の水は、天上より來る。
奔流、海に到つて、復た廻らず。
君見すや、高堂の明鏡、白髮を悲む。
朝には青絲の如く、暮には雪を成す。
人生得意、須らく歡を盡すべし。
金樽をして、空しく月に對せしむる莫れ。

天生我材必有用。
千金散盡還復來。
烹羊宰牛且爲樂。
會須一飲三百杯。
岑夫子丹丘生。
進酒君莫停。
與君歌一曲。
請君爲我側耳聽。
鐘鼓饌玉不足貴。
但願長醉不願醒。
古來聖賢皆寂寞。
惟有飲者留其名。
陳王昔時宴平樂。

天、我が材を生ずる、必ず用あり。
千金散じ盡せば、還た復た來る。
羊を烹、牛を宰して、且つ樂を爲せ。
會す須らく、一飲三百杯なるべし。
岑夫子、丹丘生。
酒を進む、君停むる莫れ。
君の與に一曲を歌はむ。
請ふ、君、我が爲に耳を側てて聽け。
鐘鼓饌玉、貴ぶに足らず。
但だ長醉を願うて、醒むるを願はず。
古來聖賢、皆寂寞。
惟だ飲者の其名を留むるあり。
陳王、昔時、平樂に宴す。

斗酒十千恣（九）謹諱。

主人何爲言少錢。

徑須沽取對君酌。

五花馬（一〇）千金裘。

呼兒將出換美酒。

與爾同銷萬古愁。

斗酒十千、謹諱を恣にする。

主人、何すれぞ、錢少しといふ。

徑に須らく沽取し、君に對して酌むべし。

五花の馬、千金の裘。

兒を呼び、將に出でて美酒に換へしめむとす。

爾と同じく銷さむ、萬古の愁。

【字解】【一】金樽。美酒を盛りたる樽、銅製の酒器と見ても善い。【二】宰。居る。【三】一飲三百杯。世説註に「鄭玄別傳に曰く、袁紹、玄を辟し、去るに及びて、之を城東に饒し、玄をして必ず醉はしめむと欲す、會するもの三百餘人、皆席を離れて觴を奉じ、且より暮に及ぶ、度るに、玄、三百餘杯を飲む、しかも、温克の容、終日忘るなし。陳暄、兄の子秀に書を與へ、鄭康成一飲三百杯、吾、以て多しと爲さず」とある。【四】岑夫子。岑參を指す、杜甫の詩に「岑生多新語、性亦嗜醇酎」とある位で、酒が大好であつたに相違ない。【五】丹丘生。元丹邱、李白の元丹丘山居詩の序に「元丹丘は、潁陽に家し、新に別業を卜す、その地、北は馬嶺に倚り、峰を嵩丘に連れ、南は鹿臺を瞻、目を汝海に極む」とある、二人ともに太白の好友。【六】饌玉。饌は飲食すること、玉は其珍美なるを形容して云ふ。【七】陳王。魏の曹植、武帝の子、文帝の弟、太和六年、封ぜられて陳王となる。その作名都篇に歸來宴三平樂、美酒十千とある。【八】平樂。樓觀の名。【九】十千。一萬に同じ。【一〇】五花馬。馬の毛色、五色の文を爲すをいふ。或は、馬の前鬃を五所に辨みたる故に云ふとの説もある。【二】千金裘。史記に「孟嘗君、一狐白裘あり、直千金、天下無雙」とあるを暗用したのである。

【題義】將進酒は漢の鼓吹鏡歌十八曲の一、古詞には、將進酒、乘大白とあつて、大抵飲酒放歌を以て言を爲して居る。宋の何承天の將進酒篇には、將進酒、慶三朝、備三繁禮、薦三佳肴とあつて、朝會酒を進むるを言ひ、且つ濡首荒志を以て戒と爲したのである。梁の昭明太子は、洛陽輕薄子といひ、専ら遊樂飲酒を敍して居るが、これが即ち本義であつて、李白の作も、矢張さうである。

【詩意】黄河九曲の水は、遠く天上より落ち來り、奔流矢の如く、東に向つて流れ、やがて、一たび海に入れば復た回らず。人間の歲月、まことに短くして、一日は再び晨なり難しといふ有様で、丁度この黄河の様なものである。それから、高堂の上、明鏡に對して白髪を悲むものを見よ、朝には、緑髪ふさふさとして絲の様であつたのが、暮には、頭に雪を戴いて、こんな有様に成りはてて仕舞つたのである。人生は朝露の如く、若い時は二度とは無い。そこで、得意の折柄、宜しく十分に歡を罄し、置酒高會、以て興を縦にすべく、折角の金樽をして、空しく明月に對せしむべき筈のものでは無く、かういふ場合には、どしどし酒を傾けるが宜しい。抑も、天が我が材能を生じたのは、決して、偶然でも、無意味でもなく、必ず何處にか役立てやうとした爲めである。されば、たとひ今は不遇なりとも、抑鬱之餘、自暴自棄の振舞をしては宜しくない。富貴貧賤、皆是れ一時の事、千金一擲して散じ盡すとも、又復た戻つて囊中に入る時もあらう。宜しく、羊を料理し、牛を殺し、佳肴山の如く、すでに酒もりをする以上は、一飲三百杯、朝から晩まで、ゆつくりと樂を恣にするが善い。岑夫子

樂府將進酒

よ、丹丘先生よ、われ卿に進むるに酒を以てすべし、願はくは、卿、杯を下に置かずに、どしどし召し上つて下さい。われ又、卿の爲に一曲を歌ふから、卿は耳を傾けて、しづかに聞いて呉れよ。あ鐘鼓の樂、美珍の膳、必ずしも貴ぶべきに非ず、唯だ願はくば、いつまでも酔ひ通して、決して醒める時の無いやうにしたい。古來、聖賢の徳を以てするも、その死後は、まことに、ひっそりと寂寞殊に甚しく、世上これを稱するものさへもない位。これに反して、酒飲みの手合は、善く其名を留めて、萬古に不朽である。むかし、陳思王曹植は、平樂觀に宴し、萬斛の酒を酌み、終日流連して、勝手に喜び戯れたといふが、これこそ、達者の事、我等の宜しく學ぶべきところである。酒中の滋味は、かくの如くであるのに、主人は、如何なれば、錢少しいふか、壺中の酒、盡くれば、直に沽ひ來り、又又君に對して十分に酌まむのみ。五花の馬、千金の裘、たとひ珍貴の物なりとて、決して惜むには及ばない。そこで、小厮を呼んで、これを市上に賣り拂ひ、その金で美酒を買ひ、汝と共に痛飲して、萬古の愁を消さうでは無いか。人間の事は、くよくよと考へるにも及ばない、ただ酒を飲んで、酔ひさへすれば、それで善いのである。

【餘論】通首、酒中の趣を道ひ盡して、復た餘蘊なく、たしかに、飲酒家の福音である。しかし、蕭士贇が「この篇、任達放浪に似たりと雖も、しかも、太白素より用世の才を抱いて遇合せず、亦た自ら慰解するの詞のみ」といへる通り、その骯髒不平を消遣する爲に、強ひて酒を縦にしたといふ、

その苦衷を精細に見て遣らねばならぬ。全篇、一氣流注、もとより格律に拘拘たるものに非ず、そして、天生我材、必有有用、千金散盡還復來といひ、古來聖賢皆寂寞、惟有飲者留其名といひ、豪宕の中に、自ら神理を存し、これを結節となすが故に、絶えて平板の弊なくして、警策の妙が自ら見はれて居る。五花馬以下、頽然自放、これを賀知章の莫謾憂沽酒、囊中自有錢に比すれば、頓挫搖曳の工、はるかに其上に在るを知るべく、居然として、太白獨特の筆を推すべきである。

行行且遊獵篇

行行且遊獵篇

邊城兒。生年不讀一字書。

邊城の兒、生年一字の書を讀まず。

但將遊獵誇輕趨。

但だ遊獵を將て輕趨を誇る。

胡馬秋肥宜百草。

胡馬秋肥えて、百草に宜し。

騎來躡影何矜驕。

騎し來つて、影を躡む、何を矜驕。

金鞭拂雪揮鳴鞘。

金鞭雪を拂うて、鳴鞘を揮ひ。

半酣呼鷹出遠郊。

半酣鷹を呼んで遠郊に出づ。

弓彎滿月不虛發。

弓は滿月を彎いて、虚しく發せず。

雙鶴迸落連飛翮。

雙鶴迸落、飛翮に連る。

海邊觀者皆辟易。

海邊觀るもの、皆辟易。

猛氣英風振沙磧。

猛氣英風、沙磧に振ふ。

儒生不及遊俠人。

儒生は及ばず、遊俠の人。

白首下帷復何益。

白首帷を下す、復た何の益かあらむ。

【字解】一 輕趨 趨は捷、すばしい貌。二 白草 漢書の註に「白草は、草の白きもの」とあり、又「白草は莠に似て細、芒なし、その乾熟するとき、正白色、牛馬の嗜むところなり」とある。して見れば、一種特別の物のやうであるが、普通には、秋に成つて雜草の色が變衰するを云つたと見れば宜からう。三 躡影 影は日影。四 鳴鞘 鞘は鞭鞘。五 雙鶴 鶴は鶴雞、尾の黒い鳥。六 飛翮 翮は鳴鶴、即ちかぶら矢。七 辟易 却退して其本處を易へるといふこと、恐れ入つて其場處から立ち去ること。八 遊俠 俠を使うて遊び居るもの、荀悅の漢紀に「氣勢を立て、威福を作し、私交を結び、以て強を世に立つるもの、これを遊俠といふ」とある。九 白首 白頭と同じ。一〇 下帷 漢書に「董仲舒、少にして春秋を治め、孝景の時、博士となり、帷を下して講誦す。弟子傳ふるに久次を以てし、業を相受け、或は面を見るなし」とある。

【題義】胡震亨の説に「行行且遊獵篇は、梁の劉孝威に始まり、その辭、天子遊獵の事を詠ず、太白は邊城の兒の遊獵を詠ず、同じからずと爲すのみ」とある。玄宗の世は、窮邊黠武の時代で、武張つたことのみ行はれ、軍人だけが大持てであつて、儒生は一般から冷遇を受けた。そこで、李白の此篇

は、古題を借りて、わざと邊城の兒を詠じ、武力盛行の時、文字を弄んで居るものは、半文錢の價値なきことを慨嘆したのである。

【詩意】邊城の健兒輩は、生れて以來、かつて一字も書物を読まず、唯だ遊獵を以て、おのが身の輕く素ばしっこいことを誇つて居る。今しも、秋高くして、白草茫茫、胡馬正に肥え、遊獵には持つて來いといふ時節であるから、彼等は、馬に跨り、ひらりと乗り出し、日影を踏んで、野外に出かける。その有様は、如何にも朗かで、意氣揚揚として居る。そこで、金鞭を振り廻し、地上に堆き雪を拂つて進めば、腰に佩びたる鞭の鞘が音を立てて震ひ動く。かくて、興愈よ酣になると、鷹を呼んで、鳥を搏たせ、又自分も遠い野原に乗り出し、弓を満月の如く引き絞つて、矢を放つと、一つも無駄が無く、おまけに、一つの鏑矢で、二つの尾黒鳥を射落す位。海岸で之を見て居たものどもは、皆恐れ入つて、後びさりをする。彼等の猛氣英風は、沙漠に振ひ、傍に人も無げなる有様である。彼等は、一字も書物を読まずして、此の如くであるが、書物を読んで居る儒生は、到底、この種、遊俠の人の意氣揚揚たるに及ばないので、白髪頭になるまで、帷を下して勉強しても、何の益するところもなく、世人からは、全く度外視されて居る。何と困まつたものではないか。

【餘論】蕭士贇は、天寶以後、上、邊功を好み、武士志を得、儒生は進用を得ること罕なり、太白は、號して儒者と爲す、亦た自ら嘆ずといふ」といひ、乾隆御批も之を承け、「文教を授り、武術を奮

ふ、二者偏廢すべからず。これ、白、時を憤り、激するあつて作る。蓋し天寶以後、益す邊功を好み、武士志を得たり、亦た世道の憂なり」といつて居る。

飛龍引 二首

飛龍引 二首

黃帝鑄鼎於荆山鍊丹砂。

黃帝鼎を荆山に鑄て、丹砂を鍊る。

丹砂成黃金。

丹砂、黄金を成す。

騎龍飛上太清家。

龍に騎して、飛んで上る太清の家。

雲愁海思令人嗟。

雲愁海思、人をして嗟せしむ。

宮中綵女顔如花。

宮中の綵女、顔花の如し。

飄然揮手凌紫霞。

飄然、手を揮つて、紫霞を凌ぐ。

從風縱體登鸞車。

風に從ひ、體を縱にして、鸞車に登り、

登鸞車侍軒轅。

鸞車に登り、軒轅に侍す。

遨遊青天中其樂不可言。

遨遊す青天の中、その樂や、言ふべからず。

【字解】

【一】黃帝 史記に「黃帝、首山の銅を采り、鼎を荆山の下に鑄る。鼎、すでに成る。龍あり、胡髯を垂れ、下つて黃帝を迎ふ。黃帝、上り騎す。羣臣後宮、從つて上るもの七十餘人、龍、乃ち上り去る。餘の小臣、上るを得ず、乃ち悉く龍髯を持す、龍髯抜け墮つ。黃帝の弓を墮す。百姓仰望すれば、黃帝、すでに天に上る。乃ち其弓と龍髯とを把つて號ぶ。故に後世因つて其處を名づけて鼎湖といひ、その弓を烏號といふ」とある。【二】鍊丹砂 史記に「李少君、上に言つて曰く、竈を祠れば、物を致す。物を致せば、丹砂化して黄金と成るべし。黄金成つて、以て飲食の器と爲せば、壽を益さむ。壽を益せば、海中蓬萊の仙者、乃ち見るべし。これを見て以て封禪すれば死せず。黃帝これなり」とある。【三】太清 大空。【四】雲愁海思 梁の豫章王の詩に「雲愁海思徒揜抑とあるに本づく。【五】綵女 美女に同じ。【六】縱體 曹植の洛神賦、忽焉縱體、以邀以嬉の註に「縱體は、輕擧の貌」とある、體の輕げなるをいふ。【七】鸞車 白鸞に引かせて仙人の乗る車。【八】軒轅 史記に「黃帝は少典の子、姓は公孫、名を軒轅といふ。土徳の瑞あり、故に黃帝と號す」とある。

【題義】

飛龍引は、琴曲歌詞の一で、琴歌の古いものである。李白の此題は二篇あつて、主として、黃帝が、鼎湖丹成つて後、龍に騎して上昇せしことを述べたのである。但し、前詩は専ら上昇の樂を述べ、後詩は史記漢書に載せた司馬相如の大人賦を切り詰めて、十數句に短縮したやうなもので、その本意は、玄宗の末年、神仙の道に惑溺し、長生不死の藥を求められると信じて居られるやうだが、そんな事は決して有り得べきことではないといつて、之を諷した一邊に在るので、二詩互に表裏を爲し、一正一反、各、その妙を極めて居る。

【詩意】

黃帝は、首山の銅を采り、荆山の下に於て鼎を鑄つた。それは、丹砂を鍊る爲であつて、丹砂は、幾たび鍊り上げられ、やがて黄金となり、それを服すると、果然仙人と成つて上昇した。そ

こで、龍に乗つて、大空に飛び上り、天上の仙居へ向つて往つたが、雲海渺漫として、その跡、尋ぬるに由なく、人をして、嗟嘆せしめるばかりであつた。ここに、後宮に居た顔色さながら花の如き美女どもは、黄帝に棄てられては大變だといふので、自分達も、飄然として身を躍らし、手を揮つて、紫の霞を凌ぎつつ天に上つて行くと、いつしか、仙術を得たものと見え、體は軽くして、自由に空を度れる程で、やがて白鸞の引く車に乗つて、黄帝の後を追ひ、その傍に侍して青天の中に遊び戯れて居る。まことに、天上の樂は、心も言葉も及ばぬ位。世に言ひ傳へて居る黄帝登仙の事は、ざつと此通りである。

鼎湖流水清且閒。鼎湖の流水、清且つ閒なり。

軒轅去時有弓劍。軒轅去る時、弓劍あり。

古人傳道留其間。古人傳道ふ、其間に留まると。

後宮嬋娟多花顏。後宮嬋娟、花顏多し。

乘鸞飛煙亦不還。鸞に乘じ、煙飛んで、亦た還らず。

騎龍攀天造天關。龍に騎し天を攀ちて、天關に造る。

【字解】【一】弓劍。黄帝が上昇せし時鳥號の弓を墮したことは、前首に解して置いた、それから、劍を遺したことは抱朴子に「黄帝、自ら亡日を擇び、七十日に至つて去り、七十日にして還る、喬山に葬る。陵崩るるや、墓空しくして尸なく、但だ劍烏あるのみ」とあつて、同じ事が列仙傳にも見えて居る。【二】嬋娟。美好の貌。

【三】天關。天上の宮闕。【四】玉女。仙

造天關。聞天語。天關に造り、天語を聞く。

長雲河車載玉女。長雲河車、玉女を載す。

載玉女。過紫皇。玉女を載せて、紫皇を過ぐ。

紫皇乃賜白兔所。紫皇、乃ち白兔擣くところの藥方を賜ふ。

擣之藥方。

後天而老凋三光。天に後れて老い、三光を凋む。

下視瑤池見王母。下、瑤池を視て王母を見れば、

蛾眉蕭颯如秋霜。蛾眉蕭颯として秋霜の如し。

視瑤池。太平廣記に「西王母居るところの宮室九層、玄室紫翠丹房、左に瑤池を帯び、右に翠水を環らす」とある。【一〇】蛾眉蕭颯。司馬相如の大人賦に、吾乃今日睹西王母、昂然白首戴勝而穴處とあると同義、秋霜は即ち白首の意。

【詩意】黄帝昇仙の遺蹟たる鼎湖へ来て見ると、流水は古しへに異ならず、清くして且つ閒である。古來傳ふるところに據れば、黄帝上天の後、遺物としては、弓と劍との二つだけが、この鼎湖の側に残つて居たとのことである。そして、黄帝の後宮に居た嬋娟たる美人は、鸞に乗り、煙を飛ばし、矢

張、黃帝に從つて上天し、これも二度とは還らない。さて黃帝は龍に乗じて、天上の玉帝のおはします天關に至つて、天語を聞かれた。かの嬋娟たる美人どもは、長雲の車に乗つて、銀河を横ぎり、やがて、紫微宮に於て紫皇に謁見した。その時、紫皇は、廣寒宮で白兔が年中擣くといふ仙藥の藥方を黃帝に賜はつた。この藥方は、まことに貴いもので、これを服用すれば、萬一天が老ゆることがあつても、その天よりも後れて老い、日月星の三光が萎んで仕舞つても、自分の身體だけは、現存するといふので、つまり長生不老の靈藥である。然る處、黃帝并に宮女の一行は、歸り途に、不圖、崑崙山の瑤池の方を見下ろすと、女仙の大將として知らるる西王母は、眉毛が蓬蓬として、その色は白く、さながら秋の野に下りた霜のやうで、蕭颯として風に動いて居る。もし天に後れて老い、三光が凋んで、其人の身體は、毀れないといふ様な靈藥があるならば、西王母は、何時までも花顏嬋娟として、若若しくあるべきに、かくの如く老い朽ちて、死の迫つて居るのを見ると、折角の靈藥も、あてには成らず、神仙の道などは、斷じて、信するに足らぬものである。

【餘論】前首は、上天の樂を傳説の儘に述べたので、格別の諷意もないから、唐宋詩醇などには、後首だけを抜いてある。乾隆御批に「一結、大人賦より翻出す。仙者天に後れて老ゆ、乃ち蛾眉蕭颯、かくの如くなれば、不老者、且つ先づ凋む。諷意微にして顯」とある。西王母は、普通に女仙の大將分として知られ、穆天子傳などに見えて居るが、山海經に據ると、西方に居た一人種で、男のやうな

髪で、豹の牙、虎の齒を持つて居るといふ怪物であるし、大人賦には、儼然白首といつて、毛が眞白であるとしてある。李白は、それ等に本づいて、黃帝が瑤池を見下ろしたといふ事實を架空的に結撰し、蛾眉蕭颯の一句を以て、西王母を詠出したので、さすがに、巧思を推すべきである。白居易の新樂府にも、海漫漫の一首があつて、神仙を説くものの妄誕にして信すべからざることを痛言して居るが、旨意が餘り明白に過ぎる。それから觀ると、李白の此詩などは、徹頭徹尾、人間離れがして居て、恍惚の中に諷意を含ませたので、はるかに面白いといはねばならぬ。

天馬歌

天馬の歌

天馬來出月氏窟。天馬來つて、月氏の窟より出づ。

背爲虎文龍翼骨。背は虎文を爲し、翼骨を龍にす。

嘶青雲振綠髮。青雲に嘶き、綠髮を振ふ。

蘭筋權奇走滅沒。蘭筋權奇、走つて滅沒。

騰崑崙歷西極。崑崙に騰り、西極を歷たり。

四足無一蹶。四足、一蹶なし

【字解】(一) 天馬 史記に「天子、烏孫の馬を得て好し、名づけて天馬といふ。大宛汗血の馬を得るに及びて、益す壯。更めて烏孫の馬を名づけて西極といひ、大宛の馬を名づけて天馬といふ」とある。(二) 月氏 一に月支とも書く。山海經の註に「月支國、好馬多し」とあり、史記正義に萬震の南州志を引いて「大月支は、天竺の北に在り、七千里ばか

雞鳴刷燕晡秣越けいめいしゅうえんぷいばくやく

神行電邁躡恍惚しんかうでんまいしゅんてんくわうこつ

天馬呼飛龍趨てんばよひひりゅうしゆ

目明長庚臆雙鳧めはちやうかうあきらおくさうふ

尾如流星首渴鳥おはりうせいごとくびかつう

口噴紅光汗溝珠くちこうかうははかんこうしゆ

曾陪時龍躡天衢かつてじりゆうはいてんく

羈金絡月照皇都ききんらくげつくわうて

逸氣稜稜凌九區いつきりやうりやうきうく

白壁如山誰敢沾はくへきやまごとなれあへか

回頭笑紫燕かうべめやしせん

但覺爾輩愚ただおぼなんぢばいおろか

天馬奔戀君軒てんばはしきみがけんをこ

り。地高燥にして遠し。國中騎乘、常に數十萬匹、城郭宮殿、大秦國と同じ。人民赤白色、弓馬を便習す。土地出すところ、及び奇偉珍物、被服鮮好、天竺も及ばざるなり。外國稱す、天下に三衆あり、中國を人衆となし、大秦を寶衆となし、月支を馬衆となす」とある。【三】背爲虎文馬の背の毛なみが虎の斑の如くなるをいふ。漢の天馬歌に虎背兩化若鬼とあつて、應劭の註に「馬の毛色、虎背の如きもの、兩あるなり」とある。【四】龍翼骨 肋骨が龍の骨の如く森張して居ること。一本に龍其骨とある、さうすれば、一般の骨といふことになる。【五】蘭筋 陳琳が曹洪の爲に魏の文帝に與へたる書に整蘭筋とあつて、李善の註に「相馬經に云ふ、一筋、玄中より出づ、

駃躡驚矯浮雲翻しやうやくけいけいしやうふうんひるがへ

萬里足躑躅ばんりあしてきちやく

遙瞻閭闔門はるかみしやうかふめん

不逢寒風子かんふうしにあはず

誰採逸景孫たれとついつけいそん

白雲在青天はくうんせいてん

丘陵遠崔嵬きやうりやうとほさいくわい

鹽車上峻坂えんしやしゆんぱん

倒行逆施畏日晚たうかうぎやくしひのおくるるを畏る

伯樂剪拂中道遺はくらくせんぷつちゆうだう

少盡其力老棄之せうしんそのちからつくおいて之を棄つ

願逢田子方ねがはくはでんしほう

惻然爲我悲さくぜんわが爲に悲しまむ

これを蘭筋といふ、玄中とは、目の上陥つて、井の字の如し。蘭筋堅きものは、千里」とあり、呂尙の註に「蘭筋とは、馬の筋節堅きもの、千里の足なり」とある。して見ると、蘭筋とは、目の上の窪みの處から一條の筋が走り出して居るので、その筋の堅いものは、即ち千里の駿足であるといふこと。【六】權奇 善行の貌、即ち蘭筋がはつきりと通つて居ること。【七】騰 上る。【八】崑崙 山名、西北に在つて、その高さ萬九千里と稱せられて居る。【九】西極 大陸の西のはて、天馬歌に天馬徠、從西極、涉流沙、九夷服とある。【一〇】一蹶 蹶はつまづく。【一一】雞鳴刷燕 朝には北方なる燕の地で飲ふ。【一二】晡秣越 日暮には南方なる越の地で秣飼ふ。晡

雖有玉山禾。

玉山の禾ありと雖も、

不能療苦飢。

飢に苦しむを療する能はず。

嚴霜五月凋桂枝。

嚴霜、五月、桂枝を凋み、

伏櫪銜窻摧兩眉。

伏櫪、窻を銜んで、兩眉を摧く。

請君贖獻穆天子。

請ふ君、贖うて穆天子に獻せよ。

猶堪弄影舞瑤池。

猶ほ影を弄して、瑤地に舞ふに堪へたり。

は、日、申時に加ふること。秣は、粟を以て馬に飯すること。【三】電邁電光の如く馳せ行く。【四】躡恍惚恍惚として地を躡む、足が地に付くか付かぬかといふこと。【五】長庚太白星、即ち宵の明星。【六】臆雙覺。安驥書に「雙覺とは、胸の兩邊の肉、覺の如し。兩間開くところ、これを視れば、雙覺の上に向はむと欲するが如し」とある。【一七】尾如流星。埤雅に「奮説、馬を相す、頭を擧ぐることを鷹の如く、尾を垂るること慧の如し」とある。【一八】首渴鳥。後漢書に「翻車渴鳥を作り、橋西に施し、用つて、南北の郊路に灑ぐ」とあつて、寧懷太子の註に「渴鳥は、曲筒を作り、氣を以て水を引いて上ぐるなり」とある。つまり、唧筒の先端の如きもので、その形より云つたのであらう。馬の首の昂矯せる状態は、渴鳥に似て居るといふので、前に鷹の如しといへると同義。【一九】口噴紅光。齊民要術に「馬を相するの法、口中紅を得て、光あらむと欲す」といひ、又「口中色紅白を得て、火光の如くならむと欲するを善しとなす。材氣多く、良且つ壽」とある。【二〇】汗溝珠。赭白馬賦に「膺門沫赭、汗溝走血とあつて、汗の流れる溝が血色をなすといふこと。一本に珠を朱に作つてあるが、その方が宜しい。【二一】時龍。時を得たる龍、即ち天子。【二二】天衢。都の町筋。【二三】羈金絡月。羈は馬の頭を絡める綱、それが金で作つてある。月は馬の頬で、相馬經に「權は頰權、滿つること月の如くならむを欲す」とある。絡月は馬の頰を縛るもの。【二四】九區。九服に同じ、王畿千里を中心とし、その外、千里ごとに界を爲し、これを照といひ、一名をつけて九千里に及んで居る。つまり世界といふ義。【二五】紫燕。尸子に「我、民を得て治むれば、馬に紫燕蘭池あ

するが如し」とある。【一七】尾如流星。埤雅に「奮説、馬を相す、頭を擧ぐることを鷹の如く、尾を垂るること慧の如し」とある。【一八】首渴鳥。後漢書に「翻車渴鳥を作り、橋西に施し、用つて、南北の郊路に灑ぐ」とあつて、寧懷太子の註に「渴鳥は、曲筒を作り、氣を以て水を引いて上ぐるなり」とある。つまり、唧筒の先端の如きもので、その形より云つたのであらう。馬の首の昂矯せる状態は、渴鳥に似て居るといふので、前に鷹の如しといへると同義。【一九】口噴紅光。齊民要術に「馬を相するの法、口中紅を得て、光あらむと欲す」といひ、又「口中色紅白を得て、火光の如くならむと欲するを善しとなす。材氣多く、良且つ壽」とある。【二〇】汗溝珠。赭白馬賦に「膺門沫赭、汗溝走血とあつて、汗の流れる溝が血色をなすといふこと。一本に珠を朱に作つてあるが、その方が宜しい。【二一】時龍。時を得たる龍、即ち天子。【二二】天衢。都の町筋。【二三】羈金絡月。羈は馬の頭を絡める綱、それが金で作つてある。月は馬の頬で、相馬經に「權は頰權、滿つること月の如くならむを欲す」とある。絡月は馬の頰を縛るもの。【二四】九區。九服に同じ、王畿千里を中心とし、その外、千里ごとに界を爲し、これを照といひ、一名をつけて九千里に及んで居る。つまり世界といふ義。【二五】紫燕。尸子に「我、民を得て治むれば、馬に紫燕蘭池あ

り」といひ、呂延西の註に「紫燕は良馬」とある。【二六】軒。車に同じ。【二七】駭。駭は馬の銜を垂いて馬を走らせること。【二八】躡。足を住めること。【二九】閶闔。天門、前に見ゆ。【三〇】寒風子。呂氏春秋に「古しへの善く馬を相するもの、寒風氏、口齒を相す、天下の良工なり」とある。【三一】逸景孫。陸雲の書に「逸影の迹、永く幽冥の坂を繋ぐ」とあつて、名馬の子孫といふこと。【三二】白雲在青天。西王母の謠に白雲在天とある。【三三】倒行逆施。無理な事をする。史記に「伍子胥曰く、吾、日暮れて途遠し。吾、故に倒行して逆施す」とある。【三四】伯樂。姓は孫、名は陽、善く馬を馭せし人、轉じて善く馬を相する人の義に用ふ。【三五】剪拂。毛や鬣を剪り揃へ、その塵垢を洗拭する、つまり馬の手入をする。【三六】田子方。韓詩外傳に「田子方。出でて老馬を道に見、喟然として志あり、以て御者に問うて曰く、これ何の馬ぞや。曰く、故の公家の畜なり、罷れて用を爲さず、故に出して放つなり。田子方曰く、少にして其力を盡し、しかも、老いて其身を棄つ、仁者は爲さざるなりと。帛を束れて之を贖ふ。窮士、これを聞いて、心を歸するところを知る」とある。【三七】玉山禾。瓊山の禾に同じ、即ち崑崙山の木禾で、山海經に「崑崙の上に木禾あり、長さ五尋、大さ五圍」とある。【三八】伏櫪。櫪は馬槽、馬の飼料を入れる大桶。【三九】穆天子。周の穆王、列子に「穆王、意を肆にして遠遊し、命じて八駿の乘に駕し、馳驅千里、遂に西王母に賓し、瑤池の上に觴す」とある。【四〇】瑤池。前の飛龍引に見ゆ。【四一】舞。馬の行く貌、

漢書武帝紀、元鼎四年の秋、馬、渥洼の水中に生せしに因つて、天馬の歌を作つた。太初四年春、貳師將軍李廣利は、大宛王の首を斬り、汗血の馬を獲て來りしに因り、西極天馬の歌を作つた。李白の此辭は、遠く此等を祖として居るが、天馬に託して、自己の不遇を詠嘆したのである。【詩意】天馬は、もと支那に産するものではなく、遠き月支國の石窟に生まれ、はるばると東に來たのである。その形を見ると、背の毛なみは、虎の斑のやうで、肋骨は龍の如くである。かくて、天上の青雲を望んで嘶き、緑髪の鬘鬘たる鬣を打ち振り、目の上の窪みからは一條の筋が、はつきりと通つ

て、天晴名馬の相を爲せる通り、その走るときは、滅するが如く、没するが如く、とても、人の目には止まらぬ程である。さて月支の故國より出で、崑崙の山に飛び上り、西極を歴て、やがて、支那に來たのであつて、長い険しい路を通つて來る間、四足は一度も躓いたことがなかつた。そこで、雞鳴の時には燕地に飲ひ、日没の時には越國に於て秣ひ、一日の中に、支那の北の端から南の涯までも駆け通すといふので、その馳せ行く有様は、神靈が飛行したり、電光が閃いたりするやうで、足も地に著かぬ程である。天馬が一たび聲を揚げて嘶くと、忽ちにして飛龍の如く走り出す、その馳せ行くのを見て居ると、目はきらきらと耀いて、さながら夕づつと見まがふばかり、胸は高く膨れ上つて、二羽の鴨を並べたやうであるし、尾はふさふさとして、流星の光芒の如く、首は水を汲み上げる渴鳥といふものの形をして居る。それから、口中は眞赤に輝き、汗の流る處は溝を爲して、血の色に濕つて居る。この天馬は、かつて、天子の御供をして、都大路を練つて行つたことがあつて、首や頬を絡める金の綱は、さらさらしく光つて皇都を照らし、従つて、馬は逸氣稜稜として、世界を藐視して居た程で、この時こそ、天馬として知られて居たから、結構な玉を山の如く積み上げて、到底買ふことも出來ず、古しへ名馬と稱せられた紫燕などは、まるで眼中になく、すべて愚なものととして斥けられる位であつた。然れども、天馬は、やがて、棄てられて、天子の眷顧を得られなくなつたので、處定めず、惑ひ走りつつ、なほ君の御車を引きたいと心に念じつつ、その材能は、依然として變せず、

一たび銜を叩いて走らすれば、身を躍らして浮雲の翻るが如く、ゆたかに馳せ廻ることが出来るのであるが、その願ひ通りに成らぬが爲に、萬里を歩むべき足も、よろほひて留まり、はるかに、九重の天門を見つめて居る。げにや、寒風子の如く、善く馬を相する人でなければ、誰か逸景の子孫とも稱すべきこの名馬を見分けやうぞ。仙郷の遠きことは、白雲の青天に在るが如く、これを隔つる邱陵は、遙かの方まで連つて、険しく聳えて居る。天馬は、今や無残にも、鹽を積んだ重たい車を曳かされて、峻坂を登つて行くので、まことに、無理無態な事を強ひられ、日の暮るるを畏れて居る。おもへば、伯樂は、その初、折角この天馬を見つけ出し、毛や鬣を切り揃へたり、塵垢を洗ひ流したりして、折角世話をして呉れたが、如何なる故か、中道にして之を棄てて仕舞つた。かくて、天馬は、若い時分に其材力を盡して、随分働いたが、老いての後には、誰もかまつて呉れない。もし田子方に遇つたならば、惻然として、我が爲に同情を寄せて呉れるに相違なく、どうかして、かかる人に遇ひたいものである。今や、天馬は、疲れて衰へ切つて居るので、たとひ、崑崙山に生ずといふ木禾ありとも、その飢に苦むを救ふことは出來ない。今の世は、物ごとに間違つて居て、五月といふ夏の半に、ひどい霜が降つて、桂花の枝を凋ませると同じ様である。この時に當つては、天馬も今さら仕方なく、馬草桶に首を衝き込んだ儘、おのが不幸を嘆息しつつ、兩の眉を摧かむばかりである。さはれ、天馬の本質は、少しも變じないから、もし之を知り、之を憐み、やがて、金を出して贖ひ戻し、鹽車

を引くの苦痛を脱せしめ、やがて、これを周の穆王にでも獻じたならば、天晴八駿の一として、その才の美を發揮し、自由自在に、天下を駆けめぐり、はては、西王母の居る瑤池に往き著き、影を弄して舞ひ躍ることも出来るであらう。

【餘論】はじめに、天馬が月支から来たことを敍し、次に、天馬が天子に召し出されて、一時は得意であつたことを敍し、次に、零落して鹽車を曳いて居ることを敍し、結末數句、その本質は依然たる儘で、まだまだ用ひさへすれば、隨分役に立つといふ意を以て收束したのである。蕭士贇の説に「この篇、蓋し逸羣絶倫の士、己を知るものに遇はざるが爲に嘆ず。亦太白、その用ひられざるを傷んで、知を人に求むるか」とある。その構想は、誰でも言ひさうなことで、格別新しくもないが、措辭の工妙と相待つて、なほ賞誦を値するものである。

行路難 三首

行路難 三首

金樽清酒斗十千。

金樽の清酒斗十千。

玉盤珍羞直萬錢。

玉盤の珍羞、直萬錢。

停杯投筯不能食。

杯を停め、筯を投じて、食ふ能はず。

【字解】一 斗十千。曹植の詩に美酒斗十千とあるに本づく、萬斛といふに同じ。二 直萬錢。北史に「韓晉明、酒を好みて縱誕、賓客を招飲するや、一席の費、動もすれば萬錢に至り、猶ほ儉率を恨む」とある。

拔劍四顧心茫然。

劍を抜いて四顧すれば心茫然。

欲渡黃河水塞川。

黃河を渡らむと欲すれば、水、川を塞ぎ。

將登太行雪滿山。

將に太行に登らむとすれば、雪山に滿つ。

閑來垂釣碧溪上。

閑來釣を垂る、碧溪の上。

忽復乘舟夢日邊。

忽ち復た舟に乗じて日邊を夢む。

行路難。行路難。

行路難、行路難。

多歧路。今安在。

歧路多し、今安くにか在る。

長風破浪會有時。

長風浪を破る、會ず時あり。

直挂雲帆濟滄海。

直に雲帆を掛けて滄海を濟らむ。

る。しかし、必ずしも之に拘泥するに及ばぬ。三 停杯。鮑照の詩に對案不能食、拔劍擊柱長嘆息とあつて、その意略は同じである。四 筯。筯に同じ。五 太行。山名。六 日邊。遠方の義、又天子の御側といふ意味に用ひる。七 多歧路。列子に「楊子の鄰人、羊を亡び、すでに其黨を率ゐ、又楊子の豎を請うて之を追ふ。楊子曰く、一羊を亡ぶに、何ぞ追ふものか。鄰人曰く、岐路多し」とある。八 長風破浪。宋書に「宗慤少時、叔父炳、その志を問ふ。慤曰く、願はくは、長風に乗じて、萬里の浪を破らむ」とある。

【題義】

晉書の山松傳に「舊歌に行路難あり、曲詞頗る疎質。山松、これを好み、乃ち其辭句を文り、其節制を婉にし、毎に酣醉に因つて之を歌ふ、聽くもの流涕せざるなし」とある。次に此題で最も有名なのは、宋の鮑照の作で、七言が數首連續して居る。要するに、行路難は、世路の艱難及び離別傷

悲の意を言ひ、多くは、第一首の破題に君不見の三字を置いてあるが、必ずしも株守するには及ばないで、李白の此作が現にさうである。

【詩意】金樽には、美酒萬斛を貯へ、玉盤に盛りし珍らしい佳肴は、萬錢を値し、人間の豪富、正に此に極まつて居ると思ふ位、宜しく歡娛して今夕を永くすべき筈である。しかし、人間の世は、如何に豪奢を盡しても、意の如くならぬことは、どうにも仕方がないので、清酒珍羞に對するも、杯を停め、箸を投じて、食ふ氣にも成らず、はては、癩癩を起し、劍を抜いて四顧しつつ、心茫然として居る。さて何が意の如くならぬかといへば、黄河を渡らむとすれば、生憎、氷の爲に塞がれて、渡ることが出来ず、太行に登らむとすれば、雪が山に満ちて、到底行かれないといふやうなことである。そこで、世の中の事を打捨てて、かの太公望が渭水の上に於てした様に、碧溪に釣を垂れて、心のどかにして居やうとするが、その間の夢には、往往舟に乗じて、日邊に行くこともあつて、つまり、浮世の事は斷念した積りでも、夢寐の間、なほ君側を離れない。さて愈よ日邊に行かうとすれば、まことに行路難で、おまけに、分れ路がいくらもあつて、容易に行かれるものではない。結局、雲帆を掛け、滄海を濟り、そして、長風に乗じて萬里の浪を破らねばならぬので、いづれ、機會も有らうから、これを待つて、是非とも、君側に參りたいと思つて居る。

大道如青天。

大道は青天の如く。

我獨不得出。

我獨り出づるを得ず。

羞逐長安社中兒。

逐ふを羞づ、長安社中の兒。

赤雞白狗賭梨栗。

赤雞白狗、梨栗を賭す。

彈劍作歌奏苦聲。

劍を彈じ、歌を作つて、苦聲を奏す。

曳裾王門不稱情。

裾を王門に曳いて、情に稱はず。

淮陰市井笑韓信。

淮陰の市井、韓信を笑ひ。

漢朝公卿忌賈生。

漢朝の公卿、賈生を忌む。

君不見昔時燕家

君見ずや、昔時、燕家郭隗を重んじ。

重郭隗。

擁篲折節無嫌猜。

篲を擁し、節を折つて、嫌猜なし。

劇辛樂毅感恩分。

劇辛樂毅、恩分に感じ。

【字解】【一】社中兒 左傳の註に「二十五家は社」とある。【二】赤

雞白狗 雞を鬪はし、狗を走らして

戲となし、梨栗を賭して相争ふこと。

【三】彈劍 馮驩の故事、史記に「馮驩、孟嘗君の客を好むを聞き、扇を

蹶んで之を見る。孟嘗君、傳舎に置

くこと十日。孟嘗君、傳舎の長に問

うて曰く、客、何の爲すところか。

答へて曰く、馮先生、甚だ貧、なほ一

劍あるのみ、又劍を賣り。その劍を

彈じて歌つて曰く、長鋏歸來乎食無

魚と。孟嘗君、これを幸舎に遷す。

食に魚あり。五日にして又傳舎の長

に問ふ。答へて曰く、客、復た劍を彈

じて歌つて曰く、長鋏歸來乎出無與

と。孟嘗君これを代舎に遷す。出入、

輿車に乗す。五日にして、孟嘗君復

た傳舎の長に問ふ。答へて曰く、先

輸肝剖膽效英才。肝を輸し、膽を剖いて、英才を效す。

昭王白骨縈蔓草。昭王の白骨は、蔓草に縈はれ。

誰人更掃黃金臺。誰人か更に掃はむ黃金臺。

行路難。歸去來。行路難、歸り去らむ來。

「韓信は、淮陰屠中の少年、信を侮るものあり、曰く、若、長大、好んで刀劍を帶ぶと雖も、中情怯なるのみ、と。これを衆辱して曰く、信、能く死せば我を刺せ。死する能はずんば、我が胯下より出でよ、と。ここに于て、信、これを熟視し、俯して胯下より出でて蒲伏す。一市の人、皆信を笑ひ、以て怯となす」とある。【六】漢朝公卿忌賈生。史記に「天子議して以爲へらく、賈生、公卿の位に任へたりと。絳灌・東陽侯・馮敬の屬、盡く之を害ありとし、乃ち賈生を短して曰く、洛陽の人、年少初學、専ら權を擅し、諸事を紛亂せむと欲す、と。ここに於て、天子、後、亦た之を疏んじて其議を用ひず」とある。【七】燕家重郭隗。前に見ゆ。【八】擁篲。史記に「鄒衍、燕に如く、燕の昭王、篲を擁して先驅す」とある。篲は箒。【九】白骨縈蔓草。江淹の恨賦に蔓草縈骨とある。【一〇】黃金臺。前に見ゆ。

【詩意】長安の大道は、縱横に通じ、出入自在、どこへでも行かれさうであるが、我、ひとり此中に寓居し、平生落魄を嘆じつつ、しかも、其外に脱出することが出来ず、たとへば、青天が此世界を覆うて、いかにするも、ここから抜け出して、身を宇宙の表に置くことが出来ぬと同じである。かくて、自分は、いつまでも長安の中に居るのであるが、市中に羣れる游侠少年の眞似をして、赤雞を闘はし、

白狗を走らし、梨や栗を賭けて、遊び戯れ、うかうかと日を送ることを愧ぢるので、わが志は、はるかに遠大なのである。かくて、いつまでも、輾轉不遇であるから、古しへの馮驩の如く、劍を彈じ、歌を作り、苦しい聲を出して之を唱へて居る。もし自分の本来の性格を曲げて、上手に立ち廻れば、長い裾を王門に曳いて、得意に振舞ふことも出来るのであるが、さういふことは、どうも、我が情に稱はず、どうしても、成し得ない。才もあるも、時に遇はざれば、遂に用ゐられざるのみか、世俗の者から馬鹿にされたり、邪魔物として扱はれたりする。むかし、韓信は、淮陰の市中に於て、屠中の少年に辱められ、賈誼は、王佐の略を懐きながら、絳灌輩に忌まれたので、まことに、嘆はしいことである。おもへば、燕の昭王は、怨を齊に報いむとし、先づ郭隗を延いて之を禮し、鄒衍などいふ諸侯の客の來たときには、塵埃をして長者に及ばしめざる爲め、箒を手にして却行し、節を折つて、十分に敬意を盡し、心に少しも嫌疑の念なく、眞に賢を好むの誠意を致した。そこで、劇辛樂毅の輩は、その恩分に感じ、肝膽を輸し、必ず之に報いむが爲に、その才能の限りを盡し、遂に齊を破つて、先王の恥を雪ぐことが出来た。昭王の如き絶代の賢主が居て呉れば、自分も、決して、不遇を嘆くに及ばないのであるが、昭王去つてより、すでに一千年、その白骨は、蔓草に絡まれ、易水の上に建て居た當日の黃金臺は、斷礎煙に没し、人の其跡を弔うて之を掃ふものさへ無い位であるから、今さら仕方がない。行路の難きこと、此の如く、君臣の遇合は、到底むづかしいとすれば、いつまで

生、かつて劍を彈じて歌つて曰く、長劍歸來乎無以爲家、と。孟嘗君悦ばす」とある。【四】曳裾王門。史記鄒陽の書に「固陋の心を飾れば、何王の門か長裾を曳くべからざらむ」とある。【五】淮陰市井笑韓信。史記

も、長安に居たところで、何にもならないから、かの陶潛に倣ひ、歸去來を唱へて、しばらく、郷里に歸臥する外はない。

有耳莫洗潁川水。耳あるも、洗ふ莫れ潁川の水。

有口莫食首陽蕨。口あるも、食ふ莫れ首陽の蕨。

含光混世貴無名。光を含み、世に混じて、名なきを貴ぶ。

何用孤高比雲月。何ぞ用ゐむ、孤高、雲月に比するを。

吾觀自古賢達人。吾、古しへより賢達の人を觀るに。

功成不退皆殞身。功成つて退かざれば、皆身を殞す。

子胥既棄吳江上。子胥は、既に棄てらる、吳江の上。

屈原終投湘水濱。屈原は、終に投ず、湘水の濱。

陸機雄才豈自保。陸機の雄才、豈に自ら保せむや。

【字解】潁川水 高士傳に「許由、中岳に耕す、潁水の陽、箕山の下。

堯、召して九州の長となす。由、これを聞くを欲せず、耳を潁水の濱に洗ふ」とある。

【二】首陽蕨 史記に「武王、すでに殷の亂を平らげ、天下、周を宗とす。而して、伯夷叔齊、これを恥ぢ、義として、周の粟を食はず、首陽山に隱れ、薇を采つて之を食ふ」とある。

【三】子胥既 吳越春秋に「吳王、子胥の怨恨を聞くや、乃ち人をして屬鏤の劍を賜はしむ。子胥、劍に伏して

死す。吳王、子胥の尸を取り、盛るに鴟夷の皮を以てし、これを江中に投ず。子胥、因つて、流に隨つて波を揚げ、潮に依つて來往し、蕩激岸を崩す」とある。

李斯稅駕苦不早。李斯の稅駕、早からざるに苦む。

華亭鶴唳詎可聞。華亭の鶴唳、詎ぞ聞くべけむや。

上蔡蒼鷹何足道。上蔡の蒼鷹、何ぞ道ふに足らむ。

君不見吳中張翰。君見ずや、吳中の張翰、達生と稱す。

稱達生。

秋風忽憶江東行。秋風忽ち憶ふ、江東の行。

且樂生前一杯酒。且つ樂む、生前一杯の酒。

何須身後千載名。何ぞ須めむ、身後千載の名。

河に遊び、精靈時に湘浦に降るとある。【五】陸機雄才豈自保 晉書に「成都王穎、兵を起して長沙王乂を討ち、陸機に後將軍河北大都督を假し、北中郎將王粹、冠軍牽秀等、諸軍二十餘萬人を督して、鹿苑に戰ふ。機の軍、大に敗る。宦人孟玖、機を穎に譖して、その異志あるを言ふ。穎怒り、秀をして、密に機を収めしむ。機、戎服を解き、白帟を着け、秀と相見て神色自若、すでにして嘆じて曰く、華亭の鶴唳、豈に復た聞くべけむやと。遂に害に軍中に遇ふ」とある。世説註に八王故事を引いて「華亭は、吳の由拳縣郊外の墅なり、清泉茂林あり。吳平らぐの後、陸機兄弟、ともに此に遊ぶこと十餘年」とある。【六】李斯稅駕苦不早 史記に「李斯、丞相となり、長子由、三川の守となり、諸男、皆秦の公主を尙し、女は悉く秦の諸公子に嫁す。李由、咸陽に告歸するや、李斯、酒を家に置き、百官長、皆前んで壽を爲す、門庭車騎、千を以て數ふ。李斯、喟然として嘆じて曰く、吾、これを荀卿に聞く、曰く、

物は太だ盛なるを禁すと。夫れ斯は乃ち上蔡の布衣、閭巷の黔首、上、その驚下を知らず、遂に擲んで此に至る。當今、人臣の位、臣の上に居るものなし、富貴極まれりといふべし。物極まれば衰ふ、吾未だ税駕するところを知らざるなり」とある。税駕は、駕を解く、即ち休息、又止泊の義。太平御覽に史記を引いて「李斯、刑に臨み、黄犬を牽き、蒼鷹を臂にし、上蔡東門を出てむと思へども得べからず」とある。今の史記には、蒼鷹の事は見えぬが、李白が鷹ば此を用ひたのは、別に本づくところがあるのであらう。

【七】 賦 鶴鳴。 【八】 張翰 晋書に「張翰、字は季鷹、吳郡吳人なり、清才あり、善く文を屬す、しかも縦任拘はらず。齊王問、辟して大司馬東曹掾となす。問、時に權を執る。翰、秋風の起るに因つて、乃ち吳中の菰菜羹鱸魚の膾を思つて曰く、人生、適志を得るを貴ぶ、何ぞ能く羈官數千里、以て名爵を要せむや」と。遂に駕を命じて歸る。俄にして、問敗る。人皆これを機を見るといふ。翰、心に任かせて自適し、當世に求めず。或は之に謂つて曰く、卿は乃ちたとひ一時に適すべきも、ひとり身後の名を爲さざるかと。答へて曰く、我をして身後の名あらしむるも、即時一杯の酒に如かずと。時人その曠達を貴ぶ」とある。

【詩意】 才あるも、すでに用ひられず、行路の難きこと、上に述べたやうなものとすれば、超然高踏、ひとりで澄まし込んで居れば、それで善いやうなもの、考へて見ると、決して、さうしたものではない。されば、耳あるも、許由に倣うて、潁川の水に洗ふことなく、口あるも、夷齊を學んで、首陽の蕨などは食はぬが宜しい。要は、老莊達生の旨を守つて、光を包んで、ことさらに世俗に混じ、無名を貴しとなし、特に孤高を衒うて雲間の月に比するやうなことは爲すに及ばない。その然る所以は他なし、試に古來賢達の人を見ると、功成つて身退かざるものは、末路皆慘禍に遭ふを常として居る。伍子胥は、屬鏤の劍を賜はつて、自殺せし後、その屍を吳江の上に棄てられた。屈原は、あくまで君國に忠なるに拘はらず、自ら湘水に投じて死んで仕舞つた。それから、陸機は、天晴なる文武の雄

才ありしにも拘はらず、自ら其身を保つ能はず、一敗の後、讒言に遭つて、軍中に刑せられた。李斯は、富貴の極、自ら後來の吉凶を知らずといつたが、惜いかな、早く官を罷めて休息しなかつたから、終に斬罪に處せられた。この時に方りて、陸機は、故郷なる華亭の鶴の聲も再び聞くことが出来ぬといひ、李斯は、子息等と共に、鷹を臂にし、故國なる上蔡の城門を出でて遊獵をしたいが、それも出来ぬといつて嘆息したが、何の益にも立たない。これ等の人人は、いづれも、一時顯榮の位地に上つたのであるが、光を包み、名なきを貴ぶといふ退隱の安全なるに想ひ至らず、いつまでも、富貴に戀戀として居たから、行路難の此世に於て、遂に身命を亡ぶやうに成つたのである。これに比較すると、吳中の張翰の如きは、眞に達者と稱すべく、秋風の吹くにつけて、一たび江東の蓴鱸を思ふや、早速、官を罷めて故郷へ歸つて仕舞つた。吾も亦た、この張翰と同じく、生前一杯の酒を樂めば、それで十分なので、身後千歳の名などは、何の必要もない。これが即ち、行路難の此世に處する第一の要諦である。

【餘論】 李白の行路難は、かくの如く、三首連屬して居るが、詩としては、第一首が一番面白いから、唐宋詩醇は特に之を選録したのである。その第一首は、黄河の水、太行の雪などいつて、成程、行路難の趣が述べてはあるが、そんな事は少しも介意せぬやうな意味合で、直挂雲帆一濟滄海といふやうな非常に快活な事を言つて居るから、行路難よりも、むしろ行路易といひたい位。しかし、第二首になると、才あるも明主に遇はず、昭王の如き人君は、その後、なかなか出て來ぬから仕方がない

といふので、そろそろ行路難に道及し、第三首に於ては、古來賢達の人、身退かざるに因つて、末路の慘禍を免れざりしことを述べ、愈よ行路難の極に達し、張翰の江東行を以て、理想的行動として居る。乾隆御批に「氷塞ぎ、雪満つ、道路の難きこと甚し。しかも、日邊夢あり、浪を破り、海を濟る、なほ未だ去ることに決志せざるなり。後に二篇あり、すなはち其難を畏れて去るに決す、これ蓋し放たるの初、述懐かくの如し、眞に難の字の意を寫し得て出す」といつて居る。行路難は、後人が最も多く擬作した樂府題で、歴世その詩に乏しからず、吳梅村の如きは、連作十七首の多きに及び、人間に於ける炎涼の情態を種種の方面から寫し出して居る。李白の此作などは、わづかに三首で、その言ふところも、至つて、あつさりして居るが、しかも能く人を動かすのは、全く閱歷中から得來り、すべて、精當切實で、移易すべからざるものがあるからである。

長相思

長相思

長相思。在長安。

長相思、長安に在り。

絡緯秋啼金井闌。

絡緯秋啼く、金井闌。

微霜淒淒簾色寒。

微霜淒淒、簾色寒し。

【字解】〔一〕絡緯、蟋蟀、即ちきりぎりす。古今註に「莎雞、一名は促織、一名は絡緯、一名は蟋蟀。促織は、その鳴聲、急織の如きといひ、絡緯は、その鳴聲、紡績の如きといふ」とある。〔二〕金井闌

孤燈不明思欲絶。

孤燈明かならず、思、絶えむと欲す。

卷帷望月空長歎。

帷を卷き、月を望んで、空しく長歎。

美人如花隔雲端。

美人、花の如く、雲端を隔つ。

上有青冥之長天。

上には青冥の長天あり。

下有淒水之波瀾。

下には淒水の波瀾あり。

天長路遠魂飛苦。

天長く、路遠くして、魂飛ぶこと苦なり。

夢魂不到關山難。

夢魂到らず、關山難し。

長相思摧心肝。

長相思、心肝を摧く。

【題義】長相思は、元と漢人詩中の語で、古詩に客從遠方來、遺我一札書、上言長相思、下言久離別とあつて、長は久遠の辭、行人久戍、書を寄せて思ふところに遺るといふ意である。なほ外に、客從遠方來、遺我一端綺、文綵雙鴛鴦、裁爲合歡被、著以長相思、緣以結不解とあつて、被中に綿を入れ、相思綿綿の意を致し、これを長相思といつたのである。次に、蘇李贈答の作と稱するものの中に、蘇武は、生當復來歸、死當長相思といひ、李陵は、行人難久留、各言長相思とある。その長相

井上の闌干、古樂府に多く玉牀金井等の字が用ゐてあるが、その木石美麗にして、價值金玉なるをいふ。〔三〕美人如花、宋玉の神女賦に煒乎如花、溫乎如玉とある。〔四〕雲端、枚乘の詩に美人在雲端、天路隔無期とある。〔五〕青冥、楚辭に據青冥而撫虹兮とある。〔六〕淒水、淒は水の清きをいふ。〔七〕天長路遠、陳の後主の孫瑒銘に天長路遠、地久雲多とある。〔八〕摧心肝、歐陽建の詩に痛哭摧心肝とある。

思といふ三字が、まことに面白いから、遂に之を取り離して、題としたので、陳の後主は、長相思、久相憶といひ、徐陵は、長相思、望歸難といひ、江總は長相思、久別離といひ、いづれも、一篇の起首に長相思の字を用ゐて作つたのである。李白も、その體に倣つて、この篇を作つたので、その意は、専ら男女の離別に關して居る處から、離騷が香草美人に託したと同じ様に、君を懷ふの意を寓したものだといふのが、通説に成つて居る。

【詩意】長く相思ふところは、都の方に在る。自分は、長しへに、輦轂の下たる都を忘れない。頃しも、秋深く、金を鑲めた井戸側の邊では、蟋蟀が頻りに聲を立てて啼いて居るし、微霜がひやひやして、今まで敷いて居た簾の色さへ、寒く成つたやうである。この時に當り、半ば明かにして未だ滅せざる孤燈を挑げ、堪へぬ愁を懷きつつ、帷を卷き上げて、月を望み、覺えず長歎の聲を發した。そは何故かといふと、我が思ふところの花の如き美人は、遠く雲端を隔てて、天涯に居るからである。されば、美人の居る處へ行きさへすれば善いのであるが、それが容易な事ではなく、上には、蒼蒼として限りも知られざる長天があり、下には、澄める水の上に波瀾を生じて、とても行くことが出来ない。かくの如く天は長く路遠きが故に、夢中の魂すら行くことは六つかしい。そこで、徒に長く相思うて、心肝を摧くのである。

【餘論】李白は、一時、玄宗に侍して、大に優遇されて居たが、高力士や、楊貴妃などの讒に遭つて、

君側を遠ざけられ、都を出て、放浪することに成つたので、この詩は、男女の離別に託して、君側を遠ざかる心を寫したものだ、かういふ説もあつて、一應は尤もである。元來、美人に寄託して、人君もしくは賢者を指すことは、極めて古いので、詩の衛風だの、離騷だのに、いくらも見えて居る。そこで、沈徳潜は、この詩中の美人の字に附註して、大君を指すといひ、乾隆御批には「絡緯秋啼き、時、將に晚れむとす。曹植は云ふ、盛年處房室、中夜起長嘆と。その寓興は、同じく然り。植の意は、禮義を以て自ら守るも、これは、淪落の感に勝へず。衛風に云ふ、云誰之思、西方美人、楚辭に曰く、恐美人之遲暮と、賢者不遇に窮するも、敢て君を忘れず、これ忠厚の旨なり。辭は清く、意は婉、情を言ふに妙」といつて居る。しかし、支那の説詩家は、溫柔敦厚を以て本旨となし、少しく、情事に涉ると、すべて諷興に出でたりといふのが、その癖である。予は、李白の樂府が、多く時事と聯關し、身世の浮沈と相渉ること極めて深きを知るが故に、この篇も、亦たさうでは無いと斷言はせぬが、公平に謂へば、これを寄託ありとするも可、無しとするも亦た可、畢竟、諷諭の有無は、この詩の眞價値に對して、何等の關係はない。されば、梅鼎祚が「景を綴ること幽絶、泣くが如く、訴ふるが如く、怨んで誹せず」といつたのは、あつさりし過ぎて居るが、頗る穩當の見を推すべきものである。

上留田行

行至上留田。孤墳何崢嶸。
 積此萬古恨。春草不復生。
 悲風四邊來。腸斷白楊聲。
 借問誰家地。埋沒蒿里塋。
 古老向予言。言是上留田。
 蓬科馬鬣今已平。
 昔之弟死兄不葬。
 他人於此舉銘旌。
 一鳥死。百鳥鳴。
 一獸走。百獸驚。
 桓山之禽別離苦。
 欲去回翔不能征。

上留田行

行いて至る上留田、孤墳何ぞ崢嶸たる。
 この萬古の恨を積んで、春草復た生せず。
 悲風、四邊より來り、腸は斷つ白楊の聲。
 借問す、誰が家の地、埋没す蒿里の塋。
 古老、予に向つて言ふ、これは是れ上留田。
 蓬科馬鬣、今すでに平かなり。
 昔の弟死して、兄葬らず。
 他人、ここに於て、銘旌を擧ぐ。
 一鳥死して、百鳥鳴き。
 一獸走つて、百獸驚く。
 桓山の禽、別離苦なり。
 去らむと欲して、回翔、征く能はず。

田氏倉卒骨肉分。
 青天白日摧紫荆。
 交柯之木本同形。
 東枝顛頽西枝榮。
 無心之物尙如此。
 參商胡乃尋天兵。
 孤竹延陵讓國揚名。
 高風緬邈頽波激清。
 尺布之謠塞耳不能聽。

田氏倉卒、骨肉分れ。
 青天白日、紫荆を摧く。
 交柯の木は、本と同形。
 東枝は顛頽して、西枝は榮ゆ。
 無心の物、尙ほ此の如し。
 參商、胡を乃ち天兵を尋ぬる。
 孤竹延陵、國を讓つて名を揚ぐ。
 高風緬邈、頽波激清。
 尺布の謠、耳を塞いで、聽くこと能はず。

【字解】 崢嶸 高く聳ゆる貌。 白楊 本草拾遺に「白楊は北土極めて多し、人多く墟墓の間に種う、樹大に皮白し」とあるし、古詩十九首に出「郭門直視、但見丘與墳、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人」とある。 蒿里 漢書の註に「死人の里」とある、即ち墓地。 塋 墓に同じ。 蓬科 漢書に蓬顆を註して「顆は土塊をいふ、蓬顆とは、塊上に蓬を生ぜしを言ふのみ」蓬科は、蓬顆に同じで、即ち土饅頭に草が生えたといふこと。 馬鬣 禮記に「むかし、夫子、これを言ふ。曰く、吾、封の堂の若きものを見たり、防の若きものを見たり、夏屋を覆ふ若きものを見たり、斧の若きものを見たり。從、斧の若きもの、馬鬣封の謂なり」とある。つまり、土饅頭の上の方が、薄く、下の方が厚く、一寸見ると斧の刃を倒にしたやうな形で、又馬の鬣の處に似て

居るから、名づけたので、蓬科馬鬣、ともに土饅頭。【七】銘旌 棺の前に立てる旗、今日でも銘旌といつて居る。銘旌を擧ぐといへば、葬式を擧行したといふこと。【八】桓山之禽 劉向説苑に「孔子、晨に堂上に立ち、哭するものを聞く、聲音甚だ悲し。孔子、琴を援つて之を鼓す、その音同じきなり。孔子出でて、弟子吒するものあり。誰ぞやと問ふ。曰く、同なり。孔子曰く、同、何すれぞして吒する。曰く、今哭するものあり、その音、甚だ悲む、獨り死を哭するのみに非ず、又生離を哭するなり。孔子曰く、何を以てか之を知る。曰く、完山の鳥に似たり。孔子曰く、何如。曰く、完山の鳥、四子を生む、羽翼すでに成り、乃ち四海に離る。哀鳴、之を送る、これ往いて返らざるが爲めなり」と。孔子、人をして、哭するものを問はしむ。哭するもの曰く、父死し、家貧し、子を賣り、以て之を葬る、將にそれと別れむとするなり」と。孔子曰く、善いかな、聖人なり」とある。桓山は、完山に同じ。【九】征 行くに同じ。【一〇】田氏倉卒骨肉分 續齊諧記に「京兆の田眞、兄弟三人、共に議して財を分ち、生貨皆平均にす。唯だ堂前一株の紫荆樹のみ、ともに議して、三片に破らむと欲す。明日就いて之を截らむとすれば、その樹、即ち枯死し、火の然せしが如し。眞往いて之を見、大に驚き、諸弟に謂つて曰く、樹、本と同株、將に分析せむとするを聞いて、憔悴する所以、これ人木に如かざるなり」と。因つて、悲、自ら勝へず、復た樹を解かず。樹、聲に應じて榮茂、兄弟相感じ、更に財寶を合し、遂に孝門となる」とある。

【二】交柯之木 王琦本には交讓に作る。述異記に「黄金山に楠樹あり、一年は東邊榮えて西邊枯れ、後年は西邊榮えて東邊枯れ、年々かくの如し」とある。【三】參商 左傳に「むかし、高辛氏に二子あり、伯を閏伯といひ、季を實沈といひ、曠林に居る、相能からざるなり。日に干戈を尋ぬ、以て相征討す。后帝、賊しとせず、閏伯を商邱に遷して、辰を主らしめ、商人これに因る、故に辰を商星となす。實沈を大夏に遷して、參を主らしめ、唐人、これに因り、以て夏商に服事す」とある。參商の二星は、分野が遠く相隔つて居る。【三】孤竹 史記に「伯夷叔齊は、孤竹君の二子なり。父、叔齊を立てむと欲す。父、卒するに及び、叔齊、伯夷に讓る。伯夷曰く、父の命なり」と。遂に逃れ去る。叔齊、亦た立つを肯んぜずして之を逃る」とある。【四】延陵 史記に「吳王壽夢に子四人あり、長を諸樊といひ、次を餘祭といひ、次を餘昧といひ、次を季札といふ。季札賢にして、壽夢、これを立てむと欲す。季札、讓つて可かず。ここに于て、乃ち長子諸樊を立てて、事を攝行して、國に當らしむ。諸樊、すでに喪を除き、位を季札に讓る。季札、これを謝す。

吳人、固く季札を立てむとす。季札、その室を棄てて耕す、乃ち之を舍く。季札、延陵に封ぜらる、故に號して延陵の季子といふ」とある。【五】頽邈 長遠の貌。【六】激清 類波を激して、再び元の如く清ましむること。【七】尺布之謠 史記に「孝文の時、淮南の厲王長、不軌を犯して、蜀に徙され、食はずして輜中に死す。民、歌を作り、淮南厲王を歌つて曰く、一尺布、尙可縫、一斗粟、尙可舂、兄弟二人不相容」と。上、これを聞いて、乃ち嘆じて曰く、堯舜は骨肉を放逐し、周公は管蔡を殺すも、天下聖と稱す、何となれば、私を以て公を害せざればなり。天下豈に我を以て淮南王の地を食るとするか、と。乃ち城陽王を徙して、淮南の故城に王とし、而して、追尊し、淮南王長に諡して厲王となす」とある。

【題義】王琦の解に「按ずるに、樂府詩集に王僧虔の技録、相和歌瑟調三十八曲に上留田行あり。古今註に「上留田は地名なり、その地の人、父母死して、兄、その孤弟を字はざるものあり、鄰人、その弟の爲に悲歌を作り、以て其兄を風す、故に上留田といふ」とあり、太白の謂はゆる弟死するも葬らず、他人銘旌を擧ぐるの事は、古今註に説くところと同じからず、豈に別に異事の傳聞あるか。抑も、時に于て、實に斯事あり、古題を借り、以て新聞を詠するか」とある。然るに、蕭士贇は、肅宗が臣下に命じて、その弟たる永王璘を殺さしめた、その事實を李白が目撃したから、この詩を作つたのであらうかといつて居る。なほ、詳細は、餘論に於て述べることにする。

【詩意】上留田といふ處へ往つて見ると、一つの墓があつて、崢嶸として高く聳えて居る。おもふに、この中に葬られた人は、萬古の恨を積んで、その爲に、墓までが、かくの如く高く険しいのであらうし、又あまりに高く険しいから、春草さへも、ここには生えない。四邊には、悲風颯颯として常に斷え

ず、墓畔に植ゑた白楊の樹までが、さわさわと騒ぐので、これを聞くものをして、斷腸せしめる。元來、この墓は、誰が家の地で、何人が此墓中に埋没して居るのであるか。すると、古老が予に向つて云ふには、これは、音に聞こえた上留田といふ處で、むかしは、十分堅固に土饅頭が築いて、蓬の草も生え、馬鬣の形もはつきりして居たのであるが、歲月を経るに従つて、いつしか削り去られ、あたりの土も皆無くなつて、今見る如き有様となつた。ここに葬られた人は、まことに氣の毒なもので、その死せしとき、兄が有つたが、餘程仲が悪かつたと見えて、葬つて遣らない。そこで、他人が寄り集つて、はじめて葬式を擧げ、ここに墓が出来たのであると、かういふ話である。抑も、生きとし生けるものは、すべて其類を悲むのが常であつて、一羽の鳥が死ぬれば、百鳥が悲しき聲を揚げて鳴き、一頭の獸が走れば、百獸が驚いて驅け出すといふやうな譯である。それから、桓山の鳥は、その育てた雛鳥が四方に飛び立つ時に當り、悲しい聲を出して鳴くので、雛鳥も將に去らむとして、尙ほ且つ頻りに飛び廻り、戀戀として立ち兼ねて居るといふことで、鳥ですら、かくの如くであるのに、人として、骨肉の親あるにも拘はらず、弟が死んでも兄が之を葬らぬといふのは、まことに無法極まる事である。むかし、京兆の田氏は、兄弟三人、新に別居せむとするに際し、有り丈の財産を山分けにするといふので、一本の紫荆の木の残つて居るのを三つに切つて分けやうとした。すると、其日の中に、紫荆が枯れて仕舞つた故に、兄弟は、別居することの非を悟り、再び元の如く一つ家に住んで居たと

いふ話がある。又交柯の木といふものがあつて、その根幹は、一本の同形の木であつて、今年東の枝が憔悴すれば、西の枝が榮え、來年西の枝が憔悴すれば、東の枝が榮え、といふ様に、互に譲り合つて、一本の木として成育して居るので、無心の物でさへも、すべて此通りである。まして、人として、骨肉の間柄でありながら、參商二星の如く、丸で懸け離れて居て、互に反目し、動もすれば兵を動かして、干戈を以て相見えるといふに至りては、まことに、その意を得ぬ次第である。かの伯夷叔齊は、父の孤竹君の卒後、互に國を譲り合つて、二人とも遂に逃れ去つたといふし、延陵の季子は、父の壽夢が位を傳へやうとしたが、兄どもに跡を嗣がせて、自分は、どうしても受けなかつた。これ等は、國を譲つたことに因つて、美名を千古に残して居るので、その高風は、緬邈として、遙に歲月を隔てて居るが、今日、その風を聞かば、世の頹波を激して元に歸し、即ち末俗の風俗を矯正して、再び淳古に復することが出来る。これに反して、今日では、兄弟二人相容れずといつた尺布の謠のやうな事が、現實に流行して居るので、この歌の如きは、實に耳を塞いで、聞くに堪へない。これに就けても、古しへの賢者の跡に鑒み、世の弊風を一新したいものである。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇の主意は、全く孤竹延陵、讓國揚名、尺布之謠、塞耳不能聽の數句に在り、泛然の作に非ず。蓋し當時風刺するところあり、唐史至徳間の事を以て之を考ふるに、その啖廷瑤、李成式、皇甫銑の輩、肅宗の風旨を受け、謀を以て、永王璘の反を激するが爲にして、執

へて之を殺す、太白その時の事を目撃す、故に是詩を作るか」とある。現に、李白は、永王璘に招かれて、その幕中に參與した爲に、後には、罪を得て、夜郎に徙された位で、永王璘とは、淺からぬ關係があつたから、事實の真相を善く知つて居たに相違ない。永王璘とても、はじめから謀叛心があつた譯ではなく、在朝の小人どもは、水をさして、肅宗との間を不和にし、その爲に兵を起したといふやうなものであつたらうと思はれる。又もし初めから謀叛を企てる積りであつたならば、李白ともあらうものが、その幕下に參加したり、永王東巡歌などを作つて、その功德を頌する筈がないので、この詩を以て、肅宗と永王との間柄を諷したものとすのも、至極面白い。乾隆御批の如きも、この説に左袒し「蕭士贇の説、これを得たり。白の璘に従ふ、迫脅といふと雖も、亦たその個儻自負、藉つて以て功名を就さむと欲するが故なり。詞氣激切、不平の感あるが若く、謝靈運の云ふところ、道消えて憤懣を結ぶものの如し。桓山の禽は、蓋し白自ら比するなり。胡應麟の詩數、その公無渡河に、波滔天、堯咨嗟、大禹湮百川、兒啼不窺家、其害乃去、茫然風沙等の語を稱して、極力漢を慕すとなす、これに似たるの情質詞古、何ぞ遽に漢に如かざらむや」といつて居る。しかし、王琦が、これに雷同せず、未了の疑案を遺して居るのは、李白の作が每首時事を諷諭して、史實に關係があると云ふ衆俗の見解が、餘り淺近であるところから、わざと之を避けたのであらう。なほ沈德潛は、措辭の妙を稱し「末の一段、促節繁音、樂章の亂を聞くが如し」といつた。

春日行

春日行

深宮高樓入紫清。
 金作蛟龍盤繡楹。
 佳人當牕弄白日。
 弦將手語彈鳴箏。
 春風吹落君王耳。
 此曲乃是昇天行。
 因出天池泛蓬瀛。
 樓臺蹙沓波浪驚。
 三千雙蛾獻歌笑。
 攄鐘考鼓宮殿傾。
 萬姓聚舞歌太平。
 我無爲人自寧。

深宮の高樓、紫清に入る。
 金は蛟龍を作りて、繡楹を盤る。
 佳人牕に當つて、白日を弄し、
 弦は手と語つて、鳴箏を彈す。
 春風吹き落つ君王の耳。
 この曲、乃ち是れ昇天行。
 因つて天池を出でて蓬瀛に泛び、
 樓臺蹙沓、波浪驚く。
 三千の雙蛾、歌笑を獻じ、
 鐘を攄ち、鼓を考いて、宮殿傾く。
 萬姓聚舞、太平を歌ふ。
 我無爲にして、人自ら寧し。

【字解】

【一】紫清 大空。
 【二】繡楹 彫飾を刻せるたるき。
 【三】繡楹 彫飾を刻せるたるき。
 【四】弦將手語 弦と手と相受して聲を爲すこと。
 【五】鳴箏 箏は琴の類。
 【六】昇天行 古樂府の題名、樂府古題要解に「昇天行は、曹植の日月何肯留、鮑照の家世宅三關輔、皆人世永からず、俗情險艱なるを傷み、當に神仙を求め、六合の外に翱翔すべしといふ。その辭、蓋し楚辭の遠遊篇に出づるなり」とある。
 【七】天池 御苑の池沼。
 【八】蓬瀛 史記に「太液池中に蓬萊方丈瀛洲靈梁あり、海中の神山、鰓魚の屬に象る」とある。
 【九】樓臺 舟の上の樓で、西京雜記に「昆明池中、樓船數百艘あり、上に樓檣を建つ」とある、又一本には樓船に作つてある。
 【一〇】雙蛾 蛾眉の

三十六帝欲相迎。三十六帝、相迎へむと欲す。

仙人飄飄下雲輶。仙人飄飄、雲輶を下る。

帝不去留鎬京。帝、去らず、鎬京に留まる。

安能爲軒轅。安んぞ能く軒轅となり、

獨往入宵冥。獨往、宵冥に入らむ。

小臣拜獻南山壽。小臣拜して獻す、南山の壽、

陛下萬古垂鴻名。陛下、萬古、鴻名を垂れよ。

美人。【一】擗。撃つ。【二】考。敲く。【三】三十六帝。道書の説に、天上に三十六帝があつて、各帝があり、つまり三十六帝あるといつて、一一その名を擧げてあるが、あまり煩はしいから、こゝには略することにす。【四】雲輶。雲を以て車と爲す。【五】鎬京。周の都、武王これを建つ。【六】軒轅。黄帝、莊子に「黄帝、再拜稽首して問うて曰く、敢て問

ふ、身を修むるには、奈何にして以て長久なるべき。廣成子曰く、我、汝の爲に大明の上に遂げて、彼の至陽の原に至り、汝の爲に宵冥の門に入り、彼の至陰の原に至らむ」とある。【七】宵冥。杳冥に同じ。【八】南山壽。詩の大雅に「如南山之壽、不騫不崩」とある。【九】陛下。天子の尊稱、蔡邕獨斷に「天子、必ず近臣あり、兵を執り、陛側に陳し、以て不虞を戒む。これを陛下と謂ふものは、羣臣、天子と言ふに、敢て天子を指斥せず、故に陛下に在るものと呼んで之に告げ、卑に因つて尊に達する意なり。上書、亦た之の如し」とある。【一〇】鴻名。大名に同じ。

【題義】胡震亨の言に「鮑照の春日行は、春遊を詠じ、太白は、すなはち君王遊樂の辭に擬す」とある。但し、無論、春景に係けてある。

【詩意】宮城の奥深く立ち列ぶ高樓は、大空を衝くばかり、黄金で蛟龍を作り、それが楹などを廻つて飾してある。その見事なることは、心も言葉も及ばぬ程である。ここに、佳人は、春の日の静なるに乗じて、窓に倚り、手を以て絃を拂ひつつ、箏を掻き鳴らすと、その聲、春風に送られて、天子の御耳に入つた。その曲は、何かといへば、昇天行であつて、この世は、まことに果敢ないものである。かくて、天子も、その曲意に感じて、やがて、遊豫の心を起され、舟に乗つて、御苑の池から、蓬萊瀛洲に象つた島島の邊まで漕ぎ出すと、遊船の上に聳ゆる樓櫓の影が、水の上に動いて蹙まり、漣波が驚いて起つて居る。この時しも、三千の美人は、天子の御側に居て、歌笑を爲し、それに合せて、鐘を撃ち鼓を鳴らすと、宮殿も動揺して傾かむばかり。今しも、四海廣く、萬民は聚つて舞踏しつつ、太平を謳歌し、天子は、無爲の至徳を以て天下に臨まれるが故に、下民は、自ら安寧である。かくて、天子の徳は、天上にも聞こえ、かの三十六帝は、これを迎へ來らしめむが爲に、使者として、仙人を遣はされ、その仙人は、いとも輕げに雲車から降りて、天帝の敕旨を傳へ、早く天上に參られよといつた處が、天子は、なほ此土を去らず、依然として、都に留まつて居られる。天子の期せらるるところは、古しへの黄帝の如く、あくまで至上の徳を積み、わが身ひとつで、杳冥の中に入り、天我契合の聖境に達せむとするに在るので、今の儘では、未だ以て足れりとせず、勉めて進まうといふ大した意氣込

である。されば、我我小臣どもは、その辱なさに恐れ入り、拜跪して、南山の壽の如く、鶯けず、崩れず、長しへに、この世におはしまし、そして陛下は、萬萬年の末までも大名を垂れ、天晴な聖主となられよと壽ぎ奉る次第である。

【餘論】この詩は、君王の遊樂を述べたのであるが、我無爲、人自寧といひ、安能爲軒轅、獨往入宵冥といひ、暗弱の人君が淫を事とするのとは、全然その趣を異にし、この徳あればこそ、この樂があるといふ一邊に重きを置いたものと見える。

前有樽酒行 二首

前有樽酒行 二首

春風東來忽相過。

春風東より來つて、忽ち相過ぐ。

金樽淥酒生微波。

金樽、淥酒、微波を生ず。

落花紛紛稍覺多。

落花紛紛として、稍や多きを覺ゆ。

美人欲醉朱顏酡。

美人醉はむと欲して、朱顏酡す。

青軒桃李能幾何。

青軒の桃李能く幾何ぞ。

流光欺人忽蹉跎。

流光、人を欺いて、忽ち蹉跎たり。

【字解】一、淥酒、清酒に同じ。

二、酡、韻會に「酡とは、飲んで、赭色面に著るるなり」とある。酔うて顔が赤くなること。

三、青軒、虞炎の詩に青軒明月時とあり、王適の詩に青軒桃李落紛紛、紫庭蘭蕙日氣氳とある。青い色に塗つた軒、青色は上品なる爲めである。

四、流光、日月をいふ。

五、蹉跎、欺人は壓倒の義。

六、蹉跎、欺人は壓倒の義。

君起舞。日西夕。

君、起つて舞へ。日、西に夕なり。

當年意氣不肯平。

當年の意氣、肯て平かならず。

白髮如絲歎何益。

白髮絲の如く、歎するも、何の益かあらむ。

【題義】古樂府の前一樽酒と同じで、傅玄、張正見の諸作は、皆置酒して賓主の長壽を祝するの意を述べてあるが、李白の此作は、稍や之を變じ、時に及んで當に行樂すべしといふことを歌つて居る。

【詩意】春風東より忽ち來り過ぐるや、金樽に湛へたる淥酒に吹き付けたから、自然に微かな波を生じ、その波の上に落ちかかる落花は、紛紛として、次第に多きを加へた。この時にしも、美人は、醉ひかかつて、顔を赤くして居る。青き軒端に咲く桃李の花は、いつまで匂つて居るか、日月は、人を壓倒して、どんどん行き過ぎて仕舞ふ。されば、面白をかしく今日の一日を樂むが善いので、時しも、夕日は、西に斜にして、天も暮れかかつて居る。君よ、いざいざ起つて舞はれよ。君は、昔日の意氣、依然として存し、その爲に、不平斷えず、濫い顔して居るが、やがて白髮絲の如く、老人になつてから、後悔しても仕方がない。

琴奏龍門之綠桐

琴は、龍門の綠桐を奏し、

【字解】一、龍門之綠桐、周

玉壺美酒清若空。玉壺、美酒、清くして、空しきが若し。

催絃拂柱與君飲。絃を催し、柱を拂つて、君と飲む。

看朱成碧顏始紅。朱の碧を成すを看て、顔始めて紅なり。

胡姬貌如花。胡姬、貌、花の如し。

當壚笑春風。壚に當つて、春風に笑ふ。

笑春風舞羅衣。春風に笑ひ、羅衣を舞ふ。

君今不醉將安歸。君今醉はず、將に安くにか歸らむとする。

とある。赤い色が青く見えるといふので、心眼亂るることをいふ。【四】胡姬、胡地の少婢。【五】當壚、壚は漢書顔師古の註に「酒を賣るの處、土を累れて壚となし、以て酒壺を居る、四邊隆起、その一面高く、形、煨壚の如し、故に壚と名づく」とある。つまり酒瓶を置いた處。それを普通に酒の壚とする處といふのは、誤である。

【詩意】龍門山に生えた綠桐を以て造つた琴を用意し、玉壺に盛りし美酒は澄み切つて、さながら空のやうである。やがて、絃を引きしめ、琴柱を拂つて掻き立て、その琴の音を聞きつつ、君とともに酒を飲めば、心眼迷亂、赤いものが青く見え、わが顔も、はじめて赤くなつて、そろそろ醉が廻はつて居た。胡姬、貌、豔にして、花の如く、酒瓶の列ぶ處に坐つて居て、しづかに、春風に對して笑ひ、

はては、羅衣を褰げて、起つて舞はむとして居る。されば、君よ、今醉はねば、どこに往くといふこともないので、ここに來た以上は、十分に酒を遣つて、樂を恣にして貰ひたい。

【餘論】乾隆御批に「即ち白の云ふところ、浮生若夢、爲歡幾何の意、寫來つて、偏へに自ら細致、これ一味豪放ならず、又これ齊梁卑靡の音ならず、故に妙」とある。浮生若夢の二句は、即ち李白の作つた春夜宴桃李園序の中の句である。ここに謂はゆる、時に及んで當に行樂すべしといふやうな意味は、六朝時代の人人も、隨分詩中に述べて居るが、往往故事を用ひたり、文字に拘泥したりして、どうも、格調が低い。李白の此詩の如きは、非常に細微な處があるに拘はらず、俊爽の氣分を以て一貫し、その爲に、句法も、格調も、亦た自然俊爽で、構想は格別新しくないにも拘はらず、人をして、極めて新警なるが如く思はせる。これは、主として、作者の天分に因るので、學んで至り得べきものではない。

夜坐吟

夜坐吟

冬夜夜寒覺夜長。冬夜、夜は寒くして、夜の長きを覺ゆ。

沈吟久坐坐北堂。沈吟久坐、北堂に坐す。

【字解】一、北堂、北だの西だのといふのは、陰僻の處で、これは奥の部屋を指す。二、金缸、缸は燈火、これを燃やす道具が黄金で造つてある。三、從、まか

氷合井泉月入閨。氷は井泉を合し、月は閨に入る。

金釭青凝照悲啼。金釭、青く凝つて、悲啼を照らす。

金釭滅啼轉多。金釭滅し、啼くこと轉た多し。

掩妾淚聽君歌。妾が涙を掩ひ、君が歌を聴く。

歌有聲妾有情。歌には聲あり、妾には情あり。

情聲合兩無違。情聲合して、兩つながら違ふなし。

一語不入意。一語、意に入らざれば、

從君萬曲梁塵飛。君が萬曲、梁塵の飛ぶに従かせむ。

すと訓すべし。一向役に立たぬといふ意。【四】梁塵飛。劉向別錄に「漢興つてより以來、善く雅歌するものは、魯人虞公、聲を發すれば清哀、蓋し梁塵を動かす」とある。

【題義】夜坐吟といふ樂府題は、齊の鮑照が初めて作つたので、その詩は、

冬夜沈沈夜坐吟。含情未發已知心。霜入幕。風度林。朱燈滅。朱顏尋。體君歌。逐君音。不貴聲。貴意深。

といふので、つまり、冬夜人の歌ふを聞いて、その聲よりも意の深きを貴ぶといふ意、いくら歌が上手でも、本當に深い意があつて歌ふのでなければ、聞くに足らないといふのである。李白は、これか

ら變化して作つたので、又聊か新意を出して居る。

【詩意】冬の夜は寒くして、且つ長きを覺える。美人は、今しも、沈吟して、奥の部屋に、じつと坐つて、時の移るをも忘れて居る。もとより、寒さが強いので、井戸の水も、いつしか凍り、月は閨の中に差し込んで来る。その閨の中には、金釭の燈火が青く凝つて、美人の悲啼を照らして居る。その内に、燈火は消えて仕舞つて、眞闇の處に、美人は夜の長きを啣ちつつ、よよとばかりに泣き沈んで居る。ところで、君は今歌を歌はるに因り、妾は涙を掩うて之を聴いて居る。君の歌は、まことに御上手で、結構ではあるが、妾には情といふ哀れなものがある。そこで、君の歌と妾の情とが、すつかりと合つて、兩つながら違ふことが無いやうに有りたい。苟くも、一語でも、妾が意に叶はぬことがあつたならば、如何に君が上手に、多くの曲を歌つて、梁上の塵を飛ばすとも、一向役に立たず、妾は、決して、感動することも無からう。

【餘論】鮑照の原作は、美人の歌に就いて、聲を貴ばず、意の深きを貴ぶといつたのであるが、李白の此作は、美人が他の歌ふを聞くにつけて、情聲合するやうにあつて欲しいといつたので、その意味が一段進んで居る。それから、前段の敘景は、鮑照の原作に類似して居るが、李白は、李白だけの文藻才識があつて、決して、牙後の慧を拾ふものではない。蕭士贇は「前有樽酒行、夜坐吟の三篇は、鮑照の樂府白紵詞の體なり。鮑の詩に云ふ、萬曲不關心、一曲動情多、欲知情厚薄、更聽此聲一過」

といひ、別に又李白が粉本とした鮑照の作もあるのである。譚元春は「鮑參軍の體、聽君歌、逐君音、不貴聲、貴意深に似たり、而して、一語不入の二句を以て、俊爽の致を露出す、微に別あるのみ」といひ、乾隆御批も略ぼ同じ意味で「空谷幽泉、琴聲斷續、恩怨爾汝、呢呢として聞くが如し、景細に情眞、結語、鮑照の詩より翻案して出づ」といつた。杜甫は、かつて李白を賞して、俊逸鮑參軍といつたが、かういふ處を見ると、その言の愈よ適確切實なるを覺える。

野田黃雀行

野田黃雀行

遊莫逐炎洲翠。

遊んで、炎洲の翠を逐ふこと莫れ。

棲莫近吳宮燕。

棲んで、吳宮の燕に近づくなかれ。

吳宮火起焚巢窠。

吳宮火起つて、巢窠を焚く。

炎洲逐翠遭網羅。

炎洲、翠を逐うて網羅に遭ふ。

蕭條兩翅蓬蒿下。

蕭條たる兩翅、蓬蒿の下。

縱有鷹鷂奈若何。

縱ひ鷹鷂あるも、若を奈何。

燕 六帖に「秦始皇の時、吳宮の守吏、火を以て燕巢を照らし、因つて、吳宮を焼く」とあり、鮑照の詩に、猶勝吳宮燕、無罪得焚

【字解】 炎洲 翠は翡翠、即ちかはせみ、郭璞の山海經註に「翠は、燕に似て紺色」とあり、

陳子昂の詩に、翡翠巢南海、雌雄珠樹林、殺身炎洲裏、委羽玉堂陰」とある。炎洲は、海南の地をいふ。漢では朱崖・儋耳の二郡、唐では崖・儋・振の三州、近ごろでは瓊州といひ、その地、大海の中に在つて、廣袤數十里、四時常に燠にして、翡翠を産する。【三】 吳宮

窠とある。【三】 巢窠 窠は穴といふこと、鳥の巢は中が窠んで居るから云ふ。【四】 網羅 鳥を取る網。【五】 蓬蒿 よもぎ、野草の類。【六】 鷹鷂 鷂は隼。

【題義】 野田黃雀行は、漢の時代より傳はつた相和歌瑟調の一で、晉には伯益といひ、むかし、赤鳥が書を銜んで、周の國が興つたが、今や聖王命を受けて、神雀が出て來たといふ意味である。李白の此詩は、唯だ其題のみを取り、黃雀といふことを少しも言葉に出さず、他の鳥を幾つも引いて來て、自然と黃雀を顯はし、そして、自分が禍に罹つたことを暗に述べて居る。

【詩意】 野田に棲む黃雀は、もと賤しい鳥であるから、かの美しい翡翠の後を追つて遊ばうなど思つてはならぬし、又吳宮の如き立派な宮殿に、巢を懸ける燕の眞似などしてはならぬ。何となれば、吳宮の番人が火を以て、燕の巢を照らした時、過つて、吳宮を焚いて仕舞ひ、從つて、その燕の巢も、皆焚かれたし、又炎洲では、翡翠の羽を朝廷に獻ずる爲に、網を以て翡翠を捕へて之を殺して仕舞ふ。そこで、翡翠や燕を羨んではならぬといふのである。黃雀は、その身分に相應して、物さびしげなる二つの羽を蓬蒿の下に戢めて、野田の下に棲んで居れば善いので、さうすれば、鷹だの隼だのといふ猛禽が來たところで、決して捕へられることもなく、まことに、安全である。それなのに、偶々野田を離れ、そして、炎洲の翠、吳宮の燕を羨むやうになれば、到底、その身を危くするを免れぬ譯である。

【餘論】乾隆御批に「黯然として自ら傷む、當に潯陽すでに敗るるの後に在るべし。胡震亨云ふ、白が身世遭遇の概を參按せざれば、その事に因つて題を傳へ、題を借りて情を抒ぶるの本指を知らずと。最も見ありと爲す。故に詩を頌するものは、必ず世を論ずるを貴ぶなり」といつて、聊か牽強附會に失した様にも見えるが、兎に角、その分を忘れて他を羨むものの戒と爲す意は、十分であるので、言葉の表面よりいへば、人が黄雀に向つて忠告する様な體裁になつて居る。

箜篌謠

箜篌謠

攀天莫登龍。走山莫騎虎。

天を攀ちて龍に登る莫れ、山に走つて虎に騎する莫れ。

貴賤結交心不移。

貴賤交を結んで、心、移らざるは、

唯有嚴陵及光武。

唯だ嚴陵と光武とあるのみ。

周公稱大聖。管蔡寧相容。

周公は大聖と稱するも、管蔡むしろ相容れむや。

漢謠一斗粟。不與淮南春。

漢謠一斗の粟、淮南とともに春かず。

兄弟尙路人。吾心安所從。

兄弟尙ほ路人、吾が心、安くにか從ふところ。

他人方寸間。山海幾千重。

他人方寸の間、山海幾千重。

輕言託朋友。對面九疑峰。

輕言、朋友に託し、對面九疑峰。

開花必早落。桃李不如松。

花を開けば、必ず早く落ちむ。桃李は松に如かず。

管鮑久已死。何人繼其蹤。

管鮑久しく已に死す。何人か、其蹤を繼がむ。

【字解】

嚴陵及光武。嚴陵は嚴子陵で、その事は、すでに前に見ゆ。【二】周公稱大聖。史記に「武王崩じ、成王少なり。周公旦、王室を專らにす。管叔、蔡叔、周公が成王に利ならざるを疑ひ、乃ち武庚を挾んで、以て亂を爲す。成王、命じて、伐つて武庚を殺し、而して蔡叔を放つ」とある。【三】漢謠一斗粟。すでに前に見ゆ。【四】方寸。心に同じ、列子に「吾、子の心を見たり、方寸の地虚し」とある。【五】九疑峰。すでに前に見ゆ。【六】管鮑。史記に「管仲、少時、鮑叔牙と遊ぶ。叔、終に善く之を待つ。管仲曰く、吾、はじめ困せしとき、かつて鮑叔と賈し、財利を分つに、多く自ら與ふ。鮑叔、我を以て貪れりと爲さず、我が貧なるを知らばなり。吾、かつて鮑叔と事を謀つて更に窮困す、鮑叔、我を以て愚と爲さず、我が時に利不利あるを知らばなり。吾、かつて三たび仕へて、三たび君に逐はる、鮑叔、我を以て不肖と爲さず、我が時に遭はざるを知らばなり。吾、かつて三たび戦つて、三たび走る、鮑叔、我を以て怯と爲さず、我が老母あるを知らばなり。公子糾敗れ、召忽、これに死す。吾、幽囚せられて、辱を受く、鮑叔、我を以て恥なしと爲さず、我が小節に羞ぢずして、功名の天下に顯はれざるを恥づるを知らばなり。我を生むものは父母、我を知るものは鮑子なりと。鮑叔、すでに管仲を進め、身を以て之に下る。天下、管仲の賢を多とせずして、鮑叔の能く人を知るを多とす」とあり、又同じ様な事が劉向説苑にも見えて居る。

【題義】箜篌謠は、元と公無渡河と題する樂府であつたが、その調子が次第に轉じて、この題となつたので、題は箜篌謠といつても、箜篌を以て彈ずる謠といふだけで、箜篌は、詩に對して何等の關係

もない。これは、普通の解釋であるが、王琦の説には「樂府詩集、箜篌謠は、起るところを詳にせず、大略、結交は常に終始あるべきをいふ。箜篌引と異なり。舊註、以て箜篌引となすは、誤れり」とある。要するに、しつかりしたことは、今から分らない。

【詩意】天を攀ちむと欲するものは、かの靈怪測られざる龍の脊に登らむとし、それと同じく、山を走るには、虎に跨らうと思ふのであるが、それは、到底六つかしいことで、先づ差控へた方が間違がなくて善い。なせかといへば、一時は風雲龍虎の際會を致すことがあつても、とても、永續せぬからである。その永續せぬのは、ひとり君臣の間のみではなく、朋友の間柄も、矢張、その通りで、貴賤の身分、はるかに異なるものが交を結び、その初心、移らずして、終始渝らざりしは、唯だ嚴子陵と光武帝とがあるだけで、これでは龍なり、虎なり、皆あてにして待つて居ることは出来ない。それから、周公は大聖人と稱せられて居るが、管叔・蔡叔といふ兄弟等と相容れず、遂に王命を受けて、これを征伐して仕舞つた。漢の文帝と淮南王安と、矢張同じ事で、淮南王は、謀叛人の悪名を受けて自殺し、一斗の粟は猶ほ春くべしといへる童謠が流行した位である。かくて、兄弟の間ですら、路人と同じ想を爲す位であるから、自分は、この間に立つて、天をも攀ち得ず、山にも走り得ず、さて、どうしたら善いかと心に思ひ惑ふばかりである。兄弟でさへ、その通りで、まして、他人同士の間になると、表面には、さしたることも無いやうであるが、その方寸の胸を探ると、その懸隔の甚しき、山

海幾千里も雷ならぬ程である。それで、口の先では、輕しく莫逆の交だとか、何とか、體の善いことを言つて居るが、やがて、對面するときは、丁度、九疑峰が各、相似て雲間に隠見し、どれが山の實體であるか分らぬと同じく、心の奥底は、到底測り知ることが出来ない。それから、花を咲くものは、いかにも見事であるが、惜いかな、早く散つて仕舞ふ。これに反して、松は花を咲かぬ代りに、歲寒の時節を通じて、その緑を保つて居る。されば、桃李は花豔なるも、到底、松に及ばざると同じく、今の人は、面と向つて、如何にも親密であるが、すこし時が立つと、すつかり忘れて仕舞ふ。その松が、いつまでも縁を保つに比すべきは、管仲・鮑叔の貧時の交が、丁度さうであるが、この人達は、とつくの昔に死んで仕舞つて、今では、誰も其蹤を繼ぐものはない。

【餘論】この篇も、はじめに兄弟の間柄に重きを置いた處を見ると、矢張、肅宗と永王璣と睦じからざるより、一時の變を醸し、自分も、その爲に夜郎に流されるやうに成つたといふことを諷諭したものかも知れない。現に、乾隆御批には「白の知を明皇に受けるや、禮遇殊絶、當時の王公貴人交遊、亦た衆し。潯陽、すでに敗るるや、省記を爲すなし。故に、嚴陵・光武及び管鮑を以て比と爲す。管鮑を言ふものは、事の緣起かくの如きなり。これを卒るに、白の爲に官を納れ罪を贖ふものは、郭子儀なり、亦た以て憾なかるべし」とあるが、もとより確證がない。何にせよ、世上の交態の甚だ輕薄なのを刺つたものとすれば、間違はない。

雉朝飛

雉朝飛

麥隴青青三月時。麥隴青青たり、三月の時。

白雉朝飛挾兩雌。白雉、朝に飛んで、兩雌を挾む。

錦衣綺翼何離離。錦衣綺翼、何ぞ離離たる。

犢牧採薪感之悲。犢牧薪を採り、之に感じて悲む。

春天和。白日暖。春天和らぎ、白日暖かなり。

啄食飲泉勇氣滿。食を啄み、泉を飲んで、勇氣滿ち。

爭雄鬪死繡頸斷。雄を争つて鬪死し、繡頸斷ゆ。

雉子斑奏急管絃。雉子斑奏して、管絃急なり。

傾心美酒盡玉椀。心を美酒に傾けて、玉椀を盡す。

枯楊枯楊爾生稊。枯楊、枯楊、爾、稊を生ず。

我獨七十而孤棲。我、獨り七十にして孤棲す。

【字解】一 麥隴 麥島。二 白雉 爾雅の釋雉に「十四種あり、白雉は其一種なり、鶡雉と名づけ、江東、白鷄と呼ぶ」とある。三 離離 毛の始めて生ずる貌。四 雉子斑 曲名。五 枯楊 易に「枯楊、稊を生ず。老夫その女妻を得て、利あらざるなし」とある。楊は河柳、稊は楊葉の未だ伸びざるもの、即ち若芽。六 歸黃泥 黃泥は黄土に同じ、死ねること。

彈絃寫恨意不盡。絃を弾じ、恨を寫して、意盡さず。

瞑目歸黃泥。瞑目して、黃泥に歸す。

【題義】古今註に「雉朝飛は、犢牧子の作るところなり。犢牧子は、齊の處士、潘宣王の時の人、年五十にして妻なし、出でて野に薪し、雉の雌雄相抱いて飛ぶを見、意動き、心悲む、乃ち雉朝飛操を作り、以て自ら傷む」とあつて、その詞は、

雉朝飛兮鳴相和。雌雄羣遊兮山阿。我獨何命兮未有家。時將暮兮可奈何。嗟嗟暮兮可奈何。といふのである。それから、魏の武帝の時、盧女といふものがあつて、七歲漢宮に入つて、鼓琴を學び、能く此曲を傳へたといふことである。なほ揚雄の琴清英に、雉朝飛操は、衛女傅母の作るところだといふ一説もあるが、その記するところは、思歸操の事と相類し、恐らくは、間違であらうといふことである。李白の此詩は、矢張、犢牧子の事を祖として居る。後には、韓愈も、亦た其作を試みたが、犢牧を顛倒して牧犢としてある。

【詩意】鳥の麥が青青と伸びた三月の時、白雉は、朝に草むらから飛び出して、二羽の雌を従へ、その白雉は、羽毛が如何にも見事で、ふさふさとして居る。犢牧子は、薪を採りに出た序に之を見て、今や聖主上に在まし、その恩は、草木鳥獸に及んで居るが、我のみは、どうしたにか、年七十に成る

までも配偶なく、ひとり寂しく暮らして居るといつて、ひどく心に感じて、悲嘆に勝へぬやうである。時しも、春は長閑に、真晝の日の光の暖かなるに當り、雉は、食を啄み、泉を飲んで、やがて、勇氣が満ちて來たので、雌どもは、各その雄を獨占しやうといふので、忽ち争をなし、はては、一羽の雌が死んで、かの綺麗な頸が、ちぎれて仕舞つた。雌どもの争ふのは宜しくないが、雄の方からいへば、かくまでに深く思はれて居るので、まことに嬉しい次第、それにつけても、犢牧子は、愈よ、以て、配偶なきを嘆くの情を増すことであらう。かくて、名に因む處から、雉子斑の曲を奏し、それに合せて急に管絃を奏し、鬱悶の情を慰める爲に、美酒でも飲まうといふので、頻りに玉腕を傾けた。かの枯れた柳でも、春になれば、芽を生じて、又若がへるのに、自分は七十に成つても、ただ一人で寂しく暮らして居る。かくて、絃を弾じて恨を寫し出さうとしても、その意は、到底盡せぬので、この儘、目を塞いで死ぬるを待つ外はない。

【餘論】この一首中、前六句に雉を敍した處は、稍や面白いが、全體の命意、高からず、李白の作としては、格別の物では無からうと思はれる。

上雲樂

上雲樂

金天之西。白日所沒。

金天之西、白日の沒するところ。

康老胡雛。生彼月窟。
巉巖容儀。戍削風骨。

康老、胡雛、彼の月窟に生ず。
巉巖の容儀、戍削の風骨。

碧玉炁炁。雙目瞳。
黃金拳拳。兩鬢紅。

碧玉炁炁たり雙目瞳。
黃金拳拳たり兩鬢の紅。

華蓋垂下。睫。嵩岳臨上。脣。
不睹詭譎。貌。豈知造化神。

華蓋は下睫に垂れ、嵩岳は上脣に臨む。
詭譎の貌を睹ずんば、豈に知らむや造化の神。

大道是文康之嚴父。
元氣乃文康之老親。

大道は是れ文康の嚴父。
元氣は乃ち文康の老親。

撫頂弄盤。古。推車轉天輪。
云見日月初生時。

頂を撫して盤古を弄し、車を推して天輪を轉す。
云に見る日月初めて生ずるの時。

鑄冶火精。與水銀。
陽鳥未出谷。顧兔半藏身。
女媧戲黃土。團作愚下人。

鑄冶す火精と水銀と。
陽鳥、未だ谷を出でず。顧兔、半ば身を藏す。
女媧、黃土に戯れ、團して、愚下の人と作る。

散在六合間。濛濛若沙塵。
生死了不盡。誰明此胡是
仙真。

散じて、六合の間に在り、濛濛として、沙塵の若し。
生死了に盡さず、誰か明かにせむ、この胡は是れ仙真なるを。

西海栽若木。東溟植扶桑。

西海には若木を栽る、東溟には扶桑を植う。

別來幾多時。枝葉萬里長。

別來幾多の時ぞ、枝葉萬里長し。

中國有七聖。半路頽鴻荒。

中國に七聖あり、半路、鴻荒を頽す。

陛下應運起。龍飛入咸陽。

陛下、運に應じて起り、龍飛んで咸陽に入る。

赤眉立盆子。白水興漢光。

赤眉は盆子を立て、白水は漢光を興す。

叱咤四海動。洪濤爲簸揚。

叱咤すれば四海動き、洪濤爲に簸揚す。

舉足蹋紫微。天關自開張。

足を舉げて紫微を蹋み、天關自ら開張す。

老胡感至德。東來進仙倡。

老胡、至德に感じ、東に來つて仙倡を進む。

五色獅子。九苞鳳凰。

五色の獅子、九苞の鳳凰。

是老胡雞犬。鳴舞飛帝鄉。

これ老胡の雞犬、鳴舞して帝郷に飛ぶ。

淋漓颯沓。進退成行。

淋漓颯沓、進退、行を成す。

能胡歌。獻漢酒。

胡歌を能くし、漢酒を獻す。

跪雙膝。竝兩肘。

雙膝を跪き、兩肘を竝べ、

散花指天舉素手。

散花、天を指して素手を舉ぐ。

拜龍顏。獻聖壽。

龍顔を拜し、聖壽を獻す。

北斗戾南山。摧

北斗戻り、南山摧く。

天子九九八十一萬歲。

天子九九八十一萬歲。

長傾萬歲杯。

長く傾けよ、萬歳の杯。

【字解】(一) 金天。西方の天、張衡の思立賦に「願金天而嘆息兮、音欲往乎西嬉」とあつて、呂向の註に「金天は西方、少昊の主るところなり」とある。(二) 康老。題義の條を見よ。(三) 胡雛。胡兒に同じ。(四) 月窟。長楊賦に「西壓三月窟」とある。即ち西、月没するに近きの處、蓋し西域極遠の地を指して言ふ。(五) 嶠巖。莊子に「太山嶠巖たり」とある、高聳の貌。(六) 戍削。上林賦に「眇易以戍削」とあつて、徐廣の註に「戍削は刻畫して之を作るが如きを言ふ」とある、即ち清癯の貌。(七) 華蓋。垂下睫。相書に「眉は華蓋」とある。にして光あるをいふ。(八) 黃金拳拳。その髪の色黄にして、稍や卷きたるをいふ。(九) 華蓋垂下睫。相書に「眉は華蓋」とある。眉長くして、下、目を覆ふをいふ。(一〇) 嵩岳臨上唇。相書に「鼻は中嶽、即ち嵩岳」とある、鼻が大きくして、上唇を壓するが如きをいふ。(一一) 詭譎。奇怪に同じ。(一二) 大道。道德指歸論に「道德を父と爲し、神明を母となす」とある。(一三) 元氣。孫楚の石人銘

に「大象無形、元氣爲母、杳兮冥兮、陶治衆有」とある。【二四】頂・頭に同じ。【二五】盤古・述異記に「盤古氏は、天地萬物の祖なり」とあり、三五層記に「天地混沌として、雞子の如し。盤古、その中に生ず。萬八千歳にして、天地開闢、陽は清んで天となり、陰は濁つて地となる。盤古、その中に在つて、一日九變、天よりも神、地よりも聖。天は日に高きこと一丈、盤古は日に長すること一丈、かくの如きこと萬八千歳、天數極めて高く、地數極めて深く、盤古極めて長し。後、乃ち三皇あり。數は一に起り、三に立ち、五に成り、七に盛に、九に處る、故に天は地を去ること九萬里」とある。【二六】天輪・呂氏春秋に「天地は車輪の如く、終れば復た始まる」とある。【二七】火精與水銀・火精は日、水銀は月、淮南子の天文訓に「積陽の熱氣、火を生ず、火氣の精なるものは日となる。積陰の寒氣、水となる。水氣の精なるものは月となる」とある。【二八】陽鳥・日に同じ。初學記に「范子計然曰く、日は火の精なり、陽鳥は日中の鳥なり」とある。【二九】谷・陽谷、東方に在つて日の出づる處。【三〇】顧兔・月中の兔。楚辭に夜光何徳、死則又育、厥利維何、而顧兔在腹とある。【三一】女媧戲黄土・太平御覽に風俗通を引いて「俗説、天地はじめて開闢、未だ人民あらず。女媧、黄土を團して、人を爲る。劇務、力、供するに暇あらず。乃ち繩を泥中に引いて以て人を爲る。故に凡そ富貴賢智の者は、黄土の人なり。貧賤凡愚の者は、繩を引くの人なり」とある。又錄異記に「房州上庸の界に伏羲女媧の廟あり、云ふ是れ、土を搏して人民を爲りしところ、古跡在り」と記してある。【三二】六合・上下四方、即ち天地。【三三】仙眞・眞も亦た仙人。【三四】若木・山海經に「灰野の山に樹あり、青葉赤花、名を若木といふ、日の入るところの處」とあり、淮南子に「若木は建木の西に在り、末に十日あり、その花、下地を照らす」とある。【三五】東溟・東海に同じ。【三六】扶桑・十洲記に「扶桑は碧海の中に在り、地方萬里、樹あり、長數千丈、大二千圍、樹は兩兩同根、偶生して、更に相依倚す。これを以て、名を扶桑と爲す。仙人、その椹を食うて一體、皆金光色を作し、空を飛翔す。その樹は、大と雖も、その葉椹は、故と中夏の桑の如きなり。但だ椹稀にして、色赤く、九十歳にして一たび實を生ずるのみ、味絶だ甘くして香美」とある。【三七】七聖・唐の高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗、玄宗に則天武后を加へて云ふ。先天二年の睿宗の詔に運光五聖といひ、貞元二十一年順宗の詔に九聖儲祥といひ、いづれも武后を併せて數へたのである。【三八】半路類鴻荒・鴻荒は太古、玄宗の在位中、安祿山亂を倡へて、兩京覆滅し、恰も鴻荒の世に似たるが故に云ふ。【三九】陛下應運・肅宗が靈武に即位し、尋いで

西京を剋復して、大駕都に還りしことを云ふ。【四〇】赤眉立盆子・漢末、王莽の亂に際し、赤眉の賊が劉氏の後を求め、城陽王章の後盆子を得、立てて帝と爲せしこと。安祿山、すでに死し、羣賊、又その子安慶緒を立てしことに喩ふ。【四一】白水與漢光・後漢の光武帝が南陽白水郷から興つたこと、肅宗の即位に喩ふ。【四二】叱咤四海動・この二句は、天下震動、寰宇洗清せしことをいふ。【四三】舉足躡紫微・紫微は天宮、これは肅宗が天子の位を踐みしことをいふ。【四四】天關自開張・四遠の關塞、悉く開通し、出入に閉守を事とせざるをいふ。【四五】仙侶・様様に扮装して戲を爲す僞僞輩をいふ。西京賦に總會仙侶とあり、薛綜の註に「仙侶は、僞つて假形を作し、神の如きを謂ふなり」。【四六】五色獅子・東晉の發蒙記に「獅子五色にして、虎を巨山の岫に食ひ、一たび噬めば、百人仆る。惟だ鉤戟を畏る」とあり、南齊書に「王敬則、夢に五色の獅子に騎す」とある。つまり、五色の毛の獅子で、一番強いものと見える。【四七】九苞鳳凰・山海經に「丹穴の山、鳥あり、狀、鶴の如く、五色にして文あり、名づけて、九苞鳳といふ。見はるるときは、天下安寧」とあり、論語摘衰に「聖鳳に九苞あり、九苞とは、一に曰く、口、命を包む、二に曰く、心、度に合す、三に曰く、耳、聽達、四に曰く、舌、詘伸、五に曰く、彩、光色、六に曰く、冠、矩朱、七に曰く、距、銳鉤、八に曰く、音、激揚、九に曰く、腹、文戶」とあり、つまり鳳凰の中でも、特に優れたもので、九つの特徴を備へて居るものと見える。【四八】颯沓・盤旋の貌。【四九】散花・維摩詰經に「會中、一天女あり、天花を以て諸菩薩、大弟子の上に散す。諸菩薩に至つては、悉く皆墮落す。大弟子に至つては、便ち著いて墮ちず。ここに於て、一切弟子、皆神力を以て花を去らむとするも、終に去る能はず」とある。【五〇】龍顏・天子の御顔。【五一】辰・曲る。

【題義】原註に「老胡文康辭、或云范雲及周捨所作、今擬之」とある。胡震亨の説に「梁の武帝、上雲樂を製し、西方の老胡文康、上古より生くるものを設け、青眼高鼻、白髮、孔雀鳳凰、白鹿を導弄し、梁朝を慕うて來遊伏拜し、千歳の壽を祝す。周捨、これが詞を爲る。太白の擬作、捨の本詞に視ぶれば、肆を加ふ、而して、龍飛咸陽の數語、又、この胡、肅宗の朝に遊ぶと謂ふものに似たり。亦た各

その時に従つて、一代の俳樂を備ふるのみ」とある。王琦は之に本づいて、更に説を爲し「按ずるに、隋書の樂志、梁の三朝樂第四十四に、寺子を設け、安息の孔雀鳳凰文鹿を導き、胡舞して登り、上雲樂歌舞伎に連ぬ。知る、上雲樂とは、乃ち舞の名色、樂人をして、老胡の狀を扮作せしめ、珍禽奇獸を率ゐて胡舞を爲し、以て天子の萬壽を祝す。その時歌ふところの詞は、即ち捨が作りしところの詞なるを。捨の本詞に曰く、

西方老胡。厥名文康。遨遊六合。傲誕三皇。西觀濛汜。東戲扶桑。南泛大蒙之海。北至無通之鄉。昔與若士爲友。共弄彭祖扶牀。往年暫到崑崙。復值瑤池舉觴。周帝迎以三上席。王母贈以三玉漿。故乃壽如南山。老若金剛。青眼睂睂。白髮長長。蛾眉臨髻。高鼻垂口。非直能俳。又善飲酒。簫歌從前。門徒從後。濟濟翼翼。各有分部。鳳凰是老胡家雞。師子是老胡家狗。陛下撥亂反正。再朗三光。澤與雨施。化與風翔。覘雲候呂。來遊大梁。重駟修路。始屆帝鄉。伏拜金闕。瞻仰玉堂。從者小子。羅列成行。悉知廉節。皆識義方。歌管悒悒。鏗鼓鏘鏘。響震鈞天。聲若鸞鳳。前却中規矩。進退得宮商。舉伎無不佳。胡舞最所長。老胡寄篋中。復有奇樂章。齋歸數萬里。願以奉聖皇。乃欲次第說。老耄多所忘。但願明陛下壽千萬歲。歡樂未央央。

太白の此篇、これに擬して作り、辭義多く相出入す。故に之を全録し、以て其自るところを見はすの

み」とある。要するに、この詩は、老胡の文康が唐廷に来て、種種の戲を爲すことより始め、やがて亂後の清平に及び、老胡が技を獻するの偶然ならざるを言ひ、終に聖主の萬歳を壽したのである。

【詩意】音に名高き老いたる胡人の文康といふものは、金天の西、太陽の没するところ、即ち西域極遠の地たる月窟に於て生れたものである。その容貌は、いかにも丈高く、その風骨は、すつきりと癭せて居る。それから、その兩の目は、皎皎たる碧玉の如くして光があるし、その兩の鬢は、黄ばんで縮れて居て、稍や赤みがかつて見えるし、眉毛は長くして、下、目を覆ひ、鼻は大きくして、唇の上の方に壓して居る。まことに、奇怪至極の姿をして居るので、これを見なければ、造化の神明を知ることが出来ない。彼は、天地とともに生れたもので、絶對悠久の大道は、その父であるし、生生發展の根本たる宇宙の元氣は、その母である。かくて、彼は盤古をも小兒扱ひにし、その頭を撫でさすり、車輪に比すべき天地をも勝手に轉ばすといふのである。おもへば、日月が始めて生ずる時、造化は火精と水銀とを鍊り上げ、火精が日となり、水銀が月と成つたのであるが、その太陽が、まだ東方の陽谷を出でず、月も半ば其身を匿し、つまり、日月が出来かかつて、まだ宇宙に出現せざる時に當り、女媧は人類を造り出さうといふので、黄土を丸めて、凡愚な人も出来、これ等の人類は、天地の間に散らばつて居て、恰も塵埃と一般、しかも、この人類は、生きたり死んだり、終始展轉して居るが、この文康といふ胡人が、天地と共に生れた眞正の仙人であるといふことを知つたものもなかつた

位^{くらゐ} やがて、文康^{ぶんかう}は西海^{せいかい}に若木^{じやくぼく}を栽^うゑ、東海^{とうかい}に扶桑^{ふさう}を植^うゑ、この二木^{ふたき}の間^{あひだ}を毎日^{まいにち}太陽^{たいやう}が度^{わた}つて行くやうになり、彼^{かれ}が一たび別^{わか}れてより、若木^{じやくぼく}も、扶桑^{ふさう}も、だんだん大きくなつて、その枝葉^{しえふ}は、萬里^{ばんり}を覆^{おほ}ふ位^{くらゐ}になつた。ここに、我が大唐^{だいたう}は、中國^{ちゆうごく}に君^{きみ}とし、高祖^{かうそ}より玄宗^{げんそう}に至^{いた}るまで、七代^{だいい}の聖君^{せいくん}を經^へ、半途^{とんず}にして、安祿山^{あんろくざん}の大亂^{たいらん}が起^{おこ}り、兩京^{りやうけい}覆滅^{ふくめつ}し、恰^{あた}も太古^{たいこ}鴻荒^{こうかう}の世^よに逆戻^{さやくもど}りをしたやうであつたが、今の天子^{てんし}は、運^{うん}に乗^{じよう}じて起^{おこ}り、一たび、靈武^{れいぶ}に即位^{すくゐ}されてからは、兩京^{りやうけい}を克復^{こくふく}し、やがて龍駕^{りやうが}は、長安^{あんな}、即ち古^{いにし}しへの咸陽^{かんやう}に還^{かへ}られた。かくて、安祿山^{あんろくざん}の死後^{しご}、羣賊^{ぐんぞく}が其子^{そのこ}安慶緒^{あんけいしよ}を立てたのは、丁度^{ちやうど}、赤眉^{せきび}の賊^{ぞく}が劉盆子^{りうほんし}を立てたやうなもので、天子^{てんし}が恢復^{くわいふく}に専^{もつ}らなるは、なほ後漢^{ごかん}の光武^{くわうぶ}が白水^{はくすい}から勃興^{はつこう}したるに比^ひすべく、程^{ほど}なく天下^{てんか}は、必ず統一^{いつし}されるであらう。されば、天子^{てんし}、一たび叱咤^{しつた}すれば、四海^{しかい}の水^{みづ}が動搖^{どうごう}して、大きな波^{なみ}が簸^あつて揚^あがるが如^{ごと}く、天下^{てんか}は忽ち震動^{しんどう}し、寰宇^{くわんぶ}が一洗^{せん}された。かくて、愈^{いよいよ}天子^{てんし}の位^{くらゐ}を踐^ふんで中外^{ちゆうわい}に號令^{ごうれい}すれば、遠^{とほ}い處^{ところ}の關塞^{くわんさい}まで、盡^{ことごと}く開通^{かいつう}し、出入^{しゆつにふじ}も自由^{じゆう}で、又^{また}これを閉^とぢて守^{まも}るやうなことはない。唐室^{たうしつ}再造^{さいぞう}の氣運^{きうん}、かくの如^{ごと}くであるから、老胡^{らうこ}の文康^{ぶんかう}は、その至德^{しとく}に感^{かん}じて、東方^{とうほう}に來^{きた}り、種種^{しゆじゆ}の遊戯^{いうぎ}なす優倡^{いうしやう}を進^{すす}め、その外^{ほか}に五色^{しきご}の獅子^{しし}だの、九苞^{きゆうほう}の鳳凰^{ほうわう}だのを連れて來^{きた}た。この獅子^{しし}や鳳凰^{ほうわう}は、取^とりも直^なさず、老胡^{らうこ}の雞犬^{けいけん}とも稱^{しょう}すべきもので、それが都^{みやこ}に來^{きた}て、天子^{てんし}の御前^{ごぜん}で舞^{まひ}を爲^なせば、淋漓^{りんり}飄沓^{ひょうたつ}として、かへしつ、めぐりつ、進退^{しんたい}自然^{ぜんぜん}に行^{ぎやう}を爲^なし、まことに見事^{みごと}なものである。かくて、文康^{ぶんかう}は又巧^{またたくみ}に胡歌^{こか}を唱^{とな}へつつ漢酒^{かんしゆ}を獻^{けん}せむとし、兩^{りやう}の膝^{ひざ}を跪^{ひざまづ}き、兩^{りやう}の肘^{ひじ}を張^は

つて、天子^{てんし}の御前^{ごぜん}に畏^{かしこ}まり、一たび白い手^てを舉^あげて天^{てん}を指^させば、天花^{てんか}繽紛^{ふんぷん}として、雨^{あめ}の如^{ごと}く降りしきり、さながら極樂淨土^{ごくらくじやうど}を眼前^{がんぜん}に幻^{げん}出した如^{ごと}くである。然^{しか}る後^{のち}に龍顏^{りゆうげん}を拜^{はい}し、謹^{つし}んで壽^{じゆ}を獻^{けん}じ、さて祝^{しゆ}していふには、北斗^{ほくと}も曲^{まが}るべく、南山^{なんざん}も摧^{くだ}くべく、かかものものは、到底^{たうてい}相比^{あひひ}するに足^たらず、天子^{てんし}は、九九八十一萬歲^{まんざい}の壽^{じゆ}を保^{たも}たるべく、どうか、私^{わたくし}が差^さし上げる、この萬歲^{まんざい}の杯^{さかづき}を傾^{かたむ}けて下^{くだ}さいと申し上げた。

【餘論】文康^{ぶんかう}は、梁^{りやう}の時^{とき}に、西域^{せいよく}から來^きたといふので、無論^{むろん}、唐^{たう}まで生^いきて居^ゐた譯^{わけ}でもないが、李白^{りはく}は、これを借^かりて、中興^{ちゆうこう}の盛^{せい}を贊^{さん}し、肅宗^{しゆくそう}の盛德^{せいとく}を頌^{しょう}したので、もとより、架空^{かうくう}的に結撰^{けつせん}したのである。全篇^{ぜんぺん}、長短^{ちやうたん}錯落^{さくらく}、且^{かつ}つさまさまの典故^{てんこ}が拉雜^{らふざつ}して居^ゐるが、その旨意^{しゆい}は決して、晦澁^{くわいじやく}ではない。そして、撫^な頂^{てい}弄^{りゆう}盤古^{ばんこ}、推^お車^{しや}轉^{てん}天輪^{てんりん}だの、女媧^{にょわ}戲^ぎ黃土^{わうど}、團作^{だんさく}愚下人^{ぐげにん}、散在^{さんざい}三六合間^{さんりくごくかん}、濛濛^{もうもう}若^{じやく}沙塵^{さじん}といふのは、趙甌^{てうお}北^{ほく}が推稱^{すいしやう}した奇句^{きく}警語^{けいご}である。

夷則格上白鳩拂舞辭

夷則格の上、白鳩・拂舞の辭

鏗鳴鐘考朗鼓

鳴鐘を鏗き、朗鼓を考ち。

歌白鳩引拂舞

白鳩を歌ひ、拂舞を引く。

樂府 夷則格上白鳩拂舞辭

白鳩之白誰與鄰。

白鳩の白、誰か與に鄰せむ。

霜衣雪襟誠可珍。

霜衣雪襟、誠に珍とすべし。

含哺七子能平均。

哺を含みて七子能く平均。

食不噎性安馴。

食噎はず、性、安馴。

首農政鳴陽春。

農政を首にし、陽春を鳴らす。

天子刻玉杖。

天子、玉杖を刻し、

鏤形賜耆人。

形を鏤めて、耆人に賜ふ。

白鷺之白非純眞。

白鷺の白は、純眞に非ず。

外潔其色心匪仁。

外は其色を潔くして、心は仁に匪ず。

闕五德無司晨。

五德を闕いて、司晨なし。

胡爲啄我葭下之紫鱗。

胡すれぞ、我が葭下の紫鱗を啄む。

鷹鷂鷓鴣貪而好殺。

鷹鷂鷓鴣、貪つて殺を好む。

鳳凰雖大聖不願以爲臣。

鳳凰は大聖と雖も、以て臣と爲すを願はず。

【字解】

【一】鏤 撞く。【二】考 撃つ、たたく。【三】朗鼓 ほがらかな聲を出す鼓。【四】霜衣雪襟 羽毛の純白を形容して云ふ。【五】含哺七子 詩の國風鳩の第一章に鳩鳩在桑、其子七兮とあつて、毛傳に「鳩鳩は結鞠なり、鳩鳩の其子を養ふ、朝に従つて上下し、暮に従つて下上し、平均一の如し」といふ、陸機の疏に「鳩鳩に均一の徳あり、その子を飼ふに、且には上より下、暮には下より上、平均一の如し」とある。結鞠は即ち布穀。【六】噎 むせぶ。【七】首農政 張華の禽經註に「鳩鳩、この鳥鳴くときは、耕事方作り、農人以て候と爲す」とある。【八】刻玉杖 後漢書禮儀志に「仲秋の月、縣道皆戸を按じ、民の年はじめて七十なるものを比し、これに授くるに玉杖を以てし、これに糜粥を饋す。八十九は、禮、加賜あり。玉杖は長さ九尺、端は鳩鳥を以て飾らす。鳩は噎せざるの鳥なり、老人の噎せざるを欲す」とある。【九】耆人 釋名に「人、六十を耆といふ。耆は指なり、力役に從はず、事を指して人を使ふなり」とある。【一〇】五德 雞に就いて云ふ、韓詩外傳に「君、ひとり夫の雞を見ずや。首に冠を戴くものは文なり、足に距を搏つは武なり、敵、前に在るも、敢て闘ふものは勇なり、食を得て相告ぐるは仁なり、夜を守つて時を失はざるは信なり、雞に五德あり」とある。【一一】司晨 雞の朝早く時を告ぐることを。劉孝標の演連珠に「雞、善く晨を司る、陰晦と雖も、その鳴を輟めず」とある。【一二】葭下 葭は蘆の未だ秀でざるもの。【一三】鷂 鷂、前に見ゆ。【一四】鷓鴣 鷓鴣、くまだか、大たか。王琦の註に「鷓鴣は、鷹と極めて類し、惟だ尾長く翅短きを異となす。猛悍にして多力。鷓鴣は尤も勇健にして、善く搏つ、乃ち鷓鴣中の殊特なるもの」とある。又鷓鴣は大鷓といひ、鷓鴣を混じて一物となすといひ、鷓鴣はみさごとといふ説もある。そこで、王琦は、四者の別を詳論し、「四鳥皆禽中の鷓なるもの、形状亦た相似たり。曲喙、金睛、劍翮、利爪、空中に盤旋し、物を俟つて之を撃つ。鷓鴣は、形最も小、搏つところは、惟だ鳩雀の小鳥の類のみ。鷹は、稍や大、能く雉兔を搏つ。鷂は、鷹よりも大、能く鴻鷂の大鳥を擒にす。鷓鴣は鷓よりも大、能く狐鹿羊豕を搏つ。鷹は、多く北地に生まる。鷓鴣は、是處之あり。鷓鴣は、惟だ邊境に産するのみ」とある。

【題義】

通典に「白鳩は吳朝の拂舞の曲なり」とある。元來朝廷に用ふる舞の中に、鞞、鐸、巾、拂の四舞があつて、各、その手に持つものに因つて名づけ、拂舞といへば、拂、即ち拂子を手を持ち、そ

れを左右に打振つて舞ふのである。その拂舞の中に白鳩といふ一曲があつて、三國の末、吳で出來たのを、後に晉に於て採用した。蕭士贇の説に「拂舞歌の五曲に白鳩篇あり、亦た白鳧舞といふ、その歌ひ且つ舞ふを以てなり、亦た清商曲に入る。按ずるに、晉の楊泓の舞の序に云ふ、江南に至つてより、白符舞を見る、符は即ち鳧なり、白鳧舞は即ち白鳩舞なり。白鳧の辭は、吳に出づ。本歌に云ふ、平平白鳧、思我君惠、集我金堂、謂ふ、晉は金徳たり、吳人、孫皓の虐政を患へて、晉に從はむことを思ふなり。然れども、碣石の章、又魏武に出でしとすれば、知る、拂舞五篇も、竝に晉人、亡國の前に作るところを採集す、惟だ白鳧のみは、吳の舊歌を用ひずして、更めて之を作り、命じて白鳩篇といひしを」とある。白鳩の舞の起原は、かくの如く極めて古いので、梁の時代には、夷則格といふ音律に合せて之を舞つた。その夷則格に上中下の別があつて、これは、其上に屬するものである。そこで、此題は夷則格の上といふ音律に合せる拂舞の中の白鳩舞の曲辭といふ意味である。但し、李の白の此篇は、種種の寓意があつて、乾隆御批の説に據れば、玄宗の末年に李林甫が相位に上り、その爲に、衰亂の因を爲し、朝廷の上に於ても、忠貞の臣が漸く退き、酷吏が争ひ進んだのを諷したといふことである。

【詩意】夷則格の調子を整へるが爲に、よく鳴る鐘を撞き、朗かに響く太鼓を叩く、かくて、白鳩の曲を歌へば、伶人が拂子を打振つて舞ひ出すといふ順序である。この舞は、白鳩を主としたものであ

るが、元來、白鳩といへば、羽毛に少しも他の色を交へずして、全く純白であつて、他に其類もない位、霜の衣、雪の襟、まことに珍とすべきものである。さうして、白鳩は、一つの巢の中に七つの卵を孵化し、その雛を育てる時には、食物を分配するにも、少しも増減することなく、極めて公平である。そして、白鳩は、どんな物を食つても、決して咽ばない、つまり食物を矢鱈に食らなないといふ特性があるし、又柔順にして、人に善く馴れる鳥である。それから、春の三月頃、この鳥が啼けば、農家では最早種蒔の時分だといつて、その用意をするので、つまり、農政の標準となるのである。次に、天子が老人に鳩杖を賜はるといふことがあつて、老人も、この鳩にあやかつて、何時でも、決して咽ばずに、食物を安く取り、そして、長生をする様にといふ意味で、玉の杖に鳩の形を彫刻するのである。白鳩は、かくまで徳があつて、まことに慕はしい鳥である。これに反して、白鷺は、同じく白い鳥ではあるが、純真ではなく、表面でこそ、その色を潔くして居るが、その心は、極めて不仁なものである。元來、鷺といふ鳥は、何も取り立てて言ふべき徳もなければ、功能もない。雞でいへば、五徳があるし、又晨を司るのであるが、鷺には、そんな藝は出來ず、唯だ我が池の葦の下に潜んで居る紫鱗の小魚を啄んで食ふだけである。白鷺は、斷じて排斥すべきものなるにも拘はらず、世人は之を辨別せず、白鳩と一樣に見て居るのは、まことに困つたものである。しかし、白鷺位ならば、格別の害を爲さぬから、先づ善い様なものも、白鷺を容赦して置くと、やがて、鷹だの、隼だの、熊鷹

だの、大鷹だのいふ、食を貪つて殺を好む兇惡なる猛禽をも擧用する様になる。ここに、鳳凰は、鳥中の大聖とも稱すべきものであるから、鷹鷂鷓鴣の如きものを臣下とすることを欲しない。まして、その徳、鳳凰に若かざるものにして、これ等を臣下とすれば、どんな事を仕出かすか分らない。それにつけても、白鳩の白が退いて、白鷺の白が進むといふことが、騷亂に向ふ第一歩で、よくよく、反省しなければならぬ。

【餘論】乾隆御批に「詩は比興を妙とす、苟くも、風義に關するなくんば、作らざるも可なり。蓋し、李林甫、用ひられてより、聚斂の臣進み、嚴酷の吏多し、この詩の刺る所以なり。詞の古奥、魏を超えて漢に入る。王世貞、乃ち謂ふ、李白の樂府は、齊梁に出入すと、篤論に非ざるなり」とある。これより先、鍾惺も「當時羅織の諸獄吏を刺るに似たり、惡を疾み、殘を去るの意を寫し出し、説き得て體あり」といひ、略ぼ同じ意味であるが、御批の言は、史實に引きあててあるから、更に切實である。次に「齊梁に出入す」といふのは、篤論でないといつたのは、至極尤もなことであるが、魏を超えて漢に入る」といつた處で、矢張推賞至れりとは言ひ難く、さうすれば、漢の詩が最上乘といはねばならぬことに成る。試に、予をして言はしむれば、漢魏にも見るべからざる一種の古意古色を發揮したと、かう言ひたいのである。

日出入行

日出入行

日出東方隈。似從地底來。

日は東方の隈に出で、地底より來るに似たり。

歷天又復入西海。

天を歴て、又復た西海に入る。

六龍所舍安在哉。

六龍の舍るところは、安くにか在る。

其行終古不休息。

その行、終古、休息せず。

人非元氣安得與之久徘徊。

人は、元氣に非ず、安んぞ之と久しく徘徊するを得む。

草不謝榮於春風。

草は、榮を春風に謝せず。

木不怨落於秋天。

木は、落つるを秋天に怨まず。

誰揮鞭策驅四運。

誰か鞭策を揮つて、四運を驅る。

萬物興歇皆自然。

萬物興歇、皆自然。

羲和羲和。汝奚汨沒於荒淫。

羲和、羲和、汝、奚ぞ荒淫の波に汨沒する。

之波。

魯陽何德。駐景揮戈。

魯陽、何の徳か、景を駐め、戈を揮ふ。

逆道違天。矯誣實多。

道に逆ひ、天に違ひ、矯誣實に多し。

吾將囊括大塊。浩然與溟滓。吾將到大塊を囊括し、浩然として、溟滓と科を同じう

同科。

せむとす。

【字解】【一】日出東方隈。莊子に「日は東方に出でて西極に入る」とある、隈は水の曲隈。【二】六龍。前の蜀道難に見ゆ。【三】終古。永久、長しへに、いつでも。【四】元氣。宇宙の根本、法苑珠林に「元氣とは、河圖に依るに、曰く、元氣無形、匈匈蒙蒙、偃すものは地となり、伏すものは天となる。禮統に曰く、天地は元氣の生ずるところ、萬物の祖」とあり、帝王世紀に「元氣はじめて萌す、これを太初といふ」とあり、三五曆紀に「未だ天地あらざるの時、混沌として、雞子の如く、溟滓鴻濛、ここに分る。歳は攝提より起り、元氣啓肇」とある。【五】草不謝榮於春風。郭象の莊子註に「暖くして陽春の自ら和なるが若し、故に澤を蒙るもの謝せず、凄として秋霜の自ら降るが若し」とあつて、李白の二句は、たしかに此に本づいたのであらう。【六】四運。四時。【七】興歇。盛衰に同じ。【八】羲和。堯の時、命ぜられて日月を主りし二姓の人、山海經には「東南海外に羲和の國あり、女子あり、羲和と名づく、ここに十日を生んで常に日を甘淵に浴す」とあり、その註に「羲和は、天地はじめて生ずるとき、日月を主るものなり、故に堯、これに因つて羲和の官を立て、以て四時を立つ」とある。【九】駐景揮戈。淮南子に「魯陽公、韓と戦を構ふ、戰酣なるとき、日暮る、戈を援つて之を揮ふ、日、これが爲に反ること三舍」とある。【一〇】囊括。囊に入れて括る、賈誼の過秦論に「四海を囊括す」とある。【一一】大塊。天地。【一二】溟滓。莊子に「溟滓に大同す」とあつて、司馬彪の説に「溟滓は、自然の元氣」とあり、張衡の靈憲に「太素の前、幽清玄靜、寂寞冥默、象を爲すべからず、厥中惟れ靈、厥外惟れ無、かくの如きもの永久、これを溟滓といふ」とあつて、即ち道の根の義。

【題義】胡震亨の説に「漢の郊祀歌に、日出人言、日出入無窮、人命獨短、願乘六龍、仙而升天、

と。太白その意を反して言ふ、人安んぞ能く日月の如く息まざらむ、當に天に違ひ、矯誣なるべからず、心を自然に放ち、溟滓と科を同じうせむ」といつて居る。日出入行は、もと朝の景色を詠じたのであるが、李白は、却つて、太陽その物を詠じた。それから、天地自然の元氣は、絶對であるから、人は唯だ之に従つて行動する外は無く、元氣の運行を矯め直すなどいふことは、到底出来ないことだといふので、つまり、老子の無爲恬淡の如き理想を詠出して居る。

【詩意】太陽は、朝に東方から昇るが、さながら、地底から出て来るやうに見え、それから、天を一周して、最後に海に入るのである。太陽には、もと羲和といふ御者があつて、六龍に馭し、日輪を廻はして行くといふが、毎日運行を止めぬから、その六龍は、どこに宿るのか、究め知ることは出来ない。天地開闢の始より、此の如く、いつ終るか分らぬが、もし終ありとすれば、無論、その時まで、休むことは無いであらう。かくて、日が運行するに隨つて、地上に於ては、春夏秋冬の節物を成す、それが天地自然の元氣である。人は、萬物の靈長ではあるが、もとより、元氣その物ではないから、太陽と共に、長しへに徘徊することは出来ず、矢張、元氣の推移に任かせるより外はない。現に、春になると花が咲くが、花は、春に向つて、御禮を述べたといふこともないし、秋になると、木の葉が落ちるが、木は、秋に對して、怨がましいことを言つた例はない。これ等は、すべて、元氣に任かせて居るので、人も、生死を超越して、元氣に任かせて置けば、それで、善いのである。抑も六龍の駕を誰が鞭

を揮つて輪轉するか、一寸分らぬが、太陽は、常に造化の鞭策に従つて輪轉し、それで春夏秋冬の四時をなし、その節物の推移に伴うて、萬物は、自然に、或は興つたり、或は歇んだりするのである。しかし、聞くところに據れば、太陽を鞭策する羲和といふものは、時として荒淫の波に汨没して、兎角意り勝ちになると、太陽の出入も、時を以てせぬ様になる。その時、魯陽公といふ人があつて、戈を揮つて落日を引き返したといふが、抑も、此人には、如何なる徳があつたのか、もし實際こんな事があつたとすれば、取りも直さず、道に逆ひ、天に違つたもので、少からざる矯誣の仕草である。ここに、我が見解を述べると、天地を悉く囊中に括め、浩然として、元氣と科を同じうし、何處までも、自然の運行に逆はぬやうにする外はないと思ふ。

【餘論】 乾隆御批に「易に曰く、始に原づき、終に反る、故に死生の説を知ると、自然の運を知らずして、長生久視に意あるものは、妄なり。詩意、仙を求むる者の爲に發するに似たり。故に前に云ふ、人非元氣、安得與之久徘徊、後に云ふ、魯陽揮レ戈、矯誣實多、而して結ぶに、溟滓同レ科を以てす。造化に委順するに如かずといふなり。もし時行物生の妙を寫すと謂はば、理學の語を作し、亦た索然として味なし。これを觀るも、益す白が仙を學びしは、蓋し託するところあつて然るを知るなり」とある。しかし、見方に因つては、これも時事を諷したものと考えられるので、羲和羲和云々は、玄宗の政治が、だんだん悪くなつて、亡國の兆、漸く現はれて來たことを云ひ、この時に當り、國家の爲

めに、力を出して、衰運を挽回しやうといふ人があつても、今の處では、最早さしたる効果もない。殊に君の逆鱗に觸れぬまでも、諫を上るといふと、却つて、君を激するばかりで、どうにも仕方がない。そこで、自分は、しばらく、自然に任せ、その内に何とか盛り返す工夫をしやうと思ふと、かういふ意味にもなる。つまり、この詩は、李白が、その獨特の世界觀を述べたものであるから、これを其時勢に引きあてれば、上のやうな意味になるのである。

胡無人

胡無人

嚴風吹霜海草凋。

嚴風、霜を吹いて、海草凋む。

筋幹精堅胡馬驕。

筋幹精堅、胡馬驕る。

漢家戰士三十萬。

漢家の戰士三十萬。

將軍兼領霍嫖姚。

將軍は兼ねて領す霍嫖姚。

流星白羽腰間挿。

流星白羽、腰間に挿み、

劍花秋蓮光出匣。

劍花秋蓮、光、匣を出づ。

天兵照雪下玉關。

天兵、雪を照らして、玉關を下れば、

虜箭如沙射金甲。

虜箭、沙の如く金甲を射る。

雲龍風虎盡交回。

雲龍風虎、盡く交回。

太白入月敵可摧。

太白、月に入つて、敵摧くべし。

敵可摧旄頭滅。

敵摧くべし、旄頭滅す。

履胡之腸涉胡血。

胡の腸を履み、胡血を涉り、

懸胡青天上埋胡紫塞傍。

胡を懸く青天の上、胡を埋む紫塞の傍。

胡無人漢道昌。

胡に人なく、漢道昌なり。

陛下之壽三千霜。

陛下の壽三千霜。

但歌大風雲飛揚。

但だ歌はむ大風雲飛揚。

安用猛士兮守四方。

安んぞ猛士を用ひて、四方を守らむ。

【字解】一 嚴風 冬の風。二 海草 海は瀚海などいふ時の海で、沙漠を指す。三 筋幹精堅 秋になつて膠が堅くなり、

弓矢が丈夫に出来たといふこと。周禮に「凡そ弓を爲る、冬は幹を析いて、春は角を液し、夏は筋を治め、秋は三材を合す」とある。

四 驕 馬壯なる貌。五 漢家戰士 漢書に「武帝の元光二年、五將軍、三十萬衆を遣し、馬邑の下に伏し、單于を襲はむと欲す、

單于これを覺つて去る」とある。六 霍嫖姚 漢書に「霍去病、騎射を善くす、再び大將軍に従ふ。大將軍、詔を受け、壯士を興

へ、票姚校尉となす。輕勇騎八百と、直に大將軍を棄て、數百里、利に赴き、斬捕首虜過當」とある。票姚は勁疾の貌から取つたの

である。七 流星 飛ぶことの疾きをいふ。八 白羽 箭に白い羽をはきたるをいふ。九 秋蓮 吳越春秋に薛燭の劍を相す

る言を記し「光るか、芙蓉の始めて生ずるが如し」とある。刀の匂ひを蓮花の豔なるに比して云ふ。一〇 天兵 兵威の盛なるこ

と天の如きより云ふ。一一 玉關 玉門關、支那本部の西極。一二 雲龍風虎 陣の名、李衛公問對に「太宗曰く、天地風雲龍虎

鳥蛇、この八陣は何の義ぞや」とある。舊註に周易の「雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ」を引いてあるが、詩義に於ては當らぬやうで

ある。一三 太白入月 晉書に太白が月に入つたといふことが、數ば見えて居るが、敵を摧くの兆としたことは無いので、李白は、別

に本づいたことがあるかも知れぬ。一四 旄頭 史記天官書に胡星とある。一五 懸胡 胡人の首を梟らす。一六 紫塞 古今

註に「秦、長城を築き、土色皆紫なり、漢塞亦た然り、故に紫塞といふ」とある。一七 三千霜 三千年に同じ。一八 大風雲飛揚

漢の高祖が其故郷なる沛に還つたときに作つた歌の句。

【題義】胡無人は、相和歌瑟調の一で、胡中人なきに因り、容易に之を征服することが出来たといふ

意を述べたのである。蕭士贇は、安祿山が死んだ時分に、李白が特に作つたのだといつたが、王琦は

之を駁し、開元天寶の間、四夷を征討したに就いて作つたといつて居る。

【詩意】きびしき冬の風が霜を帯びて吹きすさめば、沙漠に生えた草などは、全く枯れて仕舞ひ、弓

矢も、丈夫に出来揃ひ、胡馬も、勢壯にして、愈よ胡人が南下して邊に入寇する時と成つた。この

時しも、中國に於ては、三十萬の戰士も繰り出し、大將軍は、霍嫖姚の如き智勇兼備の將校を幾らも

幕下に從へて居る。そこで、中國の將士は、流星の如く疾く飛ぶ白羽の矢を腰に挿み、燒刃の句、秋

の蓮の花の豔なるに比すべき名刀を匣から取り出して、これを佩びて居る。かくて、中國の兵は、雪

に照らされつ、玉門關から打つて出ると、胡人は、サア大變だといふので、俄に射出す防矢は、さながら沙の如く、黄金の鎧にばらばらと中る。それから、漢兵は、雲龍風虎の陣形を交互に回轉し、やがて、太白星が月に入れば、愈よ敵を打ち滅す前兆と知られた。さて愈よ胡人を打破れば、旋頭の胡星も、いつしか消えて、無くなつて仕舞ひ、戰場には、胡人の死骸が縦横にころがつて居て、そこで胡人の腸を踏みじり、胡人の血の川の如くなれるを徒渉し、胡王の首を高く青天の上に梟し、胡奴の屍を始末して、長城の傍に埋めた。抑も、胡に然るべき人もなかりしに因り、かくの如く、容易に掃蕩することが出来たので、漢家の帝業は、これより益す昌である。かくて、陛下の壽は、三千年の久しきに互るべく、その威の遠近に及ぶは、むかし漢の高祖の歌を其儘に、大風一たび起つて満天の雲を吹き飛ばすが如く、おまけに、胡人すでに滅び、邊境は全く無事であるから、最早猛士を擧用して、四方を守る世話もなく、まことに、目出たいことの限りである。

【餘論】天兵照雪下玉關より以下、一氣にして下り、意象と聲調と、ともに壯快である。それから、蕭士贇は、結三句、即ち陛下之壽三千霜より以下は、李白の手筆ではあるまいといつて、之を刪つて仕舞つた。その説に「詩、漢道昌に至つて、一篇の意、すでに足る。陛下之壽三千霜、但歌大風雲飛揚、安用猛士守四方」は、一本に此三句なしといふもの、是なり。蘇子由をして之を見せしめば、必ず肯て軽く理を識らざるの謂を致さず。東坡云ふ、今の太白集の悲來乎、笑來乎、及び贈懷素草書

の數詩あるは、決して、太白の作に非ず。蓋し、唐末五代の間、齊己輩の詩ならむと。僕亦た謂ふ、この詩、最後の三句、安んぞ、此輩の増すところに非ざるを知らむや。太白をして、讒を數百歳の後に貽さしむ、惜いかな。然りと雖も、東坡能く之を辨じ、頽瀆亦た直に讒を致す、これ亦た以て二蘇の優劣を定むるに足る。今、遂に刪り去る。後人、正法眼藏を具ふるもの、必ず賞音を蒙らむ」とあつて、後世の刊本で、大抵これを刪つたのは、すべて蕭本に従つたので、一應尤も千萬といふべく、この三句は、無理に付けた様で、無い方が含蓄があつて面白い。それから王琦は、この詩の製作の時代に就いて説をなし「酉陽雜俎に云ふ、祿山反するや、太白、胡無人を製して言ふ、太白入月敵可摧と、祿山の死するに及びて、太白月を蝕すと。蕭氏の註、これに従つて謂ふ、この詩、必ず上元の間に作り、太史の占に據つて言ふと。今、唐書天文志を考ふるに、未だ嘗て太白月に入るの事あらず、しかも、蕭、妄りに、上元元年三月五日、昴を掩ふの文を引き、以て之に當つ、誤れり。天兵照雪下玉關の句を玩へば、當に是れ、開元天寶の間、四夷を征討するが爲にして作る、庶幾はくは、これに近し」とあるが、これは、成程、王琦の説の方が穩當なやうである。

北風行

北風行

燭龍棲寒門。光曜猶旦開。

燭龍、寒門に棲み、光曜、猶は旦に開く。

日月照之何不及此。

日月、これを照らすも、何ぞ此に及ばざらむ。

唯有北風號怒天上來。

唯だ有り、北風號怒して天上より來る。

燕山雪花大如席。

燕山の雪花、大なること席の如し。

片片吹落軒轅臺。

片片吹き落つ、軒轅臺。

幽州思婦十二月。

幽州の思婦、十二月。

停歌罷笑雙蛾摧。

歌を停め、笑を罷めて、雙蛾摧く。

倚門望行人。

門に倚つて、行人を望む。

念君長城苦寒良可哀。

念ふ、君が長城の苦寒、まことに哀むべし。

別時提劍救邊去。

別るる時、劍を提げ、邊を救うて去り、

遺此虎紋金鞞鞞。

この虎紋の金鞞鞞を遺す。

中有一雙白羽箭。

中に一雙の白羽箭あり。

蜘蛛結網生塵埃。

蜘蛛網を結んで、塵埃を生ず。

箭空在。人今戰死不復回。

箭は空しく在り。人は今戰死して復た回らな。

不忍見此物。焚之已成灰。

忍びず、此物を見るに。これを焚いて、已に灰と成る。

黃河捧土尙可塞。

黃河捧土、尙ほ塞ぐべし。

北風雨雪恨難裁。

北風雨雪、恨、裁し難し。

【字解】

【一】燭龍 淮南子に「燭龍は雁門の北に在り、委羽の山に蔽はれて日を見ず、その神、人面龍身にして足なし」とあり、高誘の註に「龍、燭を啣み、以て太陰を照らす、蓋し長さ千里、視るを晝となし、瞑を夜となし、吹くを冬となし、呼ぶを夏となす」とある。北極に近い夜國は、一年の半分が晝で、半分が夜、夜になると、燭龍といふものが出来て、焔を吐いて光を發し、それで漸く物を辨別することが出来る。【二】寒門 淮南子に「北極の山を寒門といふ」とあつて、高誘の註に「積雪の在るところ、故に寒門といふ」とある。【三】燕山 太平寰宇記に「燕山は、薊州漁陽縣の東南七十里に在り」といひ、一統志に「燕山は、薊州玉田縣の西北二十五里に在り、西山より、一帶迤邐して東に來り、延袤數百里、海崖に抵る」とある。しかし、詩家が燕山の字を用ふるのは、燕地の山を概舉したので、猶ほ泰山楚山の類、専ら一を指したのではない。【四】軒轅臺 直隸名勝志に「軒轅臺は、保安州西南界の喬山の上に在り」といひ、山海經に「大荒の内に軒轅臺あり、射るもの、敢て西に向はず、軒轅を畏るるが故なり」とある。【五】幽州 舜が十二州を區劃した時、幽州は其一であつて、唐では范陽の地。【六】雙蛾 兩方の眉。【七】虎紋金鞞鞞 虎の模様を描いた金製の矢囊、即ち胡鏡。【八】黃河捧土 後漢書朱浮傳に「これ猶ほ河濱の人、土を捧げて、以て孟津を塞ぐがごとし、多く其量を知らざるを見るなり」とある。

【題義】北風行は、鮑照の作が一番古く、北風雪を雨らし、行人歸らざることを傷んだのであつて、李白も、亦た之に擬したのである。但し、征人の妻の心持に成つて悲哀の意を寓し、専ら玄宗の窮邊驢武の爲にしたのである。

【詩意】北方には丸で日月の照らさぬ國があつて、半年は夜である。そこには、燭龍といふものが、寒門に棲み、光を放つて暗を照らすから、恰も夜があげた様な心持がする。そして、日月は、何故、この地に照らし及ぼさぬのであるか。もとより、北方の事であるから、寒風怒號して天上より吹き下して居る。さういふ處へ、戦争に往つた征人の心は、どんなであらう。燕山一帶には、席の如き大きな雪がひらひらと降つて来て、むかし黃帝の登られた軒轅臺にまで飛んで来る。その臺の下が幽州で、そこに物思ふ征人の妻が居る。この女とても、夫が家に居る時分には、面白をかしく、歌笑して日を暮らして居たが、一たび夫に別れて後は、歌を停め、笑を罷め、兩の眉は、愁の爲に鎖されて、決して開くことがない。さて夫は何處へ往つたのか、門に倚つて、その方を眺めやれば、遠く萬里の長城を隔てた北邊荒漠の地、即ち燭龍の光で物の黑白を辨ずるといふ程の處、そこに久しく居ること故、その苦寒は、まことに哀むべき程である。夫に別れては、もとより相思の情に堪へぬが、おまけに、遺物が残つて居るので、これを見るにつけて、思は愈よ増すばかりである。夫は邊地の急を救ふべき命令を受け、劍を提げて出かけた。その別れの時、平生使ひ慣らした虎の模様ある胡録を残して往つた。その胡録の中には、一雙の白羽の征矢があつたが、歲月すでに久しきを経、その征矢の上に、小蜘蛛が巢を作り、塵が一ぱいになつても、夫はまだ歸つて來ない。歸つて來ないも道理で、遺品の征矢こそ、家に残つて居るが、聞けば、夫は、とつくの昔に討死をしたとのことである。そこで、最早この

遺品を見るに忍びない、いつそ、こんな物はない方が善いといふので、これを焚き棄てて灰にして仕舞つたが、思婦の怨は、なかなか断ゆることは無い。黄河の水は、滔滔として、到底塞ぎ切れぬが、根氣好く續けて、年が年中、土を捧げて埋めにかつたならば、若干年の後、漸く塞ぎ切つて仕舞ふことがあるかも知れぬが、北風雨雪に對して、亡き夫を思ふ此恨は、千年萬年たつたとても、決して断ち切ることの出来るものではない。

【餘論】黄河捧土の二句は、絶望の語で、到底不可能なる事に比較して、無限の情思を述べたので、前に在つた蒼梧山崩湘水絶、竹上之涙乃可滅と同一の構想である。唐汝詢は「これ成婦の辭として、以て諷するなり」といひ、乾隆御批には「悲歌激楚」とあるが、情緒極めて纏綿、しかも、その結構は、繊細に落ちず、ここらは流石に太白の本領を窺ふべきものであらう。

俠客行

俠客行

趙客縵胡纓。吳鉤霜雪明。
銀鞍照白馬。颯沓如流星。
十步殺一人。千里不留行。

趙客縵胡の纓、吳鉤、霜雪明かなり。
銀鞍、白馬を照らし、颯沓として、流星の如し。
十歩に一人を殺し、千里行を留めず。

事了拂衣去。深藏身與名。

事を了らば、衣を拂つて去り、深く藏す、身と名とを。

閒過信陵飲。脫劍膝前橫。

閒に信陵を過ぎて飲み、劍を脱して膝前に横ふ。

將炙啖朱亥。持觴勸侯嬴。

炙を將て朱亥に啖はしめ、觴を持して侯嬴に勸む。

三杯吐然諾。五嶽倒爲輕。

三杯、然諾を吐き、五嶽、倒つて爲に輕し。

眼花耳熱後。意氣素霓生。

眼花し、耳熱する後、意氣、素霓生ず。

救趙揮金槌。邯鄲先震驚。

趙を救うて金槌を揮ひ、邯鄲、先づ震驚す。

千秋二壯士。烜赫大梁城。

千秋の二壯士、烜赫す大梁城。

縱死俠骨香。不慙世上英。

縱ひ死するも、俠骨香しく、世上の英たるに慙ぢず。

誰能書閣下。白首太玄經。

誰か能く書閣の下、白首太玄經。

【字解】(一) 趙客 燕趙は古しへより慷慨悲歌の士多く、又遊俠者流が輩出したから、ここには特に趙客としたのであらう。

(二) 縷胡纓 莊子に「趙の太子曰く、吾が王見るところの劍士は、皆蓬頭突鬢垂冠、縷胡の纓、短後の衣」とある。粗纓にして文理なきこと。つまり、飾もない粗末な冠の紐。

(三) 吳鉤 鉤は、先端の少し曲つた短劍。【四】 風香 すばやい貌。【五】 十步殺一人 十歩あるく間に一人を殺す。莊子の説劍に「臣の劍は、十歩に一人、千里、行を留めず。王大に悦んで曰く、天下敵なし」とある。

(六) 信陵 信陵君、即ち魏の公子無忌。【七】 炙 焼肴。【八】 朱亥、侯嬴 史記に「魏に隱士あり、侯嬴といふ。年七十、大梁夷門の監者たり。公子、かつて置酒して客を會し、坐定まるや、車騎を從へて、自ら侯嬴を迎ふ。侯嬴曰く、臣に客あり、市屠の中に在

り、願はくは、車騎を任けて之を過ぎれ、と。公子、車を引いて市に入る、侯嬴、下つて、其客朱亥を見て睥睨し、故らに久しく立つ。公子顔色愈々和らぐ。侯嬴、乃ち車に就き、家に至つて上坐に坐す。酒酣なるとき、公子、起つて壽を爲す。酒を罷む。侯嬴、公子に謂つて曰く、朱亥は賢者なり、世、能く知るなし、故に屠間に隱るのみ」とある。【九】 五嶽 前に見ゆ。【一〇】 眼花 酒に酔つて目がかすむ。【一一】 素霓 白い虹。【一二】 救趙 史記に「魏の安釐王二十年、秦、趙の長平の軍を破り、又進んで、邯鄲を圍む。公子の姉は、趙の平原君の夫人なり。數ば、救を魏に請ふ。魏王、將軍晉鄙をして、十萬の衆を將つて、趙を救はしむ。軍を留めて鄴に壁し、名は趙を救ふと爲し、實は兩端を持し、以て觀望す。平原君、魏の公子を讓めしむ。公子、これを患へ、乃ち侯嬴の計を用ひ、如姬に請うて、王の臥内に於て虎符を竊ましめて、晉鄙の軍を奪ひ、朱亥をして四十斤の鐵椎を袖して晉鄙を推殺せしめ、公子、遂に其軍を將ぬ、進んで秦軍を撃つ。秦軍、解けて去り、遂に邯鄲を救うて趙を存す。はじめ、公子過ぎて侯嬴に謝するや、侯

生曰く、臣、宜しく從ふべし、老いて能はず。請ふ、公子の行く日を數へ、晉鄙の軍に至るの日を以て、北向自到、以て公子を送らむ、と。公子遂に行いて軍に至る。侯嬴、果して北向自到す」とある。【一三】 烜赫 宣著の貌、一に威儀ある貌。【一四】 白首太玄經 前に見ゆ。

【題義】 俠客行は、俠遊二十五曲の一で、主として、俠客を詠出したのである。

【詩意】 この俠客は、元と趙地の産であつて、飾も無い粗末な冠の紐を帯び、その服装は、甚だ見ぐるしいが、懷にせる吳地の短劍は、天晴、業物と見えて、焼刃の匂は、霜雪の如く、人の目を射るばかりである。かくて、銀鞍を白馬に置き、馬上ゆたかに乗り出せば、その疾きことは、流星の如くで、それから、十歩の間に一人を殺し、千里の遠きをも一飛びに駆け通し、決して其行を留めることとはない。そして、事が終れば、民間に引込んで其身を隠し、且つ評判も立たぬやうにし、その出

没は、自由自在である。それから、信陵君の如き貴公子を訪うて會飲するに當り、劍を脱して膝前に横へ、朱亥の様な若者に向つては、燒肴を與へて食はしめ、侯嬴の如き老俠士に對しては、慇懃に杯を進めて、極めて親密に交際し、酒三杯を盡せし後は、然諾を重んずる立派な言葉を吐き、五嶽の名山も、その爲には輕げに搖動せむばかりである。やがて、酒したたかに參り、眼がかすみ、耳が熱すれば、意氣人を壓倒し、その氣焰は、虹を生ずるかと思ふばかりである。かの朱亥といひ、侯嬴といひ、千古稀に見るところの俠士であつて、信陵君が趙を救はむとするに際し、侯嬴は第一に計を獻じ、朱亥は鐵椎を揮つて將軍晉鄙を打殺し、やがて、信陵君は、その軍を奪ひ、はじめ、趙を救ふことが出來たので、邯鄲を圍んで居た秦兵も、第一に震ひ動いた位。この二壯士の名聲は、千秋なほ朽ちずして、大梁に著はれて居る。されば、一たび死んで、むなく俠骨の香を餘すとも、天晴、世上の俊英たるに愧ぢぬものである。この二人のやうなものと同等の交際をして居る我が俠士の人物も、亦た従つて想像すべきである。俠客の仕事の花らしく、そして、世に持て囃されることは、かくの如く、これに比すれば、儒生などは、まことに詰まらぬもので、かの揚雄の如きは、書を天祿閣に校して、すこしばかりの俸給を貰ひ、そして、白髮頭になるまで、刻苦して太玄經の著作に従事して居たといふので、兩者懸隔の甚しいのは、丸で御話にも成らぬ程である。

【餘論】 起首より、意氣素覺生に至るまでは、正面から俠客を敍寫し、救趙揮金槌の二句は、朱亥、

侯嬴の事を記し、側面から俠客の人物を髣髴せしめる爲にしたのである。なほ、結二句、誰能會閣下の二句は、行行且遊獵篇の儒生不及遊俠人、白首下帷復何益と全く同義である。

李太白集卷三

關山月

くわんざんのつき

明月出天山。蒼茫雲海間。

明月、天山を出づ、蒼茫たる雲海の間。

長風幾萬里。吹度玉門關。

長風幾萬里、吹き度る玉門關。

漢下白登道。胡窺青海灣。

漢は下る白登の道、胡は窺ふ青海の灣。

由來征戰地。不見有人還。

由來、征戰の地、人の還るあるを見ず。

戍客望邊色。思歸多苦顏。

戍客、邊色を望み、歸るを思つて、苦顏多し。

高樓當此夜。歎息未應閒。

高樓、この夜に當り、歎息して未だ應に閒なるべからず。

【字解】 一 天山 即ち祁連山、一名時漫羅山、又祁漫羅山、皆同義、唐語で天山といふことである。漢書の晉灼註に「天山は、西域に在り、蒲類國に近く、長安を去ること八千餘里」とあつて、この山は、東、甘肅掖より、西、庭州に至り、凡そ三千五六百里の間に亘つて居る。ここに、明月出天山といふのは、征夫の方から言葉を立てたので、すでに天山の西を過ぎ、首を回らして東望すれば、儼然として、明月が天山の外に出づるを望んだのである。 二 玉門關 略して玉關といふ、すでに前に見ゆ。 三 白登道 漢書に「冒頓、精兵三十餘萬騎を繼つて、高帝を白登に圍む」と七日、漢兵、中外相救餉するを得ず」とある。 四 青海 周書に「建

德五年、吐谷渾、大に亂る、高祖、皇太子に詔して之を征す、軍、青海を渡つて、伏俟城に至る。夷呂、遁れ去る、その餘衆を虜にして還る」とある。なほ隋の將、殷文振が西征して、虜を青海に逐うたこともあるし、唐の儀鳳中には、李敬元、開元中には王君奭、張景順、崔希逸、皇甫惟明、王忠嗣等が、先後して、吐蕃と攻戦したのも、皆青海附近である。

【題義】關山月は、漢の横吹曲といふ樂府の中に在る題である。漢の横吹曲は二十八解、魏晉以來は惟だ十曲を傳へ、又關山月等の八曲があつて、これを併せて十八曲あつた。されば、漢代には、題のみあつて、歌が無かつたので、その歌の出來たのは六朝以後に係り、李白も、亦た此等に倣つて作つたのであらう。關山月は、離別を傷むといふことが、主になつて居るので、李白の此詩は、開寶中、玄宗が頻りに邊境を開くが爲に、胡地に兵を出したに就いて、その兵卒の苦況を寫し出し、爲政者の戒としたのである。

【詩意】征戍の兵士は、中國の境外、何萬里といふ極遠の土地に居るので、夜、仰ぎ見れば、一輪の明月が從來極西の處として知られて居た天山から、高く差し上つた。見わたすかぎりには、蒼茫たる雲の海で、故郷は何處とも知られず、長風颯然として、幾萬里を隔てたる玉門關の方から吹いて來る。かくの如く、月は限なく故郷をも照らし、風も故郷の方から吹いて來るが、征戍の兵士が此處まで來た其時の辛苦は、どの位とも知れず、又これから歸るといふあても無いので、如何にも傷心の限りである。畢竟、外國と兵を交へたのは、漢の高祖が白登の道に兵を出して、匈奴の冒頓に圍まれたに始

まり、爾後和戰常ならず、時時青海の邊まで胡騎が押し寄せて、我が中國を窺ふといふことがある。かくて、今日に至るまで、征戰は絶えないが、痛ましいかな、そこへ征伐に出かけた兵士は、むかしから、決して歸つて來たことが無い。されば、これ等の兵士は、歸らうと思つても歸られず、唯だ邊庭の慘澹たる景色を望み、同時に、我が妻たるものも、わびしげな顔をして、高樓の上に立ち、同じ此月を眺めて、夫たるものが何時還るか分らぬ爲に、頻りに歎息して居るであらうと、思ひつづけて愈よ堪へられぬ位である。

【餘論】この詩の起四句は、格別新しい意象でも無いが、兔に角、大きな景色で、その調子も、極めて高亮である爲に、むかしから有名であつて、呂居仁は「太白の詩、明月出天山等の篇、氣、一世を蓋ふ、學者能く之を熟味すれば、自ら褊淺ならず」といひ、嚴滄浪は「近體に似たるも、古に入つて礙げず、眞に仙才なり」といひ、胡應麟は「雄渾の中、多少の閑雅」といつた。それから、由來征戰地、不見有二人還の二句は、明月の四句から逼出せられ、この二つが戌容望邊色の五字中に收束せられた處は、流石に大筆力と稱すべく、且つ結末に於て、征夫の眼中から思婦を寫し出したのは、平板の弊を避けて、極めて面白い。乾隆御批に「朗如行玉山は、白が自ら道へる語となすべく、格高くして氣渾、雙關、收を作す、彌よ逸致あり」とあつて、即ち全首を評したものである。

獨漉篇

獨漉篇

獨漉水中泥。水濁不見月。
 不見月尚可。水深行人沒。
 越鳥從南來。胡鷹亦北渡。
 我欲彎弓向天射。
 惜其中道失歸路。
 落葉別樹飄零隨風。
 客無所託悲與此同。
 羅幃舒卷似有人開。
 明月直入無心可猜。
 雄劍挂壁時有龍鳴。
 不斷犀象繡澀苔生。
 國恥未雪何由成名。

獨漉水中泥、水濁つて月を見ず。
 月を見ざるは、尚ほ可なるも、水深ければ、行人沒せむ。
 越鳥は南より來り、胡鷹亦た北より渡る。
 我、弓を彎いて、天に向つて射むと欲するも。
 その中道にして、歸路を失はむことを惜む。
 落葉は樹に別れ、飄零して風に隨ふ。
 客、託するところなくして、悲、これと同じ。
 羅幃舒卷、人あつて開くに似たり。
 明月直に入り、心の猜むべきなし。
 雄劍、壁に挂くれば、時に龍の鳴くあり。
 犀象を斷たず、繡澀して苔生す。
 國恥、未だ雪がず、何に由つてか名を成さむ。

神鷹夢澤不顧鷓鴣。
 爲君一擊鵬搏九天。

神鷹夢澤、鷓鴣を顧みず。
 君が爲に一擊すれば、鵬、九天を搏つ。

【字解】(一) 獨漉 題義の條を見よ。(二) 羅幃 うす物の戸ばり。(三) 雄劍 劍が二つあるときは、雌雄といふので、雄は、その長い方と見える。(四) 龍鳴 拾遺記に「帝顓頊、曳影の劍あり、空に騰つて舒ぶ、もし四方兵あらば、この劍、すなはち飛起して其方を指し、剋伐未だ用ひざる時は、常に匣裏に於て龍虎の吟するが如し」とある。(五) 不斷犀象 曹植の七啓に「步光の劍は、華藻繁縟、陸に犀象を斷つも、未だ偽と稱するに足らず」とあつて、李周翰の註に「劍の利を言ふなり、犀象の獸、その皮堅し」とある。(六) 神鷹夢澤 幽明録に「楚の文王、獵を好む。人あり、一鷹を獻す。王、その常に殊なるを見、故らに獵を雲夢の澤に爲す。毛羣羽族、争ひ噬み、共に搏つ。この鷹、瞪目して、遠く雲際を瞻る。俄に一物あり、鮮白辨ぜず、その鷹、翻を竦して昇り、轟として飛電の若し。須臾にして羽墮つること、雪の如く、血下ること、雨の如し。良久しうして、大鳥あり、地に墜つ。その兩翅廣さ十餘里、喙邊に黃あり。衆、能く知るなし。時に博物の君子あり、曰く、これ大鵬の雛なり」とある。

【題義】 獨漉篇は、魏晉間の樂府題で、拂舞歌五曲中の一である。その詩は、すべて四句一解であるが、一解宛に意が切れて仕舞つて、前後連續して居ない。これは、當時の流行歌を集めて一つにし、面白い手をつけて歌つたもので、重んずるところは、その音律に在るので、意味などは、どうでも善いのである。唐の時代に一つの音譜に文字を宛てはめる爲に、互に關係もなき若干首の七絶を集め、その意味が少しも、まとまらないのがあるが、矢張、これと同じ事情に本づいたのである。さて獨漉篇の原詞といふのは、

獨漉獨漉。水深泥濁。泥濁尚可。水深殺我。嚙嚙雙雁。遊戲田畔。我欲射雁。念子孤散。翩
 翩浮萍。得風搖輕。我心何合。與之同井。空牀低幃。誰知無人。夜衣錦繡。誰別僞真。刀鳴
 削中。倚牀無施。父冤不報。欲活何爲。猛虎斑斑。遊戲山間。虎欲齧人。不避豪貴。
 といふのである。李白の此作も、原詩の意義に依傍し、その四句一解ごとに翻案し、原詩よりも一層
 進んだ意象を顯はし、兎に角、前後に各關係があつて、意義が、いくらか、まとまるやうにしたの
 である。換言すれば、原詩を改竄し、おのが新意匠を加へて潤色した處に、その巧思と才筆とを窺ひ
 知るべきであらうと思ふ。さて、獨漉とは、何を意味するかといふに、王琦の輯註に「劉履曰く、獨
 漉、疑ふらくは地名と。琦按ずるに、上谷郡涿州に地あり、獨鹿と名づく、一名濁鹿なるもの、是れな
 り。又小網の名、罽罽、荀子に獨鹿に作る、成相の辭に曰く、恐爲子胥、身離凶、進諫不聽、劉
 而獨鹿、棄之江」と。楊倞註、國語に曰く、鳥獸は成り、水蟲は孕む、水虞、ここに于て、罽罽を置
 くを禁ず。賈曰く、罽罽は小罽なりと。或は謂ふ、これ未だ知るべからず」とある。して見ると、獨
 漉には、地名といふ説と小網の名だといふ説とがあるのだが、又別に泥の形容だといふ説もあつて、
 李白の此詩では、その意味に用ひて居る。

【詩意】獨漉たる水中の泥、水が濁れば月が映らない。月が映らずして見えない位の事は、また構は
 ないが、もし深くなると、それこそ大變で、行人は忽ち水中に没して死んで仕舞ふから、用心せねば

ならない。越の鳥は、南方の越から来たのであるし、胡の鷹は、北方の胡國から態態ここに渡つて來
 たのである。そこで、我が弓を挽いて、天に向つて之を射落さうとすれば、随分射落せるけれども、
 越鳥胡鷹の心持に成つたら、如何に悲しいことであらうか。中途にして歸路を失ふのは、まことに氣
 の毒であるから、これを射ずに仕舞つた。木の葉が枝から落つれば、飄零して、風のまにまに飛んで
 行く。遠地に客たるものの心に頼母しげな事の無いのは、恰も落葉が樹に分れて飄零するやうなもの
 であらう。薄物の戸ばりが廣がつたり巻かれたりするのを見れば、どうやら中に人が居るやうである。
 月が隈なくなつて、羅幃の内へも差し込む。しかし、月は内を窺はうといふ心があつて、かくの如く
 する譯ではない。雄劍は壁に掛けてあつて、時時、龍の吟するが如き聲を發する。劍は、壁に掛けて
 あつては、何の役にも立たず、それが不平なのである。抑も、劍は犀象の如き物すら斷ち切るのであ
 るが、かくの如く、壁に掛けて置くだけでは、段段に錆が付き、昔が生える様になつて、刀の效用を全
 うせず、たとひ、國恥があつても、これを雪ぐことが出來ず、雄劍の雄劍たる所以の名を成すことも出來
 ず、人として大丈夫の名を全うすることの出來ないのも、丁度これと同じである。むかし、楚の文王
 が雲夢の大澤に狩を爲された時、神鷹といふ鷹を連れて往かれたが、その神鷹は、尋常の鷹などが空
 中を飛ぶのは少しも顧みない、さうして、大鵬が飛んで來たら、一撃を試みやうとして、九天の上に
 飛び上つたといふことで、彼の志ざすところは、もとより大きく、區區たる鳥の上に在らず、そして、

大丈夫の志業は、恰も之と同じである。

【餘論】蘇軾は、羅韓舒卷の四語を稱して「殊に及ぶべからず」といひ、蕭士贇は「この詩、比興の意、謂へらく、士の世に用ひらるるは、當に國の爲に恥を雪ぎ、大功を立て、以て名を成すべく、猶ほ神鷹の凡鳥を顧みずして、但だ九天の鵬を撃つがごときなり」といひ、王琦は「この詩、古辭に依約す、當に六解に分つべく、解ごとに各一意、峰斷え、雲連り、離るるに似、合するに似たり。もし強ひて一意として釋し去らば、更に是處なし」といひ、乾隆御批には「全く古詞より奪換して出で、その妙、これに過ぐ。世人、但だ蘭亭を學んで、凡骨を換へむと欲するも金丹なし。白の樂府の如きは、眞に乃ち神移り、意授け、變化心に從ふ、故に便ち青は藍より出で、氷は水より寒し」とある。

登高邱而望遠海

高邱に登りて遠海を望む

登高邱。望遠海。

高邱に登つて、遠海を望めば、

六鼇骨已霜。三山流安在。

六鼇、骨すでに霜、三山、流、安くにか在る。

扶桑半摧折。白日沈光彩。

扶桑、半ば摧折し、白日、光彩を沈む。

銀臺金闕如夢中。

銀臺金闕、夢中の如く、

秦皇漢武空相待。

秦皇、漢武、空しく相待つ。

精衛費木石。鼃鼃無所憑。

精衛は木石を費し、鼃鼃は憑るところなし。

君不見驪山茂陵盡灰滅。

君見ずや、驪山茂陵、盡く灰滅。

牧羊之子來攀登。

牧羊の子、來つて攀登す。

盜賊劫寶玉。精靈竟何能。

盜賊、寶玉を劫し、精靈、竟に何をか能くせむ。

窮兵黷武今如此。

兵を窮め、武を黷す、今、かくの如し。

鼎湖飛龍安可乘。

鼎湖の飛龍、安んぞ乗すべけむや。

【字解】一 六鼇 列子に「五山、一に岱輿、二に員嶠、三に方壺、四に瀛洲、五に蓬萊。その根、連著するところなく、潮波に隨つて上下す。帝、巨鼃十五に命じ、首を擧げて之を戴かしむ。五山、はじめて、峙つて動かす。龍伯の國に大人あり、足を擧ぐるに數歩に盈たすして、五山の所に暨び、一たび釣つて、六鼃を連ぬ。ここに於て、岱輿、員嶠の二山は、北極に流れて大海に汎び、仙聖の播遷するもの、巨億萬計」とある。すると、流れて仕舞つたのは、二山であつて、ここに三山流安在といつたのは、原文に合はぬ様である。二 扶桑 山海經に「大荒の中、陽谷の上に扶桑あり、十日の浴するところ、九日は下枝に居り、一日は上枝に居り、皆鳥を戴く」とあり、淮南子に「日、暘谷に出て、咸池に浴し、扶桑を拂ふ、これを晨明といふ。扶桑に登つて、爰に將に大に行かむとす、これを朧明といふ」とある。三 銀臺金闕 史記に「この三神山は、その傳、渤海中に在り、人を去ること遠からず、且さに至らむとすれば、船、風に引き去らるるを患ふ。蓋し、嘗て至るものあり、仙人及び不死の藥、皆在り。その物、禽獸盡く白くして、黄金銀を宮闕となし、未だ至らず、これを望めば雲の如し、到るに及びて、三神山、反つて水の下に居り、これに臨めば、風輒ち引き去り、終に能く至るなし」とある。四 精衛 博物志に「鳥あり、鳥の首の如く、白喙赤足、名を精衛といふ。むかし、赤帝の女、名は女嫫、東海に遊んで溺死す。その神、化して精衛となり、常に西山の木石を取つて東海を填む」とある。五

鼉 江淹の恨賦に「秦皇按劍、諸侯西馳、削平天下、同文共規、方駕鼉鼉以爲梁、巡海右以送日」とある。【六】驪山始皇を葬りし處。【七】茂陵 漢の武帝の陵の名。【八】盜賊劫寶玉 晉書に「漢の天子即位、一年にして陵を爲る。天下の供賦三分の一は宗廟に供し、一は賓客に供し、一は山陵に充つ。漢の武帝、享年久長、葬る比にして、茂陵、復た物を容れず、その樹、皆すでに拱すべし。赤眉、陵中の物を取るも、半を減する能はず、今に猶ほ朽帛委積して、金玉未だ盡さざるなり」と記してある。【九】鼎湖飛龍 抱朴子に「黃帝、荆山の下、鼎湖の中に於て、飛九丹成り、乃ち龍に乗じて天に登るなり」とある。

【題義】王琦の説に「この題、舊と傳聞なし。郭茂倩の樂府詩集には、この詩を相和歌中、魏の文帝登山而遠望一篇の後に編す、疑ふらくは、太白、これに擬せしならむ、然れども、文意却つて類せず」とあるが、或は古しへ其詩があつて、李白が之に擬したのであるが、その後、皆亡びて、李白の作ばかり残つて居るのかも知れぬ。それから、その大意は、蕭士贇が「太白の此詩、秦王漢武、海を巡り、仙を求むるの事を引いて、以て諷諫を通ずるに過ぎざるのみ」といつて居る通りで、前に古風中に數ば見えたものと格別異なつても居らぬが、唯だ文字上に於ては、餘程、變化の跡を認める。

【詩意】高邱に登り、眼を放つて遠海を望み見る。むかし、海中には、蓬萊、方丈、瀛洲といふ神山があつて、六つの大なる鼉が其頭上に之を戴いて居たといふが、今日ではその六鼉も白骨となり、そして、三神山は、波に漂はされて、何處かへ流されて仕舞つた。それから、東方には扶桑といふ木があつて、その木の上から、日輪が上ると傳へられて居るが、その扶桑も、半分は摧け折れて、白日も光彩を沈め、むかしよりは、餘程世間が暗くなつた。殊に、三神山には、銀臺金闕が簇つて居ると

いふが、全く夢中の話に同じく、斷じて信を措くことは出来ない。然るに、秦の始皇だの、漢の武帝だのといふ人達は、絶代英主の天資あるにも拘らず、これを信じ、わざわざ方士を遣し、神仙を求めさせたが、空しく待つて居たのみで、神仙に遇ふことは出来なかつた。抑も海は極めて廣く、且つ深いもので、精衛が、いくら木石を以て填めやうとしても、到底埋まらず、又この海を渡らむが爲に、秦の始皇は鼉鼉をして橋を架けさせやうとしたが、これも據り處なくて、無効に終つた。それから、秦皇漢武は、最後に、どうしたかといふと、始皇は驪山に葬られ、武帝は茂陵に埋められ、その當時は、随分立派な山陵であつたが、年月を経るに随つて、灰の如く湮滅して仕舞ひ、今では羊飼ひの童子が其頂に攀ち登り、お負けに、盜賊が這入つて、墓を掘りかへし、中に埋めてあつた寶玉などを持ち出すといふ始末、さしも英雄を誇りし秦皇漢武も、死後の精靈は、どこへ往つて仕舞つたか、全く役に立たぬので、神仙などは、決して望むべきことではない。顧みれば、始皇といひ、武帝といひ、ともに兵を窮め、武を驕し、その雄略に矜つた人君であるが、かの黃帝が鼎を荆山に鑄つて、鼎成ると同時に、龍に乗じて昇天したといふ様なことは、この人達には、全く出来ぬことである。

【餘論】蕭士贇は「ここに言ふは、二君、兵を窮め、武を驕すこと、かくの如し。黃帝の上仙の若きは、安んぞ得べけむや。唐の明皇、亦た神仙を好み、邊功を喜ぶもの、この詩、其れ諷するところあるか」といひ、唐汝詢は「これ方士の益なきを譏るなり」といつた。

陽春歌

陽春歌

長安白日照春空。長安の白日、春空を照らす。

綠楊結煙垂裊風。綠楊、煙を結んで、裊風に垂る。

披香殿前花始紅。披香殿前、花、はじめて紅に。

流芳發色繡戶中。流芳色を發す繡戶の中。

繡戶中相經過。繡戶の中、相經過。

飛燕皇后輕身舞。飛燕皇后、輕身の舞。

紫宮夫人絕世歌。紫宮夫人、絶世の歌。

聖君三萬六千日。聖君、三萬六千日。

歲歲年年奈樂何。歲歲年年、樂を奈何。

未央宮、一名紫微宮、然れども、未央を總稱となし、紫宮は其中の別名」とある。【四】絶世歌 漢書に「孝武の李夫人、本と倡を以て進む。はじめ、夫人の兄延年、性、音を知り、歌舞を善くし、武帝、これを愛す。延年、上に侍し、起つて舞ひ、歌つて曰く、北方有佳人。絶世而獨立。一顧傾三人城。再顧傾三人國。寧不知傾城與傾國。佳人難再得。」上嘆息して曰く、世、豈に此人あらむや、と。平陽公主、因つて、延年に女弟あるを言ふ。上、乃ち召して之を見る、實に妙麗善舞、これに由つて幸を得たり」とある。

【題義】宋の吳邁遠は陽春歌を作り、梁の沈約は陽春曲を作つたので、この詩は、これ等に擬したのであらうといふこと。そして、内容は、宮中に於ける春日行樂の狀を敘したのである。

【詩意】長安の春は、いとも長閑けく、照照たる白日は、晴れた空に輝き、綠に煙る楊柳は、そよ吹く東風に垂れて居る。宮掖の内に於ても、披香殿前の花は、はじめて紅に綻び、流るる如き日影を受け、花の色は愈よ鮮に、繡戶に映じて居る。その繡戶の中には、幾多の宮女が往來引きも切らず、やがて、奥御殿に於ては、趙飛燕にも負けない容貌の皇后が、いとも輕げに掌上の舞を爲し、未央宮中第一の稱ある李夫人のやうな妃嬪が、歌を唱へると、まことに世に類もない位。君王の御喜びは、もとより申すまでもない。君王は、太平の日に際し、百年三萬六千日、日ごと日ごと、かくの如く、歡樂を極められるので、年は頻りに移り變れども、その樂は、少しも衰へず、まことに目出たいことの限りである。

【餘論】この詩は、格別の者でもないが、中に繡戶中、相經過といふ三字句を挿入して、故らに、平整を避けた處は、一寸巧妙で、後人の長しへに師奉するところである。

楊叛兒

楊叛兒

君歌楊叛兒。妾勸新豐酒。

君は歌ふ楊叛兒、妾は勸む新豐の酒。

何許最關人。烏啼白門柳。

何許か最も人に關する、烏は啼く白門の柳。

烏啼隱楊花。君醉留妾家。

烏は啼いて楊花に隠れ、君は酔うて妾が家に留まる。

博山爐中沈香火。

博山爐中沈香の火。

雙煙一氣凌紫霞。

雙煙一氣、紫霞を凌ぐ。

【字解】一 新豐 西京雜記に「太上皇、長安に徙つて、深宮に居り、悽愴樂まず。高祖、竊に左右に因つて、其故を問ふ。以へらく、平生の好むところ、皆屠販の少年、酤酒賣餅、鬪雞蹴鞠、これを以て權を爲す。今皆これなし。故を以て樂まず」と。高祖、乃ち新豐を作り、諸の故人を移して之を實たす、太上皇、乃ち悦ぶ」とある。高祖の故郷は豐であるから、新に作つた邑を新豐と名づけたのである。そして、新豐は、むかしから游侠の風の盛な處として知られて居る。二 白門 宋書に「宣陽門、民間、これを白門といふ」とあつて、胡三省の通鑑註に「白門は建康城の西門なり、西方色白し、故に以て稱となす」とある。三 博山爐 呂大臨の考古圖に「按するに、漢朝の故事、諸王、閣を出づれば、博山香爐を賜ふ。晉東宮舊事に曰く、太子の服用には博山香爐あり、一に爐象といふ。海中博山の下、盤あり、湯を貯へて氣を潤し、香を蒸さしめ、以て海の回環に象る。この器、世、多く之あり、形製大小、一ならず」とある。四 沈香 南州異物志に「沈水香は日南に出づ。取らむと欲すれば、當に先づ樹を研壞し、地に著けて、久しきを積むべし。外、自ら朽爛、その心、至つて堅きもの、水に置けば沈む、名づけて沈香といふ」とある。つまり、香木の髓で作つた香料。五 凌紫霞 仙人をも凌ぐといふこと。

【題義】 通典に「楊叛兒は、本と童謠なり。齊の隆昌の時、女巫の子を楊旻といふ。少にして、母に隨つて内に入り、長じて太后に寵せらる。童謠に云ふ、楊婆兒、共戲來、と。而して歌語、訛して、

婆を轉じて叛と爲す」とある。それから、楊叛兒の古辭は、

暫出白門前。楊柳可藏鳥。歡作沈水香。儂作博山爐。

といふので、主として、閨閣の情緒を述べたのである。李白の作は、この古辭に依傍し、そして、それを解釋的に鋪張して、その意義を明白にしたので、その新意を出した處は、大に觀るべきものである。

【詩意】 君よ、楊叛兒の曲を歌ひ玉へ、妾は、新豐の産に比すべき美酒を勸めて、これを勞ふであらう。かの烏が白門に傍うて列ぶ柳の上に啼くのは、どれだけ人の心を動かすか。その烏が、楊花飛びかふ中で、柳の茂みに隠るる如く、君にして酔つたならば、妾の家に留まり玉へ。ここには、人目の關もなく、おもふ存分、互に慰め合ふことも出来るであらう。今しも博山の香爐の中には、沈香といふ名香を焚いて居るので、それより、緩やかに立ち昇る二すぢの煙は、同じく一氣より成り、それが纏れ合つて、微かに棚引きわたるが、さながら、紫霞を凌ぐが如く、つまり、君と妾と相得たる樂は、仙人となつて登仙するにも勝つて居る。

【餘論】 楊升菴は、この詩を評して「古しへの楊叛曲、わづかに二十字のみ、太白、これを衍して、四十字と爲す、しかも、樂府の妙思益す顯はれ、隱語益す彰、その筆力、烏獲が龍文の鼎を扛ぐるに似、その精光、光弼が子儀の軍を領するに似たり。書に曰く、葛伯、餉に仇すと。孟子、これを解

するに非ざれば、後人、仇餉、何の語たるかを知らず。沈水博山の句、太白、雙煙一氣を以て之を解するに非ざれば、樂府の妙、亦た隠なり」といつて居る。

雙燕離

雙燕離

雙燕復雙燕。雙飛令人羨。

雙燕復た雙燕、雙飛、人をして羨ましむ。

玉樓珠閣不獨棲。

玉樓珠閣、獨り棲ます。

金窓繡戶長相見。

金窓繡戶、長しへに相見る。

柏梁失火去。因入吳王宮。

柏梁、火を失して去り、因つて、吳王の宮に入る。

吳宮又焚蕩。雛盡巢亦空。

吳宮又焚蕩、雛盡きて巢も亦た空し。

憔悴一身在。孀雌憶故雄。

憔悴、一身在り、孀雌、故雄を憶ふ。

雙飛難再得。傷我寸心中。

雙飛再び得難し、我が寸心の中を傷ましむ。

【字解】

【一】柏梁失火 三輔黃圖に「柏梁臺は、武帝の元鼎二年春、この臺を起す。臺は長安城中北闕の内に在り」といひ、漢武内傳に「太初元年十一月己酉、天火、柏梁臺を燒く」とある。【二】吳宮又焚蕩 太平御覽に引ける吳地記に「春申君、吳宮に都し巧飾を加ふ。春申君死す、吏、燕窟を照らして火を失し、遂に焚く」とある。【三】孀雌 寡婦を孀といふ。

【題義】 琴曲に雙燕離といふがあつて、李白の此の作は、之に擬して、雙燕分飛の情緒を其儘詠出したのである。

【詩意】 燕が處得がほに雙雙相並んで飛んで居る様は、人をして羨ましむるばかりである。雙燕は、玉樓珠閣の中に栖み、それも獨りではなく、必ず一つがひで、金窓繡戶の間にも飛び入つて、毫も相離れずして相見て居る。ところが、圖らずも一つの禍が起り、柏梁臺が火を失して燒失した爲に、今まで臺上の金窓繡戶の間に雙飛して居た燕子は、そこに留まつて居ることが出來ず、都を去つて南方なる吳王の宮殿へ往つた。すると、その吳宮も、亦た火事で燒けて仕舞ひ、雛も死んだから、その巢も空しくなり、雙燕も、互に離れて仕舞ひ、唯だ憔悴せる一身を餘し、雌の燕は、孀となり、もと夫として居た雄を憶ふといふことに成つた。ここに至つて、曩きに人をして羨ましめたものが、今は翻つて、人をして悲ましめるやうになり、再び雙飛しやうと思つても、到底むづかしく、徒に我が寸心を傷ましめるのみである。

【餘論】 蕭士贇の説に「この篇、それ太白自ら嘆するの作か。首四句は、是れその金鑾に待詔して幸を得る時に喩ふるなり。柏梁、火を失して去るは、讒に遭うて放還せらるる時に喩ふるなり。中三句は、永王璘に従ひ、璘敗れ、累を以て責に遭ふの時に喩ふるなり。末四句は、是れ白が嗟嘆の語、放逐の餘、君を思へども再び見ゆるを得ざるを謂ふ。安んぞ、これが爲に傷心せざるを得むや。吁、亦

た哀むべきのみ」といつたが、如何にも、さうであらうと思はれるので、はじめ柏梁に栖み、後に吳宮に入つて離れ物になつたといふのは、即ち李白が初め長安に居り、後に江南に至つて永王璣の幕に入り、次いで夜郎に長謫されたことを暗に指したものに相違ない。なほ乾隆御批には「途窮まつて慟哭す。豈に身世の感に勝へむや。五憶四愁、この酸楚を同じうす」とある。

山人勸酒

山人酒を勸む

蒼蒼雲松落落綺皓

蒼蒼たる雲松、落落たる綺皓。

春風爾來爲阿誰

春風、爾、來つて阿誰の爲にする。

蝴蝶忽然滿芳草

蝴蝶忽然として芳草に満つ。

秀眉霜雪顏桃花

秀眉は霜雪、顔は桃花。

骨青髓綠長美好

骨青く髓綠にして、長しへに美好。

稱是秦時避世人

稱す是れ秦時世を避くるの人。

勸酒相歡不知老

酒を勸め、相歡んで、老を知らず。

各守麋鹿志恥隨龍虎爭

各麋鹿の志を守り、龍虎の争に隨ふを恥づ。

歎起佐太子漢王乃復驚

歎ち起つて太子を佐け、漢王、乃ち復た驚く。

顧謂戚夫人彼翁羽翼成

顧みて戚夫人に謂ふ、彼の翁羽翼成れりと。

歸來商山下泛若雲無情

歸り來る商山下、泛として雲の情なきが若し。

舉觴酌巢由洗耳何獨清

觴を舉げて、巢由に酌す、耳を洗ふ、何ぞ獨り清き。

浩歌望嵩嶽意氣還相傾

浩歌して嵩嶽を望めば、意氣還た相傾く。

【字解】【一】綺皓 四皓の中の一人、綺里季を指して、その他の者を併せて代表させたのである。【二】麋鹿志 麋鹿と同じき野性。

【三】龍虎争 秦末より漢初に互れる争亂を指す。【四】歎 忽ち。【五】漢王乃復驚 題義の項を見よ。【六】商山 通典に「商州

上洛縣に商山あり、亦た地肺山と名づけ、亦た楚山と名づく、四皓の隱るるところ」とあり、通鑑地理通釋に「商山は商州商洛縣南一

里に在り」と記してある。【七】巢由 巢父と許由、逸士傳に「巢父は堯時の隱人、年老い、樹を以て巢となして、その上に寝ぬ。故

に人號して巢父と爲す。堯の許由に讓るや、由、以て巢父に告ぐ。巢父曰く、汝、何ぞ汝の形を隱し、汝の光を藏せざる、吾が友に非

ざるなり」と。乃ち其臂を擧つて之を下す。許由、悵然として自得せず、乃ち清冷の水に遇つて、その耳を洗ひ、その目を拭つて曰く、

【題義】王琦の解に「この題、始まるるところを詳にせず、而して、樂府詩集、太白の是作を編して琴曲歌詞中に入る」とある。要するに、古い詩があつたかも知れぬが、早く亡びて仕舞つたのであら

う。そして、李白の此詩は、力を極めて、商山四皓の事を敍し、并せて、おのが感懐を寄せたのである。そこで、下に四皓の事實を略記して置く。史記に「上（漢の高祖）太子を廢して、戚夫人の子趙王如意を立てむと欲す。呂后恐る。留侯（張良）爲に畫計して曰く、上の致す能はざるもの、天下に四人あり、年老いたり、皆以爲へらく、上、人を慢侮すと、故に逃れて山中に匿れ、義として漢の臣と爲らず、然れども、上、この四人を高しとす。今、誠に能く、金玉璧帛を愛するなく、太子をして書を爲らしめ、卑辭安車、因つて、辯士をして固く請はしむれば、宜しく來るべし。來らば、以て客と爲し、時時從へて入朝し、上をして之を見せしむれば、必ず異んで之を問はむ。上、この四人の賢なるを知らば一助なり、と。ここに于て、呂后、呂澤に命じ、人をして、太子の書を奉じ、辭を卑うし、禮を厚うして、この四人を迎へしむ。十二年、上、疾益す甚しく、瘧ゆるや、太子を易へむと欲す。燕して置酒するに及び、太子侍し、四人、太子に従ふ、年皆八十有餘、鬚眉皓白、衣冠甚だ偉なり。上、これを怪み、問うて曰く、彼、何する者ぞ、と。四人前んで對へ、各、姓名を言うて曰く、東園公、角里先生、綺里季、夏黃公、と。上大に驚いて曰く、吾、公を求むること數歲、公避けて我を逃る、今公何ぞ自ら吾が兒に従つて遊ぶや。四人皆曰く、陛下、士を輕んじて、善く罵る。臣等、義として辱を受けず、故に恐れて亡げ匿る。竊に聞く、太子人と爲り仁孝恭敬、士を愛し、天下頸を延ばし、太子の爲に死せむことを欲せざるはなしと。故に臣等來るのみ。上曰く、公を煩はす、幸に卒に太

子を調護せよ、と。四人壽を爲し、すでに畢つて、趨り去る。上、これを目送し、戚夫人を召し、四人を指示して曰く、我、これを易へむと欲す、かの四人、これを輔く、羽翼すでに成る、動かし難し、呂后は眞に而の主、と。戚夫人泣く。上曰く、我が爲に楚舞せよ、我、若が爲に楚歌せむと。歌うて曰く、鴻鵠高飛、一舉千里、羽翮已就、橫絕四海、當可奈何、雖有矰繳、尙安所施と。歌數闋、戚夫人、嘔啼流涕す。上、起つて去り、酒を罷めて、竟に太子を易へざるものは、留侯本と此四人を抜くの力なり。なほ路史には、園公、綺里季、夏黃公、角里先生は、代の謂はゆる四皓なるもの、秦の苛政に遭ひ、地を商の藍田山中に避く。漢高、これを招く、以へらく、皇帝善く士を慢る、と。至らず。帝が戚姫の故の爲に、太子を易へむと欲するに迫り、高后、留侯の計を以て之を致す。太子、以て定まるは、四老人の力なり、去つて復た見ゆるなし、後、ともに安陵に葬る」とある。

【詩意】蒼蒼として雲に入る松の樹の聳え立つ其下に、落落たる商山の四皓が憩うて居る。四皓等は、世外の逸民であるから、その樂とするところも、普通の人と異にして、はるかに高尚なものであらう。春風は誰の爲に吹いて來るともなく、世は、いつしか春になると、自然に蝴蝶が芳草に戯れる。四皓とても、矢張人であるから、これを見ては、定めて面白く感ずるであらう。試に四皓の狀貌を見れば、秀でたる眉は、霜雪を積んで白く、顔は桃の花の如く紅に且つ鮮であるし、金丹を鍊つて服して居る爲に、骨が青く、髓が緑で、顔色は、何時までも變ることなく、長しへに美好である。

四皓等は、秦の始皇の時、暴政を避けて、この山に逃れたといはれて居るが、この春景色を見ては、矢張樂しいと見え、互に酒を勧めて相歡び、老の至るをも知らざるが如くである。四皓等は、麋鹿の野性を守つて、人間界に遠ざかり、秦の末から項羽の亡ぶるまで、龍虎の争が絶えなかつたが、その中に立ち交るを愧じて、長く山中に暮らして居たのである。ところが、一朝、時運の到来するや、忽然として起ち、再び世の中へ出て来て、漢の太子を助けた。その時、高祖は、太子を代へやうと思つて居たが、最早仕方が無いといつて愈よ斷念し、寵姬の戚夫人を顧み、かういふ老翁達が出て来て、太子の羽翼となつて、これを輔佐するといふことであつて見れば、汝の生んだ趙王如意を立てて太子とすることは到底出来ぬと仰せられ、遂に太子を廢することを斷念せられた。かくて、國本幸に動かす、漢は四百年の帝祚を保つことが出来た。そこで、初めて安心したといふので、四皓は、元の商山に歸り、さながら、泛然たる雲の無心なるが如く、そんな事は尤で知らぬ様な顔をして居た。かくて、商山に歸りし後は、古しへの隱者たる巢父・許由に向つて一杯を獻じ、これを弔ふことを禁じ得なかつたので、その心では、お前さん達は、耳を洗つたりして、偉いには相違ないが、毫も天下の事に干與せず、獨善主義を守つて居たのは、同情し兼ねると思つて居たのであらう。それから又、巢父・許由の隠れたといふ嵩山を望み、君達も、我等も、ともに世を避けた人であるが、どちらが神仙としての本分であらうかと、意氣相傾けて、浩歌したであらう。

【餘論】蒼蒼雲松、落落綺皓の二句を以て筆を起し、普通ならば、その下に、山中隱者の狀況を寫すのであるが、一轉して、春初の風景に及び、四皓とても、なほ人間を離れざる意あるを寫したのは、極めて面白い。それから、泛若三雲無情は、僅僅五字であるが、極めて含蓄がある。結末は、四皓が得意満面、意氣さながら嵩山を凌いで、巢由よりも遙に高い積りで、自負して居る意を言外に領取すべきである。蕭士贇は、この詩に關係ある事實を穿鑿して下の言を爲した。曰く「その意、謂へらく、巢由の矯激は、四皓の時に行き時に止まるに若かず。一たび出でて國本定まり、事成れば、復た商山に歸る。卷舒自在、無心の雲の若きなり。中庸の徳、其れ至れるか、何ぞ獨清を以てするを爲さむや。太白、蓋し明皇が太子瑛を廢せむと欲するが爲に感ずるところあつて、この詩を作るなり。はじめ、瑛の母、倡を以て進み、鄂光二王の母、色を以て選ばる。武惠妃の寵幸せらるるに及び、後宮、壽王を生み、愛、諸子と絶等、而して、太子二王、母、職を失せしを以て、頗る快快たり。惠妃の女婿楊洄、妃の旨を揣つて、太子の短を伺ひ、諱して醜語を爲す。惠妃、帝に訴へて、且つ泣く。帝、大に怒り、宰相を召し、議して之を廢せむとす。張九齡、諫めて、廢せられざるを得たり。俄にして、九齡罷む。李林甫、國を專にし、數ば壽王の美を稱し、以て妃の意を探る。妃、果して之を徳とす。二十五年、洄、復た瑛瑤琚を構へ、妃の兄薛鏞と異謀あり。惠妃、人をして、詭つて太子二王を召さしめて曰く、宮中に賊あり、請ふ、戒めよ、兵を以て入れと。太子、これに従ふ。妃、帝に白して曰く、太子二王、

反を謀り、甲して來ると、帝、中人をして、これを視せしむれば、言の如し。遽に宰相林甫を召して議す。答へて曰く、陛下の家事は、臣が宜しく豫るべきところに非ずと。帝、意決し、乃ち詔し、廢して庶人となし、尋いで、害に遇ふ。天下、これを冤とし、三庶人と號す。歲中に、惠妃病み、數ば庶人の祟を爲すを見る、因つて、巫を召して之を祈り、請うて改葬し、且つ行刑者を射て之を瘞めしが、訖に解けず。妃死して、祟亡ぶ、明皇の時、盧鴻、王希夷、嵩山に隱居し、李元愷、吳筠の徒、皆隱逸を以て稱せられ、或は召されて闕庭に至り、或は政事を遣問す。徒に高談濶論を耳にすれども、未だ能く四皓の一言にして、太子易へざるを得たるが如きことあらざるなり。末句に曰く、浩歌望嵩嶽。意氣還相傾と。亦た深く當時嵩嶽の隱者に満たざるか、その意、微にして婉なり。それから、王琦は、却つて之を駁し、この詩、大意、四皓を美す。暴秦の祭に當つて、能く世を避けて隱居し、漢の天下を有するに及び、一たび出でて太子を輔佐すと雖も、乃ち功成つて身退き、かつて情を爵位に繫がず、眞に以て風を巢許に希ふべし。箕山潁水は、これ二子が盤桓して耳を洗ふの地、ともに嵩山に在り、故に之を望んで慨す、生きて巢由を慕うて在るが如く、意氣以て相傾くべし。これ正に古人を尙友するの意、初めより、譏評獨清の説なし。明皇の一證、その見、左へり」といつて居るが、これは、贊成し兼ねる。そこで、乾隆御批は、公平なる判断を下し、四皓を泛詠すれば、便ち是れ無情の文。故に、註家、以て時事に感じ、盧鴻輩を刺ると爲す、見るなしと爲さず。白居易の四皓廟に

云ふ、如彼旱天雲、一雨百穀滋、澤則在天下、雲復歸希夷、蘊藉味ありといふべし。白の詩、却つて只だ五字あるのみ。曰く、泛若雲無情と。尤も深妙となす、古人毎に相本づくを知るなり」といつて居る。

于闐採花

于闐花を採る

于闐採花人。自言花相似。于闐花を採るの人、自ら言ふ、花相似たりと。

明妃一朝西入胡。明妃、一朝、西して胡に入る。

胡中美女多羞死。胡中の美女、多く羞死す。

乃知漢地多名姝。乃ち知る、漢地に名姝多く、

胡中無花可方比。胡中花の方比すべきなきを。

丹青能令醜者妍。丹青能く醜者をして妍ならしむ。

無鹽翻在深宮裏。無鹽、翻つて深宮の裏に在り。

自古妬蛾眉。胡沙埋皓齒。古しへより蛾眉を妬み、胡沙、皓齒を埋む。

【字解】【一】于闐。漢書西域傳に「于闐國王、西域に治す、長安を去ること九千六百七十里。于闐の西、水、皆西流して西海に注ぐ」とある。今の中央亞細亞の一邦である。【二】明妃。一朝西入胡。明妃は即ち昭君。漢書の匈奴傳に「竟寧元年、呼韓邪單于入朝す、自ら言ふ、願はくは漢氏に婿として、以て自ら親しまむ」と。元帝、後宮良家の于王嬙、字は昭君を以て單于に賜ふ。單于懼喜、乃ち上書して、願はくは塞を保たむといふ」とある。【三】方比。くらべる。【四】丹青能令醜者妍。西京雜記に「杜陵の畫工毛延壽、善く人を畫き、醜好老少、必ず眞を得たり。元帝、宮人頗る多し。かつて、畫工をして之を圖せしめ、呼ばむと欲するものあれば、圖を按じて、以て召す。故に、宮人多く賂を畫工に行ふ。昭君、姿容甚だ麗、苟くも求むるところなし。工、遂に其形狀を毀す。後、匈奴、美女を求む。帝、昭君を以て行に充つ。すでに召し見て之を悦ぶ、しかも、名字すでに去る、遂に復た留めず。帝、怒つて毛延壽を殺す」とある。【五】無鹽。列女傳に「鍾離春は、齊の無鹽邑の女、人と爲り極めて醜、皮膚漆の若く、行年四十、嫁せむとするも售れず。齊の宣王、漸臺に燕す。無鹽、これに詣る。召し見らるるや、爲に四殆を陳す。王、立どころに漸臺を析き、無鹽を拜して后となす」とある。

【題義】于闐採花は、六朝の陳隋頃に出來た樂府で、その本辭は、

山川雖異所。草木尙同春。亦如溱洧地。自有採花人。

といふのである。この時代には、すでに外國の音譜を采つて、中國の歌樂に上せることが流行したので、この于闐採花も、その名の示す通り、于闐國の音譜を采り、その文句だけは、その頃の名人が作ったのである。于闐は外國で、即ち胡地であるから、李白は、それに因みて、王昭君の事を詠じたのであるが、無論、時事を諷したので、蕭士贇は題下に註して、「太白の此篇は、明妃の事を借りて、以て興す。世の君子、明君に遭はず、賢不肖易置せらる。明皇の張九齡を思ふが如き、曲江に遭祭すと

雖も、竟に何の補かあらむ。この詩、規意皆國風中より來る、讀者忽にする母れ」といつて居る。

【詩意】于闐といふ外國で花を採る女は、自分の顔色も、その花に似て居ると思つて居るが、彼女は中國の花、又は中國の婦女の美を知らぬからである。むかし、王昭君が一朝匈奴に嫁して、胡地に入つてからは、漢地には、なかなか名姝多く、とても胡中の花では比ぶべきものが無いといふことが、初めて分つて、胡中の美女は、多く羞死したといふことである。さて王昭君のやうな美人が、どうして胡地に入つたかといふと、はじめ、漢宮に居たとき、畫工の毛延壽に賂賂を使はなかつた爲に、折角の容貌を悪しざまに畫かれ、君は左程の美人でも無いと思召して、愈よ之を胡地に遣さるることに成つた。これと反對に、醜い者でも、賂賂を多分に使へば、無鹽の如きものでも、深宮の中に居て君側に侍することに成つた。謂はゆる蛾眉は、宮に入つて妬まれるといふのは、古しへの諺の通りで、王昭君の如きは、美しき顔色を有しながら、明眸皓齒を胡沙の間に埋めて、遂に歸らぬ客と成つた。人間の事は、大抵かくの如く、實に慨嘆に堪へぬ次第である。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇は、事を借り、喩を引き、以て時君昏聩、聽を人に借りて、賢不肖易置するものを刺る。これを讀めば、人をして感嘆せしむ」とある。それから、胡中無花可方比の下、丹青の二句は、王昭君の方からでなく、醜者の方から言を立てて、昭君に反襯せしめたので、王琦は、これを激賞して「昭君の事、本と是れ畫工その形を醜圖し、以て召見を得ざるを致す。太白

は、丹青能令醜者妍、無鹽翻在深宮裏、といふ、熟事新に化し、精采一變、謂はゆる詩に聖なるものなり」といつた。なほ乾隆御批には「沈淪不遇の士、明妃の如きもの、古しへより乏しからず。林甫の國に當りて、野に遺賢なしと云ふが若き、賢不肖の易置するもの衆し。即ち白の讒を張洎に受くる、謂はゆる宮に入つて妬まるる、固より其れ宜なり。結語、峭、甚し、嘆絶と爲すべし」といつた。

鞠歌行

鞠歌行

玉不自言如桃李。

玉は自ら言はず、桃李の如し。

魚目笑之卞和恥。

魚目、これを笑うて、卞和恥づ。

楚國青蠅何太多。

楚國の青蠅、何ぞ太多き。

連城白壁遭讒毀。

連城の白壁、讒毀に遭ふ。

荆山長號泣血人。

荆山長く泣血の人を號ばしめ、

忠臣死爲刖足鬼。

忠臣死せば刖足の鬼とならむ。

聽曲知寤戚。夷吾因小妻。

曲を聽いては寤戚を知り、夷吾は小妻に因る。

秦穆五羊皮。買死百里奚。

秦穆五羊の皮、死を買ふ百里奚。

洗拂青雲上。當時賤如泥。

青雲の上に洗拂す、當時賤しきこと泥の如し。

朝歌鼓刀叟。虎變磻溪中。

朝歌鼓刀の叟、虎變す磻溪の中。

一舉釣六合。遂荒營邱東。

一舉して六合を釣り、遂に營邱の東を荒つ。

平生渭水曲。誰識此老翁。

平生渭水の曲、誰か此老翁を識らむ。

奈何今之人。雙目送飛鴻。

奈何今の人、雙目飛鴻を送る。

【字解】【一】桃李 史記に「桃李言はず、下自ら蹊を成す」とある。【二】魚目卞和 皆前に見ゆ。【三】連城 趙の孝文王が卞和の璧を得たとき、秦の昭王は十五城を以て交換したいと申込んだ。【四】寤戚 列女傳に「妾は齊相管仲の妾なり。寤戚、桓公に見えむと欲するも、道、從るなし、乃ち人の僕となり、車を將て、齊の東門の外に宿す。桓公、因つて出づ。寤戚、牛角を撃つて、商歌甚だ悲し。桓公、これを異み、管仲をして之を迎へしむ。寤戚、稱して曰く、浩浩乎たり、白水と。管仲、謂ふところを知らず、朝せざる。五日にして憂色あり。その妾情、進んで曰く、古しへ白水の詩あり、詩に云はすや、浩浩白水、儼儼之魚、君來召我、我將安居、國家未定、從我焉如、と。これ寤戚が國家に仕ふるを得むと欲するなり、と。管仲大に悦び、以て桓公に報す。桓公、乃ち官府を修し、齋戒すること五日にして寤子を見、因つて以て佐となし、齊國以て治まる」とある。【五】夷吾 管仲の字。【六】百里奚 呂氏春秋に「百里奚の未だ時に遇はざるや、號を亡げて虞に虜たり、牛を秦に飯し、鬻ぐに五羊の皮を以てす。公孫枝、得て、これを穆公に獻す。穆公、これを用ふ、謀る、當らざるなく、擧ぐる、必ず功あり」とある。【七】朝歌鼓刀叟 太公望の事、前に見ゆ。

【一】遂荒營邱東。詩經に遂荒大東とあつて、毛傳に「荒は有なり」とある。即ち奄有。史記に「武王、すでに商を平らげて天下に王たり、師尚父を齊の營邱に封す」とある。【二】飛鴻。史記に「衛の靈公、孔子と語る、蜚鴻を見て、仰いで之を視、色、孔子に在らず、孔子遂に行る」とある。

【題義】王琦は題下に註して、「陸機の鞠歌行の序、按ずるに、漢の宮閣に含章鞠室、靈芝鞠室あり、後漢の馬防の第宅、トして道に臨み、閣を連ね、池を鞠城に通じて、街路に彌る。鞠歌は、將に此を謂はむとするなり。又東阿王の詩に、連騎擊壤、或は蹙鞠を謂ふか。三言七言、奇實名器と雖も、知己に遇はざれば、終に重んぜられず、知己に逢ふを願ひ、以て意を託す」とある。つまり、鞠室とか、鞠城とか云ふ名の宮殿があつて、その中で歌つたから、かく名づけたといひ、又一説に、蹴鞠の時の歌であらうといひ、いづれが正しいか分らず、又その起原なども、今から詳にすることは出来ない。李白の此作は、蕭士贇が、太白の此詞、始は士の讒に遭つて廢棄せらるるを傷み、中ごろは四賢の遇合時あるを羨み、終は、重ねて、人、古人の士を識るが如くなること能はざるを嘆ずるなり。亦た此を借りて、自ら況すと云ふのみ」とある。

【詩意】桃李は物言はずして、その下自ら蹶を成すと稱せられて居るが、玉は、物言はぬことのみに桃李に似て居るので、その下に蹶を成すといふやうな効果はない。これに反して、魚目は、玉の世人に重んぜられざるを笑つても、玉自身は、決して自ら其價値あることを言はぬ。その爲に、むかし、卞和は、非常な辱を被り、まことに殘念で溜まらぬけれども、如何せむ、玉が物を言つて呉れぬから仕方がない。その時、楚國には玉を汗す青蠅の如きものばかり充滿して居たから、連城に値する貴き白璧でありながら、讒毀に遭つて、偽物だといふ嫌疑を受けた。かくて、卞和は、眞の玉であるといふ證明が立たなかつたから、兩方の足を削られ、荆山に隠れて長號し、もし其儘死んだならば、足なしの幽靈に成つたに相違ない。それから、寧戚は、齊の桓公を干さむが爲に、歌を歌つたが、何人も、その意味合を解し得ず、幸ひ其時の宰相であつた管夷吾の妾に賢明な婦人があつて、その事を詳しく管仲に告げたから、管仲も初めて之を悟り、やがて之を桓公に薦めて、遂に重く用ひられた。それから、秦の穆公は、五羊の皮を以て百里奚を贖ひ、これを重用して、五霸の一と稱せられた。當時、百里奚は、死に瀕した四人に過ぎず、一たび之を洗拂して、青雲の上に身を致さしめたが爲に、國家を治むる大經綸を實施せしめることが出来たが、若し之を洗拂するものが無かつたならば、その賤しきこと、泥土の如く、その儘死んだであらう。して見れば、寧戚といひ、百里奚といひ、上に之を知るものがあつたから、先づ善かつたのである。これと事變つて、太公望は、朝歌の市中に居り、刀を鼓して牛を屠つて居たが、一たび、碭溪の中に虎變して文王の師となり、一擧して六合を釣り上げ、天下統一の大功を奏せし後は、營邱の東なる齊國を我が有とした。太公望は、文王に遇つたから善かつたもの、然らざれば、矢張、渭水の曲に釣する一老翁に過ぎずして、何人も之を識別することは無かつた

であらう。今の人は、衛の靈公が孔子を引見した時、空飛ぶ雁を眺めて居たと同じく、とんと、賢者に意が無いから、甯戚の如き、百里奚の如き、乃至太公望の如き偉人が有つたところで、世の中に出て大功業を立てることは出来ず、まことに、慨嘆に堪へぬことである。

【餘論】蕭士贇の説は、題義の項に引いて置いたが、篇末に附記して「この詩、蓋し深く、今の人、人を知るの鑿なきを嘆す。これを卒るまで、奈何ともすべきなく、唯だ飛鴻を目送して以て興を寄するのみ、太白、才を負うて時に用ひられず、豈に亦た感あつて作るか」といつた。蕭士贇は、雙目送飛鴻を解するに、衛の靈公對孔子の故事を以てせず、管子に「桓公、位に在り、管仲、隰朋、見えて立つ。問あつて、二鴻の飛び過ぐるあり。桓公嘆じて曰く、仲父、今かの鴻鶴、時あつて南し、時あつて北す、四方遠しとするなく、至らむと欲するところにして至る、唯だ羽翼の故のみ、寡人の仲父あるは、猶ほ飛鴻の羽翼あるがごときなり」といへるを引いて、上の如く解釋したのであるが、これは斷じて切實でない。乾隆御批には「起六句、一意三折、語語奇雋、蓋し讒に遭つて放たるるの感を述べ。糞壤、幃に充ちて、申椒、芳しからず、亦た此物なり。聽曲知甯戚以下、意を古人に託し、梁甫吟の起處と同意、亦た騷中の語に本づいて化出す。目に飛鴻を送るは、衛の靈公孔子を見る事を用ふ。乃ち心賢に在らざるの意。一路平直、ここに到り、截然として止み、却つて、起勢相稱ふ、章法玩ふべし」とある。

幽澗泉

幽澗の泉

拂彼白石。彈吾素琴。

かの白石を拂ひ、吾が素琴を彈す。

幽澗愀兮流泉深。

幽澗愀として流泉深し。

善手明徽。高張清心。

善手明徽、高く張つて心を清うす。

寂歷似千古松。颺颺兮萬

寂歷として、千古の松、颺颺として、萬尋なるに似たり。

尋。

中見愁猿弔影而危處兮。

中に見る、愁猿の影を弔うて危處し、

叫秋木而長吟。

秋木に叫んで長吟するを。

客有哀時失職而聽者。

客に、時を哀み、職を失うて聽くものあり。

淚淋浪以霑襟。

淚淋浪、以て襟を霑す。

乃緝商綴羽。潺湲成音。

乃ち商を緝し、羽を綴り、潺湲音を成す。

吾但寫聲發情於妙指。

吾、但だ聲を寫し、情を妙指に發し、

殊不知此曲之古今。

殊に此曲の古今を知らず。

幽澗泉鳴深林

幽澗の泉、深林に鳴る。

【字解】一善手 名手、上手。二明徽 琴柱、樂書に「琴の樂たる、絃は、聲を合せ、以て主と爲す。徽は、律を分ち、以て臣に配す。古しへ、徽は十有三、十二月に象り、その一は間に象る。蟋蟀を用ひて、これを爲り、近代は金玉瑟瑟水晶等の寶を用ひ、以て明瑩を示す」とある。三高張 顏延年の詩に高張生三絶絃、聲急由調起とあつて、李善の註に「物理論に曰ふ、琴は高く張るを欲し、瑟は下聲を欲す」とある。四寂歷 凋疎の貌。五颯颯 風の聲。六潺湲 水の聲。

【題義】樂府詩集には、この首を以て琴曲歌辭中に入れてある。但し、この首は、琴の音色を寫すやうな心持である。

【詩意】白石を拂うて、素琴を彈する。琴の上手な人が、絃を高く張つて、これを搔き鳴らすと、初は幽澗が愀として、流泉が極めて深いやうな響をして居たが、段段進むに連れ、寂歷として、物淋しげに、千古の松が萬尋の壑に臨んで、颯颯と響くが如き聲を發する。その松の上には、倒に挂つて居る猿が物悲しき音を出して叫び、時を哀み、職を失し、物うき儘に、これを聞いて居る客があつて、覺えず、涙淋浪として、襟を霑すのである。これまでは、琴を彈くものが、商の調子で遣つて居たが、急に變じて羽の調子になると、又元の幽澗の泉のやうな潺湲たる音に立ち戻り、それで又循環して行く。畢竟するに、曲に古今の別あることを知つて居るのでも無いが、唯だ指に任かせて、かくの如き聲を寫し、これに因つて、かくの如き情を發するので、それが自然に人の心を動かし、幽澗の泉が深

林に鳴るかの如き思を以て聞かれるのであつて、琴の妙趣は、もとより限なきものである。

【餘論】蕭士贇の説に、詩の大序に、情は聲に發す、選の歸田賦に五絃を妙指に彈ず、ここに謂へらく、澗泉松風の聲、猿鳴客愁の狀、皆琴聲の中に寫すなり」とあり、鍾惺は「中に見るは、目境に非ざるなり、琴中に就いて之を見る、末後、殊不知の一語、妙に樂理に達す」といひ、乾隆御批には、「これ琴操なり、松響猿吟、凄清幽怨の音を寫し出し、曲澗泉聲、冷然として耳に在り」とある。

王昭君 二首

王昭君 二首

漢家秦地月。流影送明妃。

漢家秦地の月、影を流して、明妃を送る。

一上玉關道。天涯去不歸。

一たび玉關の道に上り、天涯、去つて歸らず。

漢月還從東海出。

漢月還た東海より出づ。

明妃西嫁無來日。

明妃、西に嫁して來る日なし。

燕支長寒雪作花。

燕支長く寒く、雪は花を作す。

蛾眉憔悴沒胡沙。

蛾眉憔悴して胡沙に沒す。

生乏黃金枉圖畫。

生きては、黄金に乏しく、枉げて圖畫せられ、

死留青塚使人嗟

死しては、青塚を留めて、人をして嗟せしむ。

【字解】(一) 秦地 中國。(二) 明妃 晉の文帝の諱昭を避けて昭君を明君といひ、文明妃といふ。(三) 玉關 玉門關、前に數ば見ゆ。(四) 燕支 元和郡縣志に「燕支山、一名は刪丹山、甘州刪丹縣の南五十里に在り、東西百餘里、南北二十里、水草茂美、祁連と同じ」とあり、楊炎の燕支山神寧濟公祠堂碑には「西北の巨鎮を燕支といふ、本と匈奴の王庭。漢武、渾邪を納れ、右地を開き、武威張掖を置く、而して、山は二郡の間を界し、連峰委會、雲蔚蒼起、積高の勢、四面千重」とある。(五) 青塚 太平寰宇記に「青塚は振武軍金河縣の西北に在り、漢の王昭君、ここに葬る。その上、草色常に青し、故に青塚といふ」とあり、一統志には「王昭君の墓は、古豊州の西六十里に在り、地に白草多く、この塚、獨り青し、故に青塚と名づく」とある。

【題義】王昭君の事は、前に數ば見えたが、その事、頗る悲愴なるに因り、後世の好題目となり、樂府の中に、王明君、昭君怨、明妃曲と題するものは、いづれも其事を歌ふを主としたのである。文選に載する石崇の王明君辭の序に「王明君は本と是れ王昭君、晉の文帝の諱に觸るるを以て之を改む。匈奴盛にして、婚を漢に請ふや、元帝、後宮良家の子昭君を以て配す。むかし、公主、烏孫に嫁するや、琵琶馬上に樂を作し、以て其道路の思を慰めしむ。その明君を送る、亦た必ず爾かりしならむ。その新曲を造る、多くは、哀怨の聲なり、故に之を紙に敍すと云爾」とある。但し、其辭は、我元漢家子といふので、格別の者ではなく、後世には、もつと面白いものが、いくらもあるので、李白の此作の如きも、即ち其一である。

【詩意】中國に於ける漢家の月は、影を流して、王昭君の胡地に行くのを送るかの如くである。王昭君は、一たび玉門關外の道に上つて、遠く天涯に向へば、もう決して歸ることはない。かくて、漢月は循環して、又ぞろ東海から出るが、王昭君は、西に嫁せば、又と歸る折はない。その行く方は、もとより塞外の胡地で、燕支山下、寒い冬は長くして、滿天の雪は花の亂るるが如く、その荒涼世界に於て、王昭君は憔悴し、やがて胡沙の中に没して仕舞つた。生前に於ては、黄金に乏しく、十分に畫工に賄賂を使へなかつた爲に、惡しざまに畫かれ、死後には、草獨り茂れる青塚を留め、千載の下、人をして嗟嘆せしめる。王昭君の身の上は、まことに、哀れに且つ傷ましいものである。

【餘論】この詩と次の五絶とを併せて、本題の二首となるのであるが、五絶の方のみが諸種の選本にも載せ、人口にも膾炙して居るが、この詩とても、さう馬鹿にしたものではなく、後に出了宋の歐陽修、王安石等の作に比して、はるかに優れて居る。それから、顧炎武は、この詩中の地理の誤れるを論じて「按ずるに、史記に言ふ、匈奴の左方王將は上谷以東に直し、右方王將は上郡以西に直す、而して、單子の庭は代雲中に直すと。漢書に言ふ、呼韓邪單子、自ら光祿塞下に留まり居らむことを請ふと。又言ふ、天子、使を遣し、單子を送つて朔方雞鹿塞の後を出で、單子竟に北して庭に歸ると。乃ち知る、漢と匈奴と往來の道は、大抵、雲中五原朔方よりす。明妃の行、亦た必ず此より出づ。故に江淹の李陵を賦する、但だ情往三上郡、心留三雁門」と云ふのみ。而して玉關は、西域と相通ず、自

らは是れ、公主、烏孫に嫁するとき、經るところ。太白酒の詩に、漢家秦地月、流影送明妃、一上玉關道、天涯去不歸、誤れり。顔氏家訓、謂へらく、文章地理、必ず須らく愜當すべし。その梁の簡文の雁門太守行を論じては、日逐康居、大宛月支と言ひ、蕭士暉の隴頭水にしては、北注黃龍、東流白馬といふ、沈存中、白樂天の長恨歌、峨眉山下少人行、を論じて謂ふ、峨眉は嘉州に在り、蜀に幸するの路に非ず、文人の病、蓋し同じきものあり」といつて居るが、これに就いては、九泉の下、李白にして知るあるも、決して、抗辯せず、必ずや稱服したことと思はれる。

昭君拂玉鞍。上馬啼紅頰。

昭君玉鞍を拂ひ、馬に上つて紅頰を啼く。

今日漢宮人。明朝胡地妾。

今日は漢宮の人、明朝は胡地の妾。

【字解】(一)玉鞍 楊齊賢の註に「漢武の時、身毒國より連環韉を獻す、皆白玉を以て之を作り、馬踏石を韉となし、白光の琉璃を鞍と爲す、鞍、暗室中に在るも、常に十餘丈を照らして、晝日の如し」とある。但し、此では單に立派な鞍といふこと。

【題義】これも同じく昭君の事を詠じたのであるが、僅僅四句で、済ました。前首の同時の作か、それとも題が同じだから、後人が此に類聚したのか、その邊の事は分らない。

【詩意】昭君が愈よ胡地に往くに就いては、白玉の鞍を拂つて、やがて馬に乗つたが、これが九重の見納めかと思へば、涙は流れて、紅の頰を傳ふばかり、顧みれば、今日までは漢宮の人であつたが、

明日からは胡人の妻となり、再び歸することも出来ないの、まことに、哀れに且つ傷ましいことである。

【餘論】蕭士贊は「この二篇は、蓋し漢の事を借り、以て、當時、公主の出でて異國に嫁するものを詠す」といつた。或は、さうかも知れぬが、かかる諷意は、暫く措いて、單に昭君を詠じたものと見ても差支はない。次に乾隆御批には「題に名篇多し、これは、只だ十字を以て之を盡す、今朝猶漢地、明旦入胡關の句に校ぶれば、詞意倍す激烈となす」とある。まことに、王昭君その人が不幸にして、遂に胡地に終つたといふ悲哀の事實は、この中に簡潔ながら遺憾なく現はれ、この上に殆んど手の付け様も無い位で、その含蓄は、司空圖の謂はゆる不著一字、盡得風流といふ趣に叶つて居る。その後、同じく王昭君を詠じたものには、白居易の君王若問妾顔色、莫道不如宮裏時といふがあつて、極めて有名であるが、本事の上に一步を進めて、巧思より意匠を加へ、しかも、なほ一唱三嘆の妙があつて、流石に唐人の手筆である。それから、宋になると王安石は、君不見咫尺長門閉、阿嬌、人生失意無南北といひ、漢恩自淺胡自深、人生樂在相知心といひ、歐陽修は、雖能殺畫工、於事竟何益、耳目所及尙如此、萬里安能制夷狄といひ、いづれも、議論を事とし、殆んど放言高論に近くして、少しも含蓄がない。これが即ち唐宋の分界である。殊に王安石的漢恩云云に至りては、范冲が高宗に奏し「臣、かつて、言語文字の間に於て、安石の心を得たり。漢恩自淺胡自深、然

らば、劉豫は是れ罪過ならず、漢恩淺くして、虜恩深きなり、今の君父の恩に負き、投拜して盜賊となるもの、皆安石の意に合す。これ謂はゆる、天下の人の心術を壊る。孟子曰く、父なく君なきは是れ禽獸なり、と。胡虜恩あるを以て、遂に父君を忘るる、禽獸に非ずして何ぞしといつた位。勿論、安石は、詩に於て新奇を求むるの極、一寸こんな事を言つたに過ぎざるべく、かくまで、推し擴げて論ずるのは、斷じて苛酷であらうが、范氏の論は、流石に其致深く、もとより、君子の言たるを失はぬものである。

中山孺子妾歌

中山孺子妾の歌

中山孺子妾特以色見珍。

中山孺子の妾、特に色を以て珍とせらる。

雖不如延年妹。

延年の妹に如かずと雖も、

亦是當時絶世人。

亦是是れ當時絶世の人。

桃李出深井。花豔驚上春。

桃李は深井に出で、花豔にして上春を驚かす。

一貴復一賤。

一貴復た一賤、

關天豈由身。

天に關す、豈に身に由らむや。

芙蓉老秋霜。團扇羞網塵。

芙蓉は秋霜に老い、團扇は網塵を羞ぶ。

戚姬髡髮入春市。

戚姬は髡髮して春市に入り、

萬古共悲辛。

萬古共に悲辛。

【字解】(一) 延年妹 李夫人を指す、前に見ゆ。(二) 深井 庭中の天井、即ち中庭、つぼ。(三) 上春 孟春。(四) 戚姬

漢書に「高祖、定陶の戚姬を得て愛幸し、趙王如意を生む。高祖崩じて、惠帝立つ。呂后、皇太后たり、乃ち永巷に戚夫人を囚へて、髡、絺衣を衣て春かしむ。夫人春き、且つ歌うて曰く、子爲王、母爲虜、終日春薄暮、常與死爲伍、相離三千里、當誰使告汝とある。

【題義】樂府詩集に「漢書に曰く、詔して、中山靖王贈、及び孺子妾氷、未央の才人に歌詩四篇を

賜ふと。如淳曰く、孺子は幼少、孺子と稱す。妾は宮人なりと。顔師古曰く、孺子は王妾の品號あるもの。妾は王の衆妾、氷は其名。才人は天子の内官。按ずるに、これは歌詩を以て中山王、及び孺子、妾、未央の才人等に賜ふを言ふのみ。これを累言す、故に及といふなり。而して、陸厥、歌を作り、乃ち之を中山孺子妾といふ、これを失ふこと遠しとある。して見ると、李白の此題も、陸氏の誤を承けたので、中山孺子歌とか、中山妾歌とかいへば、それで善いので、孺子妾といふやうに重ねては意味を成さぬ譯である。李白の此詩は、唯だ諸侯後宮の美人を詠じたので、中山とは、格別の關係もない。

【詩意】中山王は、天子の近親で、非常に尊崇される御方であつて、その後宮の宮人といへば、寵貴

もとより思ふべく、特に色の美なるを以て珍とせられ、やがて、專房の榮を擅にして居るので、たとひ、李延年の妹で漢の武帝の寵を承けた彼の李夫人には相若かざるにせよ、これも亦た當時に於ける絶世の美人であつた。抑も、桃李は、後宮の壺の中に生じ、初春の時分から花が咲いて、人目を驚かすので、その世に持て囃されるのも、必然な事であるが、榮枯盛衰、もとより常ならず、さきに貴かりしもの、俄に賤しくなり、折角寵を得たものも、寵の衰へることもある。しかし、それは、天命であつて、自分の身に由る譯でもない。かくて、蓮の花は、秋霜一たび到れば、見る間に凋み、團扇も、涼風立ちし後は、全く用なき爲めに棄てられ、やがて、塵が網を爲して之を掩ふやうになる。現に戚夫人の如きも、高祖の崩後は、無残にも緑の髪を剃り落され、米春の仕事を命せられたので、萬古の後までも人をして、悲辛の想に堪へざらしめる。かの中山の妾たるものも、これを思うて、決して、今日の寵を誇つてはならぬ。

荊州歌

荊州の歌

白帝城邊足風波。

白帝城邊、風波に足る、

瞿塘五月誰敢過。

瞿塘五月、誰か敢て過ぎむ。

荊州麥熟繭成蛾。

荊州麥熟して、繭、蛾と成る。

【字解】

〔一〕白帝城 王琦の註に「通典に、夔州奉節縣に白帝城あり。按ずるに、唐の奉節縣は、即ち漢の魚復縣なり。王莽の時、公孫述、蜀に據る。白龍あり、殿前の井中より出づ。述、以て端となし、自ら白

繰絲憶君頭緒多。

絲を繰つて、君が頭緒の多きを憶ふ、

撥穀飛鳴奈妾何。

撥穀飛鳴、妾を奈何。

帝と稱し、更めて魚復を號して白帝城といふ。劉先主、改めて永安宮といふ。即ち其地。夔州府城の東の山上に在り。荊州圖記に曰く、白帝城は、西、大江に臨み、東南高さ二百丈、西北高さ一千丈、水經註、廣溪峽中、瞿塘黃龍の二灘あり、夏水洄復、淤汜出むところ、と。太平寰宇記、瞿塘峽は夔州の東一里に在り、古しへの西陵峽なり、連崖千丈、奔流電激、舟人これが爲に恐懼す」とある。〔二〕撥穀 本草に「陳藏器曰く、布穀は鳴鳩なり。江東、呼んで獲穀となす、亦た郭公といふ。北人は、撥穀と名づく。鷓に似て長尾、牡牝飛鳴、翼を以て相摩撃す」とある。

【題義】

唐時の荊州は、山南東道に隸し、江陵、枝江、當陽、長林、石首、松滋、公安、荊門の入縣を領し、天寶元年に改めて江陵郡とした。即ち今の宜昌附近一帯で、少しく峽江にかかつて居る。白帝城、瞿塘峽などは、はるか上流に在る。そこで、荊州歌は、主として、長江筋の船商人の妻などの言葉を借りて、情思を述べたのである。

【詩意】

白帝城邊は、風波の荒い處で、五月頃になると、非常に水嵩が増加し、例の灘堆を以て知らるる瞿塘峽などは、たださへ險難の場所であるから、到底、通過することは出来ないと思ふ。さういふ處へ良人が行つて、今に至るまで便が無いから、家に居ても、甚だ氣遣はしい。時しも、ここ荊州に於ては、麥が熟し、繭が出来て蛾となる頃に成つた。そこで、自分は、其繭を煮ながら、絲を繰りつつ、君を憶へば、心緒紛紛と亂れて、理めることが出来ない。かの鳴鳩は、常に雙飛して、面

白げに鳴いて居るが、人は、さういふ譯には行かず、今鳴鳩の聲を聞くにつけて、益す腸を斷つばかりである。

【餘論】梁の簡文帝の荊州歌に、雉飛麥熟妾思君と云ふ句があるから、この詩にも、麥を點出し、そして、わざと、撥穀を倩ひ來り、原詩の趣を帶んで、いくらか字を變へた處に、構想の工を見るべきである。桂臨川は、この詩を評して「李詩短章、荊州歌等の作の如きは、ともに風雅に出で、以て之を管絃に被らしむべき者なり」といひ、乾隆御批には「古質、漢に入る。風人の遺韻を得たり。樂府の妙處、是の如く、是の如し」とある。

設辟邪伎鼓吹雉子斑曲辭

辟邪伎を設け、雉子斑の曲を鼓吹するの辭

辟邪伎作鼓吹驚

辟邪伎作つて鼓吹驚く。

雉子斑之奏曲成。

雉子斑の奏曲成る。

喔咿振迅欲飛鳴。

喔咿振迅、飛鳴せむと欲す。

扇錦翼雄風生。

錦翼を扇し、雄風生ず。

雙雌同飲啄。趨悍誰能爭。

雙雌同じく飲啄、趨悍誰か能く争はむ。

乍向草中耿介死。

乍ち草中に向つて、耿介死し、

不求黃金籠下生。

黃金籠下に生くるを求めず。

天地至廣大。何惜遂物情。

天地至つて廣大、何ぞ物情を遂ぐるを惜まむや。

善卷讓天子。務光亦逃名。

善卷は天子を讓り、務光も亦た名を逃る。

所貴曠士懷。朗然合太清。

貴ぶところは曠士の懷、朗然として太清に合す。

【字解】一 喔咿 雉子の鳴く聲。二 趨悍 雉子の特性の勇悍なるをいふ。三 善卷讓天子 莊子に「舜、天下を以て善

卷に讓る。善卷曰く、予、宇宙の中に立ち、冬日に皮毛を衣、夏日は葛絺を衣、春は耕種し、形、以て勞動するに足る。秋は收斂し、身、以て休食するに足る。日出でて作り、日入つて息ふ。天地の間に逍遙して、心意自得す。吾、何ぞ天下を以て爲さむや。夫子の予を知らざるを悲むなりと。遂に受けず。ここに于て、去つて深山に入り、その處を知るなし」とある。四 務光亦逃名 同じく莊子に「湯、桀を伐つて之に剋ち、務光に讓つて曰く、智者は之を讓り、武者之を遂げ、仁者之に居る。古しへの道なり。吾子、胡ぞ立たざるや」と。務光曰く、上を廢するは義に非ざるなり、民を殺すは仁に非ざるなり、人、その難を犯し、我、その利を享くるは、廉に非ざるなり、吾、これを聞く、曰く、その義に非ざるものは、その祿を受けず、無道の世には、その土を踐まず、況んや、我を尊くするをや。吾久しく見るに忍びざるなり、と。乃ち石を負つて、自ら盧水に沈む」とある。

【題義】樂府詩集に雉子斑を解し「古今樂錄に曰く、梁の三朝樂第四十一段、辟邪伎を設け、鼓吹して雉子斑の曲を作し、引いて去來す。辟邪は獸名、孟康の漢書註に、桃拔、一名は符拔、鹿に似て長尾、一角のもの、或は天鹿となし、兩角のもの、或は辟邪となす。辟邪伎とは、蓋し、假りに辟邪獸

の形を爲して舞ふなり」とある。梁の時分に、辟邪伎といつて、辟邪の形を爲して舞ふ舞曲があつて、その合の手には、雉子斑の曲を歌つたのである。雉子斑の古詞は、

雉子高飛止。黃鵠飛之以千里。雄來飛。從雌視。

といふので、首の二字を取つて、かく命名したのである。梁の簡文帝の作は、妬場時向隴といふので、全篇、雉を詠じてあるし、宋の何承天には、雉子遊原澤の一篇があつて、避世の士、志を清霄に抗げ、卿相功名を視ること、猶ほ氷炭の相容れざるがごとしといふ意味を述べてある。李白の此詩も、蓋し何氏に擬して作つたものと見える。

【詩意】辟邪伎の舞樂が始まると、鼓吹の聲が、おどろおどろしく聞こえる。かくて、合の手の雉子斑の曲に移つた。その曲の意味合は、雉子の飛ぶ様子を歌に作つてあるので、その音樂を聞いて居ると、そこへ雉子が飛び出して來たやうに思はれる。雉子は、啞喞と口を開き、羽ばたきをして、將に鳴き出さむとし、一たび錦翼を扇れば、雄風颯然として起り、兩雌を挾んで、同じく餌を啄み、水を飲んで居て、その凜凜しく勇まじげなる有様は、世に敵も無い様に思はれる。元來、雉子は、極めて耿介な鳥であつて、甘んじて草間に於て死し、決して立派な黄金の籠に入れて飼はれることを願はない。他の鳥は、命を大事と思ひ、黄金籠中に殘生を保つことを、この上もない榮譽の如く心得て居るが、この鳥に限つて、そんな事の無いのは、如何にも貴い處である。抑も、天地は至つて廣大な物

で、萬物を包含し、各その情を遂げしめるので、雉子の如き鳥を生じて、其性を全うせしめるといふのも、矢張、天地の徳である。人も亦た其通りで、善卷の如き、務光の如き、ともに古しへ耿介を以て知られた人物で、或は堅く斷つて天子に成らず、或は其名を逃れて山林の中に逃げ込んだのは、如何にも偉く、即ち人間の曠士である。従つて、これ等曠士の胸懷は、朗然として太清に合し、即ち天意に叶つたもので、これが即ち貴いところである。

【餘論】全篇は、雉子の耿介といふ處から一つの趣向を案出したので、善卷の如き、務光の如き、耿介の人物は、取りも直さず、李白の理想である處から、おのが感慨を其處に結び付けたのである。蕭士贇は「天寶の末、名を争ふものは朝に於てし、利を争ふものは市に於てす。太白の此詩、其れ諷するところあるか」といつたが、いかにも尤もらしく、乾隆御批も亦た其意を承けて「前半は題を傳へ、後半は意を據ぶ。隱者を高しとなす、故に往いて返らず。究むるに、何ぞ造物の大に關せむ。然れども、亦た各その志を行ふなり。白、本と高曠、故に其言かくの如し」とある。

相逢行

相逢行

相逢紅塵内。高揖黃金鞭。

相逢ふ紅塵の内、高く揖す黄金の鞭。

萬戸垂楊裏。君家阿那邊。

萬戸垂楊の裏、君が家は阿那の邊。

【字解】 高揖黃金鞭 黃金の鞭を揮ひながら會釋する。

【題義】 相逢行は、一に相逢狹路間行ともいひ、又長安有狹斜行ともいひ、その古詞は、漢人の作に係り、一寸長いが、李白の此作は、前の王昭君と同じく、あつさりと片付けた處に、一種の妙趣がある。

【詩意】 輕装せる遊俠の少年が、馬に跨り、紅塵を蹴立てて馳せ行くとき、向うからも同じ様な少年が来て、はたりと出合つた。すると、黄金の鞭を輕げに揮ひながら、一寸會釋し、片片が萬家の隱見する垂柳の中を指し、君の御住居は、どの邊でありますかといつて尋ねた。

【餘論】 兩少年の路上に相逢ふ狀を巧に寫し出して、さながら人物が活躍する如く、ここらが李白の入神の妙處である。詩の齊風に子之還兮、遭我乎狹之間、竝驅從兩肩兮、揖我謂我儂兮といふのがあつて、齊國の少年輩が、遊獵の歸途、互に相逢うて、馬が良いとか、乗り振りが善いかいつて、寝め合ふことを述べてあるが、李白は、疑もなく、これを繼承したのであるが、新事物を點綴し、新詩體を以て之を詠出したのは、まさしく、換骨脱胎の妙手段である。それから、阿那邊は、何處とか、那邊とかいふのと全く同じであるが、阿那といふ字音は、垂楊を形容する婀娜といふ字と音が通じて居るから、これを用ひた爲に、前の垂楊といふ字が一層引き立つ譯で、まことに、細心の工夫である。乾隆御批には、「願華玉、五言絶を論じ、調古なるを以て上乘となし、情真なるを以て體を得たりとなす、李白これあり」といつて、特に此詩を激賞して居る。

古有所思行

古有所思行

我思仙人乃在碧海之東隅。我、仙人を思ふ、乃ち碧海の東隅に在り。

海寒多天風。海寒くして天風多く、

白波連山倒蓬壺。白波山を連ねて蓬壺を倒す。

長鯨噴湧不可涉。長鯨噴湧、渉るべからず。

撫心茫茫淚如珠。心を撫して、茫茫、涙珠の如し。

西來青鳥東飛去。西來青鳥、東に飛んで去る。

願寄一書謝麻姑。願くは、一書を寄せて、麻姑に謝せむ。

【字解】 一 碧海 十洲記に「東海の東、岸に登る一萬里、東に復た碧海あり、廣狹浩汗、東海と等し。水、すでに鹹苦ならず、正に碧色を作し、甘香味美」とある。 二 蓬壺 蓬萊。 三 青鳥 漢武故事に「七月七日、上、承華殿に于て齋す。正中忽ち一青鳥あり、西方より來つて、殿前に集まる。上、東方朔に問ふ。朔曰く、これ西王母、來らむと欲するなり」と。しばらくあつて、王母至る、二青鳥あり、鳥の如し、王母の旁に夾侍す」とある。 四 麻姑 神仙傳に「王遠、人を遣して麻姑を召す。麻姑至る。これ好女子、年十八九ばかり、頂上に于て髻を作り、餘髮散じ垂れて、腰に至る、衣に文采ありて、錦綺に非ず、光彩目に耀き、名狀

すべからず」とある。

【題義】古有所思行、一に古有所思、或は有所思に作つてある。漢の鼓吹鏡歌十八曲の一で、その古辭は、大略「思ふところあり、乃ち大海の南に在り、何を用つて問はむ、君に雙珠瑋簪を遺る、君の他心あるを聞く、之を焼き、風に當つて其灰を揚ぐ、今より已往、復た相思ふことなくして君と絶えむ」といふのである。それから、齊の王融は如何有所思、梁の劉繪は別離安可再といひ、ともに、離思を述べて居る。勿論有所思と題にさへ言つて居る位だから、如何なる事でも、心に思ふことを述べれば善いのであるが、李白は、例の神仙を好むところから、この詩に於ても、神仙を思ふことを述べてある。

【詩意】わが思ふところの仙人は、碧海の東に居るが、その海水は、冷たくして、又常に風立つて居る。かくて、白波は連山の如く、この爲に、蓬萊の仙島も倒されるかと思ふばかり。尤も海底には長鯨が居て、始終潮を噴いて居るから、かくの如く海が荒れるので、とても、徒渉することは出来ない。われは、神仙を慕ふこと切なれども、何分行くことが出来ない故に、胸を撫でて、涙が珠の如く迸つて落ちる。すると、青鳥が西から來て東に向つて飛び去つた。青鳥は、西王母の使をする位の鳥であるから、われは、これに手紙を託し、麻姑といふ女仙の處へ遣つて貰ひたい。麻姑は、東海の桑田となつたことを知つて居る位だから、ひよつとすると、碧海の東隅に我を涉して呉れるかも知れない。

【餘論】この詩の起首は、長短句が錯落して音節の妙を極め、殊に海寒多三天風の五言一句を挿んだ處

は、最も面白い。この句は、蔡邕の飲馬長城窟に枯桑知三天風、海水知三天寒といふ名句があるが、それを唯だ一句に、縮めたので、頗る來歴がある。乾隆御批にも、これを激賞して「海寒多三天風の五字、古人を融鑄して、自ら奇句を成す」といつてある。

久別離

久別離

別來幾春未還家。

別來幾春未だ家に還らず。

玉窓五見櫻桃花。

玉窓五たび見る櫻桃の花。

況有錦字書開緘使人嗟。

況んや、錦字の書あり、緘を開けば人をして嗟せしむ。

至此腸斷彼心絕。

此に至りて腸断え、彼の心絶ゆ。

雲鬢綠鬢罷梳結。

雲鬢綠鬢、梳結を罷む。

愁如回飈亂白雪。

愁は回飈の白雪を亂るが如し。

去年寄書報陽臺。

去年、書を寄せて陽臺に報ず。

今年寄書重相催。

今年、書を寄せて重ねて相催す。

東風兮東風。

東風、東風。

爲我吹行雲使西來。

我が爲に行雲を吹いて西に來らしむ。

待來竟不來。

來るを待てども、竟に來らず。

落花寂寂委青苔。

落花寂寂として青苔に委す。

【字解】 一 別來 別れてから、即ち別後。 二 櫻桃花 櫻桃、即ちゆすらうめの花で、櫻と桃とは異なる。本草に「櫻桃は樹甚しく高からず、春初、白花を開き、繁英雪の如し」とある。 三 錦字書 烏夜啼の機中織錦を見よ。 四 雲鬢 説文に「鬢は總髮なり、亦た之を髻といふ」とある。 五 回廊 回旋の風。 六 陽臺 行雲、巫山神女の記事、ともに前に見ゆ。

【題義】 胡震亨の説に「江淹の擬古、始に古別離あり、後乃ち長別離、生別離等の名あり、この久別離及び遠別離は、皆自ら之が名を爲る、その源は古別離より出づるなり」とある。李白の此詩は、矢張り、閨中思婦の情思を述べたのである。

【詩意】 別れてから今に至るまで、わが夫は遂に歸つて來ず、そこで幾年を過ぎたか、殆んど覺えて居らぬが、玉窓に倚つて五たび櫻桃の花の咲くを見たから、はや五年になる。今しも夫に寄せむが爲に回文錦字の書を織り、やつと、それが出來上つたから、遠く夫に贈らうと思ひ、念の爲に封を開き、反覆して之を讀むと、切なる我が情が其中に現はれて居るから、讀みもて行く内に、自分ながら、覺えず嘆息する。此方では、個様に腸を断ちつつ、この錦を織つて、態態彼に寄せるのであるから、この書が先方に著いて、受取られた時には、定めて、心を傷ましめるであらう。かくても、歸期は分ら

ぬ故に、折角の雲鬢綠髮をも梳つて結び上げることはなく、心中の愁は、白雪が紛紛として、旋風の爲に吹き廻されるが如くである。去年は、手紙を書いて、陽臺に居る夫に報じたが、まだ歸つて來ぬので、今年も、再び書を贈り、是非早く御歸りなさいといつて催促したが、容易に歸つて來さうにもない。東風は、西に向つて、はるかに陽臺の方に吹き付けるから、我が爲に、行雲を吹き回して、此方へ來るやうにして貰ひたい。しかし、何時まで待つても、夫は歸り來ず、やがて今年の春も亦暮れ盡し、落花片片として青苔に委するやうになつた。

【餘論】 東風に寄語する中に、夫を直接に指さずに、巫山神女の行雲に喩へた處は、情思の極めて深い處で、又趣ありげに聞こえ、全篇中の精彩である。これを引き出す爲に、上に陽臺を點出してある。それから、結末の落花は、前の五見櫻桃花と照應して、結構自然に緊密である。乾隆御批には「一往纏綿、謂はゆる縁情の什、却つて自ら綺靡に涉らず」とあつて、善く其妙處を盡して居る。

白頭吟

白頭吟

錦水東北流。波蕩雙鴛鴦。

錦水、東北に流る、波は蕩す雙鴛鴦。

雄巢漢宮樹。雌弄秦草芳。

雄は巢ふ漢宮の樹、雌は弄す秦草の芳。

寧同萬死碎綺翼。

寧ろ萬死を同じうして、綺翼を碎くも、

不忍雲間兩分張。
此時阿嬌正嬌妬。
獨坐長門愁日暮。
但願君恩顧妾深。
豈惜黃金買詞賦。
相如作賦得黃金。
丈夫好新多異心。
一朝將聘茂陵女。
文君因贈白頭吟。
東流不作西歸水。
落花辭條羞故林。
兔絲固無情。隨風任傾倒。
誰使女蘿枝。而來強縈抱。

忍びず、雲間兩つながら分張するに。
この時、阿嬌、正に嬌妬。
獨り長門に坐して、日暮を愁ふ。
但だ願ふ、君恩、妾を顧みること深きを。
豈に惜まむや、黄金、詞賦を買ふを。
相如、賦を作つて黄金を得たり。
丈夫、新を好んで、異心多し。
一朝將に聘せむとす、茂陵の女。
文君因つて贈る白頭の吟。
東流は西歸の水と作らず。
落花條を辭して故林を羞づ。
兔絲固と情なし、風に隨つて傾倒に任す。
誰か女蘿の枝をして、而來強ひて縈抱せしむ。

兩草猶一心。人心不如草。
莫卷龍鬚席。從他生網絲。
且留琥珀枕。或有夢來時。
覆水再收豈滿杯。
棄妾已去難重廻。
古來得意不相負。
祇今惟見青陵臺。

兩草猶ほ一心、人心は草に如かず。
卷く莫れ龍鬚の席、從かす他の網絲を生ずるに。
且つ琥珀の枕を留めよ、或は夢の來る時あらむ。
覆水再び收むるも、豈に杯に満たむや。
棄妾すでに去つて、重ねて廻り難し。
古來得意相負かず。
祇今惟だ見る青陵臺。

【字解】 一 錦水 錦江、一に灌錦江といふ。華陽國志に「錦江は、錦を織つて、その中に灌へば鮮明、他江に灌へば好からず」といひ、一統志に「二江、一は汶江と名づけ、一は流江と名づく、成都府城の南七里を經。蜀守李冰、すでに離堆を鑿ち、又二渠を開く。一渠は、永康より新繁を過ぎて、成都に入る、これを外江といふ。一渠は、永康より郫を過ぎて成都に入る、これを内江といふ。蜀人、この水を以て錦を濯へば鮮明、故に又錦江と名づく」とある。【二】雙鸞 古今註に「鸞は水鳥、鸞の類なり、雌雄未だ嘗て相離れず、人その一を得れば、一は思つて死するに至る、故に匹鳥といふ」とある。【三】分張 分離に同じ。【四】阿嬌 漢の武帝の陳皇后、その事、前に見ゆ。【五】相如作賦 司馬相如の長門賦の序に「孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得たるも、頗る妬、別に長門宮に在り、愁悶悲思、蜀郡成都の司馬相如、天下文を爲るに工なるを聞き、黄金百斤を奉じて、相如の爲にす。文君酒を取り、因つて悲愁を解くの辭を千む。而して、相如文を爲り、以て主上を悟らしめ、皇后復た親幸を得たり」とある。【六】兔絲 爾雅に「唐蒙は女蘿、女蘿は兔絲」とある。王琦の註に「古今、その二物たるを疑ふもの多し、博物志、魏の文帝の記するところ、諸物相似亂

するもの、女蘿は兎絲に寄生し、兎絲は木の上に寄生し、根、地に着かずと。然らば女蘿は兎絲の上に寄生するものあり、釋草の女蘿兎絲、或は亦た此義のみ」とある。李白は、ここで二草を別の物と見て居る。【七】龍鬚席。通鑑註に「龍鬚草を以て織り成す、今淮上安慶府の居人、多く能く龍鬚席を織る」とある。【八】琥珀枕。太平御覽に引ける廣雅に「琥珀は珠なり、地中に生ず、その上及び傍に草を生ぜず、淺きものは四五尺、深きものは八九尺、大、斛の如く、皮を削り去れば、琥珀を成す、初め時は桃膠の如く、凝堅乃ち成る。その方人、以て枕と爲す。博南縣に出づ」とある。【九】覆水再收豈滿杯。後漢書に「何苗、兄進に謂つて曰く、覆水收めず、宜しく深く之を思ふべし」とある。【一〇】青陵臺。獨異志、搜神記に「宋の康王、韓朋の妻美なるを以て、これを奪ひ、朋を以て、青陵臺を築かしめ、然る後、これを殺す、その妻、喪に臨むを請ひ、遂に身を投じて死す。王、命じて、臺の左右に分埋す。期年にして、各一梓樹を生ず、大なるに及び、樹の枝條相交る、二鳥あり、その上に哀鳴す、因つて之を號して相思樹といふ」とあり、太平寰宇記に「河南道濟州鄆城縣に青陵臺あり。郡國志に云ふ、宋王、韓憑の妻を納れ、憑をして、土を運んで青陵臺を築かしむ。今に至つて、臺跡依約」とあり、一統志に「青陵臺は、開封府封邱縣界に在り、宋の康王、その舍人韓憑の妻を奪はむと欲し、乃ち臺を築いて之を望む。憑の妻、詩を作つて曰く、南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、羅當奈何」と。遂に自ら縊れ死す」とある。

【題義】白頭吟は古樂府の題である。西京雜記に「司馬相如、將に茂陵の人の女を聘して、妾と爲さむとす。卓文君、白頭吟を作り、以て自ら絶つ。相如、乃ち止む。詞に曰く、

皚如三山上雪。皎若三雲間月。聞君有三兩意。故來相訣絶。今日斗酒會。明日溝水頭。躑躅御溝上。溝水東西流。淒淒重淒淒。嫁娶不須啼。願得一人心。白頭不相離。

これは、正史には見えぬ、そして、西京雜記は晉の葛洪の撰に係ると稱し、大分年數を隔てて居るから、眞否の程は分らず、要するに、謂はゆる小説であるが、極めて詩的であるから、後人の好題目となつて居る。李白の此詩は、餘論の項に引く蕭士贇の説に據ると、當時の史實と關係があるといふが、

そんな事には必ずしも拘泥せずとも善い。

【詩意】濯錦江の水は、成都の郭外に在つて、東北を指して流れて居る。その川波に蕩かされて、二つの鴛鴦が仲睦まじく水上に浮んで居た。その雙鴛鴦は、錦水の流に随つて、やがて長安に來り、雄は漢宮の樹に巢ひ、雌は秦草の芳を弄し、終始同居して、決して相離れず、萬一の場合には、ともに綺翼を碎いて死んで仕舞ふとも、雲間に向つて飛び去つて、各、方向を異にするといふやうな心は決して無い。今司馬相如と卓文君とは、丁度この雙鴛鴦の如く、長安に上りし後、相如は武帝に事へて、毎日參朝し、文君は留守居をして家を守り、仲善く暮らして居て、相離れるやうな心は、全く無かつたのである。その頃、武帝の皇后、即ち幼名を阿嬌といつた人は、初め寵幸を擅にして居たが、後に様様な女が後宮に這入つて來た爲に、婦人の弱點として嫉妬を起し、その爲に罪せられて、長門宮に押し込められた身となり、深き愁に沈んで、長き日を暮らし兼ねて居るといふ不幸な境涯。そこで、どうかして、本の通りに、君寵を得たいといふので、さまざまの手段を盡し、司馬相如の辭賦に長ずるを聞き、千百の黄金をも惜むところに非ずとして、澤山な潤筆料を贈り、そして、相如の一賦は、見事に武帝の御心を回して、陳皇后は、再び後宮に戻られた。かくて、司馬相如は、多分の金が手元に残ると、男は兎角新しいものが好きで、異心多きものである處から、文君がそろそろ鼻に付き、この金で、茂陵

の女子を聘して妾としやうとした。氣の毒なのは卓文君で、おのが境涯を悲む餘り、白頭吟と題する詩を作つて相如に贈つた。げにや、東に向つて流るる水は、決して、再び西へは歸らず、一朝落花となつて枝を辭したものは、再び舊の林に返ることを羞とすると同じく、一旦訣絶した上は、再び舊へは返らぬといふ決心であつた。かの兔絲は、もとより無情の物で、始終風に隨つて、右に左にと、何處へでも傾倒する。そこで、立派な丈夫な木にでも身を寄せたら、先づ善いが、女蘿といふ同じ様な葛の枝へ持つて往つて喰付いたから、どうにも仕方がない。元來、女子は、もとより人に頼るべきもので、その相手が異心を持たぬ人であれば善いが、女蘿の如く、同じく他に巻き付きたがるものではないので、現に相如は茂陵の女に心を寄せて、頼み甲斐なきものと成り果てて仕舞つた。しかし、兔絲も、女蘿も、兩草ともに一つ心で、互に物に縈り付く性を持つて、相離れざる處は、しほらしく、そして、相如は實に其草にさへ及ばぬものである。さきに、君と妾と一處に坐つた、龍鬚草で編んだ此席は、たとひ蜘蛛が巢を張つても、どうか卷かずに置いて下さい。それから、琥珀の枕は、妾が平生用ひたものであるから、その儘にして、龍鬚の席の上に置いて貰ひたい。これは何の爲かといふと、君と決然別れるとも、なほ昔の戀しきままに、或は夢中に此處へ來ることがあるかも知れぬから、その時、魂の留まる處としたいのである。しかし、おもへば、それは未練といふもので、譬にも云ふ通り、一旦覆へした水は、元の杯に満たさうと思つても、到底駄目なので、妾も、一たび君に

棄てられた上は、重ねて歸つて來ることは出来ぬであらう。むかしから、貧賤の中こそ、糟糠の妻は決して棄てないと云つて居るものの、得意に成つて相負かぬものは、殆んどない。唯だ韓朋は其妻を奪はれて、宋の康王の爲に殺され、そして、その妻なるものも、亦た青陵臺の上から投身して夫に殉じたといふが、これこそ眞に相負かざるもので、その他は、富貴の位地に至れば、容易に其舊を忘れるものばかり、今更ながら、人心は洵に頼み難く、わが今日の不幸も、致方ないものとして、斷念する外はない。

【餘論】この詩は、三段に分つべく、錦水東北流より不忍雲間兩分張に至るまでが第一段で、相如文君を點出せず、錦江と鴛鴦とを假りて、二人の遇合を敘した。此時阿嬌正嬌妬より落花辭條羞故林に至るまでが第二段で、卓文君が、白頭吟を作つた始末を事實の儘に寫した。兔絲固無情より結末に至るまでが第三段で、作者自身が卓文君と成り澄まして、心中の苦悶を述べて居る。そこで、第一段は、詩の六義に謂はゆる比、第二段は賦、第三段は文君心中の解剖といふ様に、順序が井然として、一絲紊れざる趣がある。蕭士贇は「この詩は、其れ明皇武妃を寵して皇后を廢するが爲に作るか。その事、詳に前に見ゆ。唐の詩人、多く春秋を引いて、魯諱の義と爲し、漢武を以て明皇に比す、中間義を比し、事を引く、讀者自ら見む。蓋し、王皇后は、乃ち玄宗臨淄王たりし時に聘するところ。龍鬚席は、晉の東宮の事、意在るあり。琥珀枕は、皇后の事、意謂へらく、一枕遊仙の時、夢中或は相